公益財団法人マツダ財団委託研究

「広島 20-30 代住民意識調査」 報告書 (統計分析篇)

2015年7月

轡 田 竜 蔵 (吉備国際大学准教授)

# はじめに

マツダ財団は、科学技術の振興及び青少年の健全育成を目的とする財団である。このうち、青少年健全育成に関しては、設立以来30年を通して様々な事業を進めてきた。青少年の対象は、幼児から高校生まで、大学寄付講義を含めると大学生まで、幅広く対応してきている。

マツダ財団の設立趣意書には、青少年健全育成の最終的なゴールは明記されていないが、「社会人として独立して人生が送れるようになること」であることは、明らかである。

だとすれば、青少年の最終的なステージというべき「社会人になる直前の若者」或いは、「社会に出て間がない若者」に焦点を当て、彼らの自立・成長を支援しなければ、青少年健全育成という事業の完結とは言えないのではないか。言い換えれば、前述の若者の自立・成長支援の領域に、我々としての答えを見出さなければ、青少年の健全育成に貢献できたとは言えないのではないか。

このような反省に立って、「若者」に焦点を当て、彼らを取り巻く環境、彼らの実態、将来に向けての問題点、解決すべき課題を明らかにしたいと考えた。

そこで、現在の若者の実態を、まずは先入観を持たず中立に客観的にその事実を把握するために、長く岡山県で「若者問題」に関する調査を継続してこられた、吉備国際大学の 轡田竜蔵准教授に、広島県における調査・分析をお願いした。

今回の調査を通じて、広島の若者が抱える本質的な問題点が明らかになり、若者が希望を持てる社会の実現のための基礎資料として、広く社会でお役に立てていただけるなら幸いである。

平成 27 (2015) 年 7 月 公益財団法人 マツダ財団

#### マツダ財団設立趣意書

我が国経済はめざましい成長を遂げ、今日多くの国民が、日常生活の中で豊かさを享受しております。

これには、科学技術の発展のあずかるところが大きく、産業界も厳しい環境を克服し、高度の技術革新をすすめる ことでその一翼を担ってきました。換言すれば、天然資源に恵まれない我が国は、人びとの英知と勤勉さを資源とし て科学技術の振興を図ることによって、国際社会に伍し、社会経済の発展を成し遂げてきたといえます。このことは、 未来社会においても同様であると考えます。

一方、急速な経済成長は、国の内外における様々な分野で新しい課題を提起してきました。工業化社会、さらには情報化社会の進展による社会環境の変化が、青少年の社会生活に多様な影響を及ぼしていることもその一つであります。物質的な豊かさが精神的な豊かさをもたらさず、むしろ青少年の心の荒廃を加速しているのではないかと指摘されています。心身共に発達形成期にある青少年の育成に、今まさに適切な施策や方途を講ずることが望まれる所以であります。

人びとが共に繁栄を分かち合い、心豊かに生きることのできる社会の実現を願うとき、調和のとれた科学技術の発展と、将来これらを担うべき青少年の健全育成とが相まって達成されていくことが大切と考えます。

マツダ株式会社は、新しい価値を創造し、人びとの喜びをひろげていくことを経営理念として社業に精励しておりますが、このほど実施した社名変更を記念し、併せて創立 65 周年を来年に控えたこの時期に、経営理念の一端を具現することを願って、科学技術の振興と青少年の健全育成のための助成等を主な事業内容とするマツダ財団を設立し、広く社会の発展に役立てようとするものであります。この財団の趣旨が我が国だけでなく、国際的なひろがりの中で活かされれば、これに過ぎる喜びはないと考える次第であります。

昭和 59 (1984) 年 10 月

# 目次

第一章	調査の概要 p.7
1 • 1	問題意識―「地方の若者」についての総合的社会調査
1 • 2	調査地の選定―「地方都市」の府中町、「中国山地」の三次市
1 · 3	調査方法― 郵送調査で867ケースを回収
1 • 4	調査項目/分析レポートの読み方― 重回帰分析と偏相関分析を中心に
第二章	調査対象者の社会的属性 ····· p.13
2 • 1	世帯構成 一世帯内単身者の多い府中町東部 (ニュータウン) と三次市周辺部 (農村部)、単身者・夫婦家族が多い府中町西部 (商業地) と三次市中心部
2 • 2	配偶者と子の有無 ―晩婚傾向の府中町、非婚者多い三次市
2 • 3	「地元」の範囲/居住歴 ―転入層の多い府中町、U ターン層の多い三次市
2 • 4	地域活動・社会活動への参加 一積極的参加ありは3割程度、三次市がやや活発
2 · 5	生活圏 一地元イオンモールに集まる府中町、休日は広島に向かう三次市
2 · 6	学歴 一高学歴傾向の府中町、低学歴傾向の三次市
2 · 7	雇用 一製造業が最多で全国平均に近い府中町、医療・福祉が突出する三次市
2 · 8	就労時間と家事時間 一大都市と変わらぬ長時間労働、家事時間の性差も大きい
2 • 9	収入 一全国平均値に近い府中町、やや低めの水準の三次市
第三章	生活に対する評価 p.27
3 · 1	階層意識 一世帯年収 400-500 万が中程度、「就労時間長め」「30 代」は下がる
3 · 2	生活時間についての満足度 一時間貧乏な「子あり」、階層意識も下がる
3 · 3	経済状況についての評価 一圧倒的にネガティブ
3 · 4	生活満足度 ―「世帯年収 400 万円未満」、「父または母との同居」はネガティブ
3 · 5	自己充足的傾向 一友人または配偶者がいれば、「毎日の生活は楽しい」
3 · 6	結婚生活とその見通し 一大卒未婚女性の「結婚できないかも」不安が大きい
3 · 7	親への依存 ―パラサイトシングルのみならず、多くの既婚者も親に依存
3 • 8	社会状況への経済的適応 一ゼロ成長時代のジレンマ
3 · 9	趣味 一「個性やこだわり」を求める子無し20代男性の6割は「おたく」
3 · 10	生活時間についての価値観 一余暇は「家族とともに楽しみたい」が8割台
3 · 11	家族によるケア負担 ―親について「子どもが家で介護すべき」が多数派

3 · 12	男女の家事分担についての考え方 一平等負担の考え、意識上は性差なし
第四章	仕事に対する評価 p.48
4 · 1	仕事についての現状評価 ―ややネガティブ、女性の満足度が高い三次市
4 · 2	仕事の将来展望 ―職種・業種を問わず、厳しい見通し
4 · 3	職場の待遇や就労環境 一給料や報酬への不満、就労時間が長い人の強い不満
4 • 4	仕事の魅力 一就労時間の長い人のモチベーションは低い
4 · 5	転職志向 ―転職を考えていない人のほうが「将来に希望」
4 · 6	仕事に対する自信 一家事・育児との両立、女性は自信に、男性は負い目に
4 · 7	仕事のモチベーションと長時間労働 ―「やりがい」搾取か「勤勉」搾取か
4 • 8	職場の対人関係 一「組織の一体性」と「個人の自由な意見の尊重」は両立?
4 • 9	出産後の女性の職業継続 ―「専業主婦」は男性よりも否定的
第五章	地域に対する評価 p.55
5 · 1	地域の満足度 一府中町は約9割、三次市は5割台と大差
5 · 2	交通の問題/モータリゼーション 一三次市の強い不満、つまりは広島への遠さ
5 · 3	地域外への移動への関心 ―他地域での生活経験の有無による違い
5 · 4	「若者や子育て世代」にとっての地域 ―生活環境はいいが、雇用環境はネガラ
	ィブな府中町、いずれもネガティブな三次市
5 · 5	地域の交友関係についての満足度 一地元出身者と地元外出身者の格差
5 · 6	地域定住意識 ―「ずっと住み続けたい」のは府中町7割台、三次市5割台
5 · 7	田舎志向/地方都市志向/大都市志向 ―圧倒的に弱い大都市志向
5 · 8	地域開発についての価値観 一商店街に興味乏しく、開発への期待大きい三次市
5 · 9	地域コミュニティー地域活動への関心、男性が高い三次市、女性が高い府中町
第六章	日本社会・政治に対する評価 p.7
6 · 1	日本社会・政治の状況についての満足度 ―圧倒的にネガティブな評価
6 · 2	日本社会についての「不安」 一非正規雇用の主婦に特に強い社会状況への不安
6 · 3	日本の社会環境についての評価 ―経済格差との強い関連
6 · 4	日本社会の規範をめぐって ―「日本は内向きだと思う」人が大多数
6 · 5	社会問題や政治への関心 一地域活動・社会活動への参加が影響
6 · 6	外国人受け入れの是非 一人口減少進む三次市のほうがポジティブ

第七草	人生に対する評価 p.83
7 · 1	自分の現状についての評価 ―ライフコース上の達成による格差
7 · 2	交友関係についての現状評価 ―各種グループ活動への参加の有無が関連
7 · 3	堅実志向 一20代の大半にとって「平凡」「人並み」はネガティブワードではない
7 • 4	自己実現志向 ―チャレンジングな 20 代、諦める 30 代?
7 · 5	利他的な「ソーシャル志向」―ポジティブな 20 代、ネガティブな 30 代
第八章	総括 p.93
8 · 1	地方暮らしは決して楽ではない 一仕事と子育てのメリットはあるか?
8 · 2	地域満足度の意味するもの 一府中町と三次市の消費環境格差とモビリティ
8 • 3	ソーシャル・ネットワーク格差 ―三次市のほうが地域活動・社会活動が活発
8 • 4	居住歴の多様化/流動化する地域社会 —ハブとなる「Uターン」層
8 · 5	社会経済的格差 一ネガティブな非正規雇用と「サービス」従事者
8 • 6	自己充足(コンサマトリー)格差 ―「足るを知る」人たち
8 · 7	ダウンシフターの限界 ―さとりきれない若者たち
8 • 8	終わりに/問題提起 ―「対話」をつくる
資料 貿	質問紙サンプルおよび単純集計結果 p.109
参考図表	₹ p.141

# 第一章 調査の概要

# 1-1 問題意識

「失われた 10 年」は「失われた 25 年」にまで延びてしまった。日本は社会経済的停滞からの出口をなかなか見いだせていない。平均年収は総じて減少傾向にあり、雇用の不安定化、そして未婚率の上昇なども当分は続きそうだ。

このような厳しい時代状況のなかにあって、人々は生活や仕事、地域や日本社会の現状をどのように評価し、今後の人生をいかに展望しているのだろうか―。こうした大きなテーマを念頭に置きつつ、それを「広島の若者」についての総合的調査から展望することが、本調査プロジェクトの狙いである。

をして、本調査の意義は、前例に乏しい「地方の若者」に焦点を当てた大規模な総合調査を通して、「大都市圏」を中心になされたものに偏っている若者研究の議論に新しい視点を与えることである。現在、大都市と地方の格差が各方面で議論されているが、そのエビデンスとなる社会調査の資料が乏しい。地域間格差の議論の多くは、都道府県ベースの人口及び経済データの比較を主にした議論であり、若者の実態及び意識調査データに基づいた研究は乏しい。この点、本調査では867ケースという全国レベルの若者調査との比較を行うには十分な量の「広島の若者」のデータを集めることができた。これによって、若者研究に新たな地域間格差の視点を付け加えることができる。

そのうえで、本調査は、「若者」を一枚岩に語る「世代論」には慎重でありたいと思う。「世代の特徴」として語られることの多くは、実は時代によって変わらない「加齢要因」によって説明できたり、あるいは若者に限らない「時代要因」によって説明されたりする場合があるからだ。本調査でむしろ注目したいのは、「世代間格差」よりも、世代内における「ライフコースの多様化」である。すなわち、世代を超えて、誰もが向き合う/向き合ってきたはずのライフコース上での「自立」そして「将来展望」に関わる実態と意識についてである。親からの自立、生計の確保、居住地の選択、キャリア形成、家族形成等の諸課題からは、誰もが逃れられない。これらの諸課題に格闘しているさなかなのが「若者」である。こうした過渡期の課題をクリアすることによって、「若者」は「大人」になる。ところが、昨今の社会情勢のなかでは、こうした過渡期であるはずの「若者」というライフステージは長期化し、「大人」になったという感覚が得られないまま、中年期にさしかかろうという者も少なくないと言われている。したがって、重要なライフコースの選択を前にした「若者」意識の傾向を捉えるためには、学生を中心とした20歳前後に焦点を当てるのではなく、年齢層には幅があったほうがいい。そういうわけで、本調査では20歳から39歳までを対象とした。そして、分析にあたっては、全体的な回答傾向を把握し、それを評

価する一方で、社会的属性(経済状況、性別、就業状態や職業、配偶者や子の有無)等の 多様性に注意するべく心がけた。この点、これまで大都市を中心に行われてきた大規模な 若者調査の多くは、20 歳前後の「学生」を対象にしたものに偏っていたゆえに、若い世代 にとってのライフコース上の多様な課題に対する意識の分化を捉えるうえでは不十分であ った。本調査は、学生調査とは一線を画する若者調査を設計することで、この問題に向き 合いたいと考えた。

筆者は、岡山市から電車で約1時間のところに立地する中山間地の大学に勤務し、そこ を中心に「若者問題」に関する調査を 10 年来にわたって継続してきた。そのインタビュー 調査の成果の一端をまとめた「過剰包摂される地元志向の若者たち」という論文では、厳 しい社会経済的な制約条件(中央値は個人年収250万円)と「ぎりぎり」のところで折り 合いを付けながら、生活や人生を展望している中国地方の 20 代(学生を除く)の姿を描い た(樋口明彦・上村泰裕・平塚眞樹編『若者問題と教育・雇用・社会保障』、法政大学出版 局、2011年)。「地方暮らし」あるいは「地元」を志向する若者は、しばしば地域活性化に 資する人材としてポジティブに描かれることもあれば、あるいは逆に外に向かうエネルギ ーを欠いた視野が狭い人たちであるとしてネガティブにも描かれる。そんななか、筆者は 社会調査データに基づき、ポジティブとネガティブの両極に偏ることのない、ジレンマに 満ちた地方暮らしの状況を描くことにこだわってきた。その一方、阿部真大は 2012 年より 筆者と共同調査に取り組み、データを共有しつつも、「ぎりぎりで苦しい」というよりは、 むしろ「地方暮らしの豊かさ」に注目し、その知見を『地方にこもる若者たち』(朝日新書、 2013年)にまとめた。阿部は、地方暮らしの若者たちは狭い世界で満ち足りていると描か れがちだが、必ずしもそうではなく、「内にこもりつつ外に開いていく」という新しいコミ **ュニケーション・モード**によって特徴づけられるのではないか、という知見を提示した。 本調査は、こうした研究の問題意識を引き継ぎつつ、新たに広島の 20-30 代を対象にし

本調査は、こうした研究の問題意識を引き継ぎつつ、新たに広島の 20-30 代を対象にした、大規模で一般性の高い社会調査のエビデンスを提供することによって、今後の「若者」や「地方暮らし」に関する議論を活性化することをねらいとするものである。

#### 1・2 調査地の選定

先述の通り、本調査は地域間格差の視点を大切にし、「広島の若者」を取り上げる。ただし、広島と言っても、広島県の都市部と周辺地域では、若者の置かれた社会的状況には大きな格差があると考えられる。本調査では、「地方の若者」についての調査研究として一般化可能性の高い議論に資するために、都市部と周辺地域のそれぞれの典型的といえる自治体を選ぶという方針を立てた。そして、その二つの自治体は、無関係ではなく、お互いに繋がりがあったほうがいい。また、比較の意味でも、人口規模も似通っていたほうがいい。そうした観点から、「広島の若者」といっても、福山市を中心とした経済圏ではなく、広島

市を中心とした県西部の経済圏を中心に取り上げることとした。そして、広島県南部の自治体(江田島市など)は、呉市を中心とした都市圏と広島市を中心とした都市圏とが重なり合う位置にあり、消費や地域移動などの問題で分析要素が複雑になるため、これを除外した。また、東広島市のように、大きな大学が立地する自治体は、学生比率が高くなって典型性を損ねるので、これを除外した。こうした方針のもとで検討を進めた結果、都市部の代表として「安芸郡府中町」を、周辺部の代表として「三次市」を取り上げた。

府中町は人口 51,655 人で面積約 10 km。小学校区が5つしかない小さな自治体であり、全国の「町」のなかで最も人口密度が高い。20-39 歳はそのうち 12,681 人(総人口に占める割合は 24.5%)である。府中町は自治体としては独立しているが、東西南北を広島市に囲まれ、その社会経済的実態はほぼ広島市と一体化している。広島の最大企業である自動車メーカー、マツダ株式会社(以下、マツダ)の本社が立地するが、都市的特色としては企業城下町というよりも、むしろ広島の郊外住宅地としての性格が色濃い。府中町の「東部」は高度経済成長期に丘陵地を切り開いて開発した大規模なニュータウンが広がっている。一方、「西部」の平野部(府中中央小学校区、府中小学校区)は JR 広島駅まで1、2駅ととてもアクセスがよく、新規転入者にとって人気の高いマンションや賃貸住宅が多い地域である。人気が高い理由としては、店舗数が広島県で最多の商業施設である「イオンモール広島府中」の存在が大きい。「イオンモール広島府中」は、八丁堀や紙屋町周辺の繁華街と並んで、広島の消費秩序の中心である。

府中町と三次市は、それぞれ「地方都市」的環境と、「田舎」的環境の典型であると見られるだけではなく、相互に社会経済的に結びつきがあるという点で注目できる。両自治体は雇用圏や平日生活圏は異なっていが、休日生活圏は重なりあっている。また、府中町の人口は横ばいもしくは微増傾向にあるのに対し、三次市は人口減少が著しい。三次市の社会減の一部は、府中町を含む広島都市圏の社会増に繋がってもいる。そうした点を踏まえると、両地域は「地方中枢拠点都市」(三大都市圏を除く、人口 20 万人以上、昼夜人口比1以上の都市。広域的な地域再編が目指されるなかで近年しばしば使われる行政用語)とその圏外にある「周辺地域」の関係の典型として、連関させた考察が可能である。

#### 1・3 調査方法

本調査プロジェクトは、質問紙調査とインタビュー調査の二本立てで行った。

質問紙調査は、2014年7月3~31日、広島県安芸郡府中町および三次市の住民基本台帳 (2014年6月1日付)から無作為抽出された20~30代の住民を対象に、郵送法によって 実施した。実施にあたっては、府中町役場および三次市役所の全面的な協力が得られた。

配布数は計 3000 票 (府中町、三次市各 1500 票)。ただし、住所移動のため不達の調査票があり、実際に配布されたのは 2983 票 (府中町 1488 票、三次市 1495 票) であった。そのうち回収票は 867 票で、うち府中町 404 票、三次市 463 票となっている。回収率は全体で 29.1% (府中町 27.2%、三次市 31.1%) であった。

この他に、府中町、三次市在住の 20·30 代を対象にインタビュー調査を実施した。方法は、あらかじめ郵送調査で使った質問紙に記入をしてもらい、その後にひとりあたり 1時間半~2時間程度の時間をかけてその回答理由を直接に尋ねていくというものである。こちらは、2014年度中に約50人を対象に既に行ったが、いまだ継続中であり、2015年度末をめどに成果として発表する予定である。したがって、この調査報告書は、質問紙調査の結果分析を中心としたものである。

#### 1・4 調査項目/分析レポートの読み方

質問紙調査は、意識調査部分と実態調査部分からなる。

意識調査部分は、「生活」、「仕事」、「地域」、「日本社会と政治」、「自分の現状」の5テーマに分かれる。各テーマは、さらにそれぞれ「現状評価」について尋ねる部分と、「価値観」について尋ねる部分とに分かれ、合計 112 項目を用意した。一方、実態調査部分については、性別、年齢、居住歴、職業等の合計 34 のフェイス項目を用意した。詳細については、巻末に実際の調査に使用した質問紙を添付したので、そちらを参照していただきたい。また、そこには本調査の単純集計結果を記入しておいた。

以下のレポートは、設問ごとの単純集計を紹介したうえで、関連する質問とのクロス分析、主要な社会的属性を説明変数とする重回帰分析を中心とする統計分析を行い、統計学的に 95%以上 (ほとんどの場合は 99%) の確率で有意性があるとみなされた事実に限って記述している。「関連性がある」という記述がある場合、すべてこうした統計学的な手続きで有意性が確認されたことを裏付けとしている。報告レポートのなかに記述があることは、全て統計学的手法によって有意性が確認される事実に限られている。ただし、統計学的に詳細な記述は、煩雑になるので省略している部分もある。

すべて4点法の選択肢とした意識調査項目については、これを量的尺度とみなし、統計分析をした。また、その相対度数の記述はすべて、「4 全くそう思う」「3 どちらかと

いうとそう思う」を肯定的回答、「1 全くそう思わない」「2 どちらかというとそう思わない」を否定的回答とみなし、無回答を除いて計算した有効相対度数について記したものである。巻末資料では、賛成率 50%における 5% 有意水準で、どちらの傾向が強いのかについて、太字で示してある。

主な分析法として「重回帰分析」を使っているが、これは、一つの量的変数の分布に影響を与える要因として、複数の説明変数が要因として考えられるときに、そのうちどの変数に「説明力」があるのかを探るための統計学的な手法である。たとえば、ある項目について「20代」より「30代」の相対度数のほうが高いとわかっても、それだけでは年齢差に説明力があると結論できない。「30代」は「有配偶者」が多いためかもしれないし、「子有り」が多いからかもしれない。その点、「重回帰分析」をやれば、適切な説明ができるのである。本報告書においては、そのなかでも「ステップワイズ法(変数増減法)」という手法を採用した。これは、説明モデルの説明力が上がらなくなるまで、所与の説明変数の候補リストのうちから、一つずつ説明変数を取捨選択しながら増やし、最終的に有意水準5%の基準を満たす説明変数だけが説明モデルに残るというものである。説明変数の候補として取り上げたのは、社会的属性を示す以下の変数である。

- ・年齢 (20~39)
- ・性別 (ダミー 「男性」0 「女性」1)
- ・学歴 (ダミー 「在学中 (短大または高専)」「在学中 (専門学校)」「大学卒または大学院卒」「短大卒または高専卒」「専門学校卒」「高卒」「中卒」「その他」、基準変数「在学中 (大学・大学院)」)
- ・個人年収(各階級値の中央値に変換。100万円未満は「無職」は0円に、職業がある場合は50万円に換算。1000万円以上は1500万円に換算。)
- ・世帯年収(各階級値の中央値に変換。1000万円以上は1500万円に換算)
- ・就業状態と雇用形態(ダミー 「自営業主・家族従業員」「会社経営者・役員」「仕事が 主の非正規雇用」「家事が主の非正規雇用」「学生(非正規雇用)」「家事が主の無業 者」「学生(無収入)」「家事も通学もしていない無業者」、基準変数;「正規雇用」)
- ・職業(ダミー 「管理」「事務」「販売」「サービス」「製造作業・機械操作」「輸送・機 械運転」「運搬・清掃・包装」「建設作業」「保安」「農林漁業」「その他」、基準変数 「専門技術」)
- ・業種(ダミー 「建設業」「製造業」「電気・ガス・熱供給・水道」「情報通信」「運輸・郵便」「卸売・小売」「金融・保険」「不動産・金品売買」「飲食店・宿泊サービス」「生活関連サービス」「専門技術サービス」「その他のサービス」「教育・学習支援」「医療・福祉」「公務員」「その他」、基準変数「農林漁業」)
- ・配偶者の有無(ダミー)
- ・子の有無(ダミー)

- ・父または母との同居(ダミー)
- ・居住歴(ダミー 「ずっと地元」「他地域で就学後 U ターン」「他地域で就職後 U ターン」「結婚のため転入」「仕事のため転入」「就学のため転入」「住み替えのため転入」「その他」、基準変数「家族の都合のため転入」)
- ・地域(ダミー 「府中町」0 「三次市」1)
- ・各種の地域活動・社会活動への関与の程度(「趣味関係のグループの活動」「職場参加としての地域活動・社会活動」「地縁組織の活動」「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動」「業界団体・同業者団体・労働組合の活動」「政治団体の活動」「宗教団体の活動」「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」/それぞれの変数について「積極的に関与」4点、「一般的に関与」3点、「消極的に関与」2点、「関与していない」1点として、量的尺度化)
- ・週当たり就労時間
- ・週当たり家事時間
- \*「ダミー」というのは、質的変数を「0か1か」の量的変数に変換して計算したもの。

記述のなかで、「重回帰分析によると」と書いてあるところは、ひとつひとつ断っていないが、上記の説明変数の各種の組み合わせを全て考慮したうえで、最も有力な結果を記述している。また、地域や性別など、特定の社会的属性による違いが大きい質問項目については、地域や性別を限定した重回帰分析を合わせて行っている。そして、報告書末尾資料に、重回帰分析において「地域差」そのものに説明力があるか、t検定で有意差があった場合に単純集計結果を太字表示した(フェイス項目はt検定のみ。分析の詳細は本文参照)。

重回帰分析の結果の記述にあたっては、ステップワイズ法により最も説明力があるとみなされたモデルにおいて、95%以上(ほとんどの場合は 99%以上)の確率で有意とみなされていることを根拠とした。その場合、その変数の説明力を示す、標準化偏回帰係数(β)を(.123)のように挙示している。逆に言うと、上記の変数リストに挙げたある変数について記述が無いということは、その変数に目立った説明力が無く、ステップワイズ法で選ばれた最終的な説明モデルのなかに、説明変数として残っていないことを意味する。

また、意識調査項目間の関係については、クロス分析のデータを記述するほか、1%水準(場合によっては5%水準にも注目)で有意性が確認された相関関係に注目して記述している。ただし、年齢・性別・地域の回収サンプルサイズの偏りの影響を是正するため、その三つの変数の影響をのぞいた偏相関係数を(r=.456)のように記述している。

# 第二章 調査対象者の社会的属性

## 2-1 世帯構成

調査対象者の世帯構成について、どのような地域的な特徴が見出せるだろうか。全体的傾向とともに、その多様性にも注目しながらデータを見てみよう。

5人家族以上が府中町は 11.9%なのに対して、三次市は倍以上の 25.3%。三次市のほう が「大家族」が多い。ただし、「大家族」は農村部に集中している。人口集中地区にあたる 中心市街地(十日市地区、三次地区、八次地区、酒屋地区)では 5人以上の世帯は 17.3% であるのが、それ以外の地域(ほぼ農山村)ではその倍以上の 39.3%になる。

三次市で「大家族」の比率が高いわりには、世帯人数の平均値は、府中町 3.2 人、三次市 3.5 人とそれほど大きい差ではない。その理由は、有配偶者の親または配偶者の親との同居 率は府中町 5.9%、三次市 24.2%にとどまり、農村部を抱える三次市であっても、結婚した 場合に実家にそのまま居住する者は多数派ではないためである。また、三次市では中心市 街地を中心に単身暮らしの比率が高く、全体では府中町よりも多いためである(府中町 9.9%、三次市 11.2%)。世帯のあり方は多様化しており、三次市では「大家族」が多数派であるというイメージは必ずしも正しくない。

単身暮らしが 15%を超えるのは、三次市の中心市街地である「十日市地区」(21.1%)と工業団地のある「酒屋地区」(19.0%)。府中町では、イオンモールが立地する「府中小学校区」(15.3%)の比率が高い。「十日市地区」を中心とする三次市の中心市街地は県北唯一の人口集中地区(DID)で、単身者向けの賃貸住宅の供給もあり、市内周辺部の農村地帯や庄原市などの隣接市、さらには広島県内の各地から若い新規居住者を集めている。こうした地区では、大都市と同様に、地域社会とほとんど接点を持たないで生活をしている者も少なくない。

ただし、府中町でも三次市でも、その他のほとんどの地域において、**単身暮らし世帯の比率は1桁台である**。対照的に、両自治体とも「世帯内単身者」の比率が高い(府中町 24.3%、三次市 24.2%)。配偶者がいない者の親との同居率は、府中町 69.4%、三次市 67.0%と約三分の二を占める。「世帯内単身者」が全体に占める比率は両自治体間にあまり差はないが、自治体内部の地区特性の違いが大きい。府中町について言うと、高度経済成長期に造成された丘陵地の団地が広がる「東部」エリアは新規流入者が比較的少なく、親と同居している未婚者の比率が 34.6%と、「西部」15.0%の倍以上となる。一方、三次市について言うと、「中心地区」(ほぼ DID 地区) は 18.7%にとどまるが、それ以外は農村部がほとんどであり「周辺地区」では 32.7%とかなり多くなる。これは、すなわちこれらの地域での単身またはファミリーの新規居住者の少なさ=住宅供給の乏しさを意味すると考えられる。

また、結婚したら親との「別居」を選ぶ者が多数であるとはいえ、そのうち**多くは親元 に近いところに住んでいる「近居」者**である。 1 時間以内のところに親または配偶者の親 が住んでいるという有配偶者(同居者含む)は、府中町 66.3%、三次市 84.3%。**地方在住者の近居傾向はしばしば指摘されるところであるが、そうした傾向は拠点都市よりも三次市のような周辺部においてより強い**ことが示唆される。

#### 2・2 配偶者と子の有無

府中町と三次市とのあいだでは、有配偶率や子の有無にかかわるデータにはっきりとした差異がみられる。有配偶率を見ると、20代では府中町 37.1%(男性 34.7%、女性 38.2%)、三次市 43.0%(男性 39.3%、女性 45.4%)と、三次市のほうが比率は高い。だが、30代では逆転し、府中町 81.4%(男性 76.6%、女性 84.3%)、三次市 72.3%(男性 63.0%、女性 78.6%)と男女とも府中町のほうが高くなる。「世帯内単身者」の比率についても、20代では府中町のほうが三次市より多いが(府中町 47.7%、三次市 36.1%)、30代では逆転している(府中町 10.1%、三次市 16.8%)。そして、子どもがいる人の比率については、20代では三次市のほうがやや多いのに対して(府中町 21.2%、三次市 24.7%)、30代では有配偶率が府中町のほうが高いにもかかわらず、両自治体の差はあまりない(府中町 63.6%、三次市 65.4%)。

これらのデータの背景には、三次市は中学校や高校の同級生など、地域の友人関係のなかで結婚相手を見つけようとする人が多いので、20代の有配偶率が高くなるが、そのあとに出会いの機会がなくて30代の未婚率が高くなり、親元で生活する人の比率も多いという事情が考えられる。それに比べて、府中町の30代の有配偶率は高いが、晩婚の影響もあり、その割には子持ちの割合は低い。

こうした両自治体の対照性は全国の拠点都市―周辺部の関係に一般化できるのだろうか。 少子化問題の様相についての地域的偏差という観点からも、さらに検討してみる必要があ りそうだ。

#### 2・3 「地元」の範囲/居住歴

本調査では、父親と母親、配偶者の父親と母親、それに自らの配偶者と子どもについて、同居している/1時間以内に行ける場所に住んでいる/日帰りできる場所に住んでいる/日帰りできない場所にすんでいる/わからない/存在しない」の選択肢のなかから、それぞれの家族・親族の居住について尋ねている。

自分の親と同居または近居(1時間以内)している者は、府中町 64.8%、三次市 70.3%。 実家に近いところを「地元」と定義するならば、これは客観的な意味での「地元」居住率 に近い数字であるとも言える。この数字を評価するにあたって、国立社会保障・人口問題 研究所の『第7回 人口移動調査報告書』(2011年)を参照すると、20-30代の東京の「地元」居住率は、上の世代よりも上がっていて、やはり7割程度であり、府中町や三次市と それほど変わらない。「地元志向」がしばしば議論されるが、それは地方だけの傾向ではないということ、そして 20-30代に限れば、三次市や府中町でも親が近くに住んでいない者 も3割程度いる、という事実をまず確認しておきたい。

ただし、注意が必要なのは、一般に「地元」と考えられている地域の範囲は、上記の「実家から1時間以内」という定義よりも狭いということだ。居住地を尋ねる質問で、「地元に住んでいる」と回答したのは府中町 44.1%、三次市 52.3%しかいない。これはなぜかというと、主観的な「地元の範囲」が狭いからだ。「地元の範囲」として最も多かった回答は「出身の市町村全体」(府中町 45.8%、三次市 54.0%)であるが、それよりも狭い「小学校区」(府中町 15.1%、三次市 17.1%)や「中学校区」(府中町 17.3%、三次市 17.3%)と答えた者が3分の1程度いる。三次市であれば市内周辺部の農村地帯や隣接する庄原市から中心市街地へ、府中町であれば隣接する広島市から移動してきた者が少なくないが、それを地元外への移動と捉える者も多いと見られる。地区別の特徴を見ると、「出身の市町村全体」よりも「小学校区」「中学校区」のほうが多いのは、三次市の「河内地区」「田幸地区」「甲奴町」の三地区で、いずれも中心部の人口集中地区ではない農村地帯である。このうち「甲奴町」については、平成の大合併によって三次市に編入された旧市町村のなかでも最も三次市中心部から遠い(車で 30 分以上)という地理的事情が関係しているとみられる(「甲奴町」では60.0%が「小学校区」「中学校区」を地元と回答)。

一般には、「親との同居」がすなわち地元在住を意味するという考えが支持される傾向が強いようだ。親と同居しておらず、「実家から1時間以内」に居住している「近居」者のうち、「地元に住んでいる者」は府中町では15.0%、三次市では20.4%に過ぎない。これに対して、「親と同居している者」(府中町27.3%、三次市33.7%)のうち、府中町では86.5%、三次市で85.8%が「地元在住」と回答している。

主観的な「地元」定義に沿って居住歴を捉えた場合、「ずっと地元」に住んでいる人は府中町 25.6%、三次市 11.2%ととても少なく、大半の者は地元外に出た経験があると回答している。若い世代において、居住歴の多様化が進んでいるということが示唆される。三次市のほうが府中町よりも「ずっと地元」の比率が少ない理由は、三次市のなかに高等教育機関がほとんどなく、高卒後(場合によっては中卒後)に、広島市や大都市などの他地域に転出する者が多いためである。居住歴を見ると、三次市は「他地域で就学後に U ターン」してきた者の比率が 25.3%(府中町は 10.7%のみ)、「他地域で就職後に U ターン」してきた者が 14.9%(府中町は 4.7%)。三次市では、U ターン経験者は合わせると 4 割ほどとなり、地域の最大多数を占めている。

府中町については「ずっと地元」と回答した人が最大多数を占める。特に、世帯内単身者の多い「府中東小学校区」では35.0%を占めて最も多い。だが、「ずっと地元」と回答した者のうち全てが町外での居住経験がないかというと、必ずしもそうとは言えない。府中町で居住歴が「ずっと地元」と回答した者のうち、25%は「広島市を中心とする生活圏」が地元であると回答している(三次市は0%)。そのため、仮に府中町以外の都市圏内部での転居経験があっても、地元内移動と認識しているケースは少なくないと考えられる。府中町は社会経済圏的に広島市と一体化しており、地元の範囲を「広島市を中心とする生活圏」とする人の割合は全体で16.3%に及ぶ(三次市は3.7%)。

また、府中町は「Uターン」層が少ない一方で、「地元外」からの転入者が多く、合わせると「ずっと地元」と回答した人の割合より多い。特に多いのが「結婚で転入」した層(23.9%)と「仕事で転入」した層(16.4%)であり、三次市よりも多い(三次市はそれぞれ19.9%、12.1%)。特に、商業地区である「府中中央小学校区」ではこの二つの層だけで45.4%と半数近く、その他の理由の転入層も合わせれば61.3%にもなり、最も流動性の高いエリアであると見られる。ただし、親との同居・近居率を見てみると、「仕事による転入」者が21.2%と少ないのに対して、「結婚による転入」者は54.2%と多い。つまり、府中町には他地域からの転入層が過半数を占めるが、そのうち「結婚による転入」者(女性が多い)は、広島都市圏出身者が主であるのに対して、「仕事による転入」者(男性が多い)は他県などの幅広い地域の出身者が大多数を占めている。

#### 2・4 地域活動・社会活動への参加

本調査では、「積極的に参加」「一般的に参加」「消極的に参加」「参加していない」の4 段階の順位尺度で、地域活動・社会活動への参加度を尋ねている。「その他」を含めて、9 種類のカテゴリー別に項目を立てているが、そのいずれかに「積極的な関わり」があるの は、府中町 25.7%、三次市 34.3%。三次市のほうが府中町より多い。「一般的な関わり」を 含めると、府中町 72.8%、三次市 76.3%。「全く関わりがない」のは府中町 16.3%、三次 市 11.1%である。概していえば、何らかの地域活動・社会活動に積極的に参加している者 の比率は3割程度、あらゆる地域活動・社会活動について消極的ないし全く関わりがない 者の比率も2~3割程度ということになる。

地域活動・社会活動の積極性と最も関わりが深い変数は「他地域で就学後 U ターン」したという居住歴で、この層に限れば「積極的な関わり」があるのは府中町 30.2%、三次市 44.2%となる。三次市のほうが府中町よりも積極性が強い人の割合がやや多くなるのは、U ターン層の比率の多さによって説明できる部分が多い。その意味については、あとで考察してみたい。このほか、雇用形態としては「会社経営者・役員」、「世帯年収 600 万円以上」 (府中町 32.5%、三次市 44.7%)、「大卒以上」(府中町 30.3%、三次市 45.7%) であるこ

とも、「積極的な関わり」を強める傾向にある。

各種の地域活動・社会活動のうち、積極的に関与する人の比率が大きいのは「趣味関係のグループの活動」で、府中町 14.9%、三次市 24.5%。「消極的」である人も含め、関与する人全体の割合は府中町 51.9%、三次市 48.2%であり、特に三次市において積極的に関わる人の割合の高さがきわだっている。地域差そのものではなく、それは三次市の男性で「他地域で就学後 U ターン」した者で積極的に参加している者の度合が非常に高いことによって説明される部分が大きい(.096、41.2%)。また、活動の積極性と最も関係のある変数は「性別」(.214)。男性のほうが女性よりも積極的関与の度合いが高い(男性は府中町 17.9%、三次市 28.9%。女性は府中町 13.4%、三次市 13.0%)。このほか、「世帯年収高め」で増える一方(.130)、「父または母」と同居している者は関わりの度合が少ない(-.086)。また、「高卒」は参加の度合は低い(-.086)。

「職場関係の地域活動・社会活動」、「学校・保育所・幼稚園関係の活動」、「地縁組織の活動」の三つについては、地域社会の日常を支える重要な機能を持っており、関与している者の比率は5~6割と高い。だが、これらの活動に「積極的な関わり」がある者の比率は一桁台にとどまる。そして、どの活動についても、「世帯年収」が低いと参加の度合は低くなる(「職場関係」.160、「学校・保育園・幼稚園関係」.183、「地縁組織」.096)。

「職場参加の地域活動・社会活動」に関与する者は府中町 49.9%、三次市 62.2%。「医療・福祉」関係を中心に地域貢献に関わる職場は多いが、「積極的に関わっている」と回答した者は府中町 5.8%、三次市 8.3%にとどまる。参加の度合について、地域差に説明力がある(.136)。三次市のほうが地域に密着した仕事が多いためか、「職場参加の地域活動・社会活動」に関与の程度の強い人が多い。「就労時間」が長めで参加度は高まる傾向が強いが(.211)、「性別」による参加度の違いはあまりない。また、「世帯年収」が高め(.158)、「父または母と同居」(-.134) している場合や、「高卒」(-.102) で参加の度合が低くなる点は、「趣味関係のグループ活動」と同じである。

「学校・保育所・幼稚園関係の活動」に関与がある者は府中町 52.1%、三次市 59.5%。 積極的に関与している者は府中町 6.3%、三次市 12.6%とそれほど多くない。圧倒的に「子あり」の場合で参加の度合は増える(.521)。やはり「世帯年収」との相関もある(.183)。 また、「個人年収」が低ければ参加度が上がるが、それは「家事が主」の者の参加度が高いためである。

「地縁組織」については、関わりがある者の総計が府中町 45.8%、三次市 53.8%であるのに対して、「積極的な関わり」があるのは府中町 2.0%、三次市 8.3%とそのギャップは大きい。やはり、「子あり」の場合の参加の度合が高い(.195)。また、「仕事で転入」した人は参加の度合が弱い(-.147)。女性は全体としては参加の度合は低いが(-.112)、「非正規雇用の主婦」については多くなる(.117)。他のグループ活動と同様に、「世帯年収」とも相関がある(.096)。業種では、「農林漁業」(.097)や「公務員」(.077)の関わりが比較的深い傾向がある。

このほか、「業界団体・同業者団体・労働組合」「宗教団体」「政治団体」の関与については、何らかの関与があるのはそれぞれ1割程度だが、やはり積極的な関わりを持つ人は少ない。三次市のほうが関与者の比率、積極度の両方ともやや高いとはいえ、地域社会の諸団体の活動との関わりが薄い層が大半である。

また、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」に何らかの関与があるのは府中町 15.2%、三次市 19.6%と一定数いるが、「積極的な関わり」があるのは、府中町 1.8%、三次市 3.3%とやはりとても少ない。「一般的な関わり」を含めても、府中町 9.6%、三次市 9.9%と一割弱にとどまる。参加の程度に対して、「世帯年収」も「個人年収」も説明力を持っていないが、「大卒・大学院卒」の学歴を持つ場合、参加の程度が高くなる(.125)。そのため、「階層意識」と参加度が関係している(「生活水準は高いほう」 r=.164、「生活水準は低いほうではない」 r=.100)。職業・職種的には、「会社経営者・役員」(.156)、次いで「学生」(無収入.124、収入あり.088)の関わりがやや深いが、それ以外に広がっていない。従来型の地域社会の諸団体の流動化が進んでいる状況のなかで、そのオルタナティブと目される「新しい公共」の動きへの期待は大きいが、現段階では関与の積極性の度合という点でも、従来型の地域社会の諸団体に及ばない。また、府中町と三次市の比率に大きな違いはなく、「新しい公共」の今後の広がりを考えるうえで、地方の拠点都市と周辺部のどちらにより優位性があるかについて、データからは明確な差は出ていない。

各種の地域活動・社会活動への参加度の高さは、「階層意識」の強さと結びつく傾向がある。そして、なおかつ「金銭的余裕がある」という意識との相関もあるのは、「趣味関係のグループ活動」「職場関係のグループ活動」「業界団体・同業者団体・労働組合の活動」「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」である。このうち「趣味関係のグループ活動」と「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」については、「時間的余裕がある」人の参加度が高まる傾向がある。一方、「地縁組織の活動」「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」への参加は「階層意識」との関連は薄く、「学校・保育所・幼稚園関係の活動」については、積極的に参加しているのはむしろ「時間的余裕がない」人である。

#### 2.5 生活圏

モータリゼーションを前提としている地域社会において、生活圏は自治体内部で完結していない。日常生活のなかでの地域移動の実態を調べるために、本調査ではここ一年の地域移動について、いくつかの項目を立てて、「週に数日程度」「月に数日程度」「年に数日程度」「出かけていない」の選択肢を用意して質問している。

まず、「現住所の自治体の中にある大型商業施設・大型小売店」に「週に数回」と頻繁に 出かけているのは府中町 51.3%、三次市 34.1%。府中町のほうが多い。特に女性はその差 が大きく府中町が 61.2%なのに対して、三次市は 38.7%にとどまっている。この差が意味 することは、車で1~2時間ほどの広域都市圏まで商圏に収めた拠点都市型のショッピン グモールの存在感の大きさであり、周辺の小都市の中心市街地にある生活密着型ショッピングセンターとの求心力の違いであると考えられる。

府中町内の「大型商業施設」は、実質的には広島都市圏最大規模の商業施設である「イオンモール広島府中」(201 店舗)のことを指す。調査結果は、**府中町の 20-30 代の約半数**(女性は6割以上)が「イオンモール広島府中」を週に数回という頻繁さで利用していることを示している。広島には複数のイオンモールがあるため、このイオンモールは旧名の「ソレイユ」で呼ばれることが多い。

これに対して、三次市の「大型商業施設」は、十日市地区にある「サングリーン」(約70店舗)と「CCプラザ」(約40店舗)を意味する。これらの施設は、1980年代にできた生活密着型GMSであり、商店街に閑古鳥が鳴く現状のなか、地域の生活インフラとして重要な意味を持つ。しかしながら、こうした生活密着型GMSには、20-30代がショッピングを楽しむような非日常感や、休日をゆっくりと過ごすような居場所機能はあまりない。その点が、拠点都市型の大型ショッピングモールとは大きく異なる。例えば、「サングリーン」や「CCプラザ」の中には乳幼児を持つ親の子育て支援の公共施設も入っているが、若者についてはフードコートやゲームセンターに高校生が散見される程度で、そこを居場所にしているのは主に地域のシニア層である。

一方、府中町民はイオンモール以外の「県内の大型商業施設・大型小売店」にもよく出かける。それは、ほとんどの場合広島市内の商業施設を指し、具体的には中心市街地の本通りや紙屋町周辺の商業施設、または広島デルタを取り囲むように立地する郊外型ショッピングモール(「アルパーク」(約 180 店舗)、「イオンモール広島祇園」(約 130 店舗)、南区の「ゆめタウン」(約 170 店舗)、あるいは南区の「コストコ広島店」(中四国地方唯一。府中町から徒歩圏内)等の大型小売店などを指すと考えられる。「月に数回」出かける者が約半数で、「週に数日」を加えれば 63.4%となる。特に「20 代」は 70.8%と割合が高く、大型ショッピングモールに依存した消費生活を送っている者が多いと見られる。府中町には広島県最大のイオンモールが立地しているだけでなく、これらの広島市の主な商業施設が全て平日の生活圏のなかにあるという点で、きわめて消費の利便性の高い地域である。20-30 代の住民がこの地域をどのように捉えているのかという点については、後述する。

三次市民の場合は、一部、東広島市の「フジグラン」(約70店舗)や「ゆめタウン」(約80店舗)や、車で1時間半程度の島根県の「ゆめタウン出雲」(約120店舗)にも流れるが、圧倒的に求心力があるのは先述の「イオンモール広島府中」(府中町)であり、あるいはその他の広島都市圏の商業施設である。だが、これらの場所には車で2時間近く、電車を使えば2時間半以上かかる場合もあり、仕事のある日にアクセスすることは困難である。だが、そのような遠方であるにも関わらず、「月に数回」以上の頻度で出かけている者が61.1%、20代に限れば70.8%もいる。三次市は、オフィシャルに使われている「広島圏」

(広島市+府中町を含む安芸郡)や「広島広域行政圏」(行政圏)、あるいは「広島広域都市圏」(経済圏)の定義から外れるが、三次市の20-30代の日常的な休日生活圏のなかには車で2時間先の広島はすっぽりと収まっている。2時間程度のモビリティを前提にして生活しているということは、「限界集落」とカウントされている過疎の山村も含めて、広島県北部の中国山地の大半が大型ショッピングモールを頂点とする消費秩序に包摂されているということである。

拠点都市の大型ショッピングモールが求心力を高める一方、大都市に向かう頻度は高くない。「国内の県外地域」には「年に数回」出かける者が三分の二ほどを占めるが(府中町69.6%、三次市65.0%)、「首都圏、関西圏などの国内の大都市」については「出かけていない」者が過半数を占める(府中町52.4%、三次市59.3%)。また、「国外」にここ1年で出たことがある者の比率は府中町11.5%、三次市7.0%にとどまっている。大都市や国外への移動に積極的ではない社会的属性を探索すると、年齢や学歴の説明力はないことがわかった。最も重要なのは子どもや配偶者の有無である。子どもがいる場合、宿泊を伴う遠出が難しくてモビリティが低下するためか、大都市への移動頻度は減少する。その一方、配偶者の存在はかえって旅行等で外に出るモチベーションを高めるためか、有配偶者のほうが国外に出る頻度が高い。国外については、「世帯年収」の高さも説明力がある。若い年代がおしなべて大都市や国外に向かう欲望を失っているというのではなく、むしろライフステージの差異や階層などによる格差に目を向けて考える必要がある。

## 2.6 学歴

学歴の状況については、あとの分析につなげるためにも、ここでは府中町と三次市の分布の特徴を簡単に捉えておきたい。

学歴は、府中町では「大卒・大学院卒」が最も多く 40.8%。次いで、「高卒」18.9%、「専門学校卒」15.2%、「短大または高専卒」14.7%、「在学中(大学・大学院)」6.2%と続く。三次市でも順位は同じで、「大卒・大学院卒」28.1%、「高卒」26.8%、「専門学校卒」22.7%、「短大または高専卒」15.0%、「在学中(大学・大学院)」4.3%と続く。ただし、女性の方が多いというサンプルの偏りを補正すると、三次市は「高卒」と「大卒」の比率がほぼ同じになる。府中町は「大卒・大学院卒」が4割ほどで最大多数を占めるが、三次市の場合は2割台にとどまり、「高卒」と拮抗する。ちなみに、2010年の国勢調査の結果では、20-30代の総人口に占める「大卒・大学院卒」は32.2%、「高卒」は22.9%(ただし、「不詳」を除くと、「大卒・大学院卒」は37.6%、「高卒」は26.7%)。全国平均と比較しても、府中町は高学歴傾向が強く、三次市は低学歴傾向があると言える。

男女別でみると、府中町は男性が「大卒・大学院卒」45.9%、「高卒」24.3%、「専門学校 卒」11.3%の順であるのに対して、女性は「大卒・大学院卒」38.4%、「短大または高専卒」 21.2%、「専門学校卒」17.3%、「高卒」15.7%の順である。府中町では男女いずれとも大卒 比率が高く、また、女性は大学に進学しなければ「短大」に進学する者が多いことがわか る。これに対して、三次市は男性で最も多いのは「高卒」33.0%、それに次いで「大卒」 31.9%、「専門学校卒」18.6%と続く。一方、女性は「大卒」と「専門学校」が同率の25.5%、 それに「高卒」22.6%が続く。三次市では男性については「高卒」が最も多く、女性は大 学に進学しなければ「専門学校」に進学するケースが多いことがわかる。

次に、学歴と居住歴をクロスさせてみた。「ずっと地元」である人は、府中町は「大卒・大学院卒」が36.5%、「高卒」が16.3%と「大卒以上」が圧倒的に多いのに対して、三次市は逆に「高卒」が57.7%で、「大卒以上」はたったの9.6%しかない。府中町は実家から広島都市圏の大学に通える。だが、三次市はそれが困難なので、実家を離れて市外に引っ越す場合がほとんどだからだ。

しかし、府中町のなかでは、「他地域で就学後 U ターン」(大卒比率 53.5%)、「他地域で 就職後 U ターン」(大卒比率 47.4%)、「仕事で転入」(大卒比率 52.0%)のばあい、大卒比率はさらに高い。こうした事情は三次市でも同じで、大卒比率は「他地域で就学後 U ターン」(40.2%)、「他地域で就職後 U ターン」(30.4%)、「仕事で転入」(42.9%)となっている。これらの層に限れば、大卒比率は全国平均より高い。他地域での生活を経験した層のほうが、「ずっと地元」層よりも学歴が高いということがわかる。

#### 2.7 雇用

雇用については、「正規雇用」が府中町 48.5%、三次市 51.6%と約半数を占める。次いで多いのが、「家事をしている無業者」(≒専業主婦)で府中町は 21.1%、三次市 13.4%。府中町の「専業主婦」比率の高さが目立つ。三番目に多いのが、「仕事を主にしている非正規雇用」で、府中町 12.7%、三次市 12.7%。四番目に多いのが、「家事を主にしている非正規雇用の労働者」で、府中町 7.7%、三次市 7.8%。「自営業主・家族従業員」が府中町 1.5%、三次市 5.8%。三次市の自営業比率が高めであることに注目できる。

性別・年齢で分けてみると、府中町の 20 代男性は「正規雇用」が 59.2%で、「仕事が主の非正規雇用」と「学生 (無業)」が 10.2%とそれに続くのに対し、三次市は「正規雇用」 57.2%に次ぐのは「自営業主・家族従業員」13.1%、第三に「仕事が主の非正規雇用」と「収入のある学生」が 8.2%と続く。正規雇用の仕事につかない/つけない場合、府中町の場合はアルバイトをする場合が多いのに対して、三次市は自営業がその受け皿になる傾向がある。また、30 代男性については、府中町の大半が「正規雇用」(81.9%) になるのに対して、三次市は「正規雇用」(73.9%) のほかに「自営業主・家族従業員」(12.6%) も結構多い。 20 代女性は、府中町が「正規雇用」43.1%、「家事が主の無業者」18.6%、「家事が主の非正規雇用」(11.3%) の順で、三次市も同様に「正規雇用」48.5%、「家事が主の無業者」

17.5%、「家事が主の非正規雇用」16.7%と続く。三次市の女性のほうが就業する傾向が強い。この傾向の差は30代になると顕著で、府中町は「家事が主の無業者」が最多で39.9%、次いで「正規雇用」27.5%、「仕事が主の非正規雇用」15.0%、「家事が主の非正規雇用」13.7%と続くのに対して、三次市は「正規雇用」36.4%が最も多く、「家事が主の無業者」24.3%、「仕事が主の非正規雇用」22.6%、「家事が主の非正規雇用」13.9%と続く。三次市は府中町と比べ、30代になっても就業を継続する傾向が強い。

「正規雇用者」に限って性別で比較すると、女性のほうが未婚で子どもがいない者の比率が圧倒的に高い。府中町では男性「正規雇用者」の有配偶率は 75.2%で、51.4%が子持ちである一方、女性「正規雇用者」の有配偶率は 44.2%で、子持ちの割合は男性の半数近い 27.9%のみである。三次市では男性「正規雇用者」の 60.9%が既婚で、51.6%が子持ちであるのに対して、女性「正規雇用者」は 48.6%が既婚で、38.7%は子持ちである。やはり男女差は大きいが、府中町ほどの性別格差はない。女性が正規雇用の就業を継続しながら結婚・子育てをする点では、三次市のほうにアドバンテージがあることが示唆される。

次に職業の種類を見てみる。正規雇用の社員において、女性のほうが明らかに多いのは「事務」と「サービス」である。男性の雇用について、府中町には「製造作業・労務作業(製造作業・機械操作、建設作業、運搬・清掃・包装)」が28.4%と最も多い。府中町に本社が立地しているマツダか、その関連の企業が多いと見られる。それに次ぐのが、「専門技術」23.0%である。ただ、その一方で府中町の西部は商業地域でもあり、「販売」が13.5%と多い。「販売」は男性でも非正規雇用が多く、正規雇用は50.0%のみである。一方、三次市でも「製造作業・労務作業」が22.6%と最も多く、それに「専門技術」17.0%が続くが、三番目に「サービス」が14.4%と多いのが特徴的である。また、三次市は農村部の割合が大きく、多くの世帯が農地を保有しているにも関わらず、「農林漁業」が5.3%(男女合わせて2.6%)と少ないことは注目できる。

女性の職種は、府中町で「無業者」が36.1%と最多で、「事務」19.2%、「専門技術」17.3%、「サービス」16.1%という順になっている。これに対して、三次市では「無業者」28.1%、「専門技術」20.1%、「サービス」19.3%、「事務」17.2%と続く。ちなみに「事務」と「サービス」は非正規雇用率が半数を超える職種である。三次市は男女ともに「サービス」従事者が比較的多い。

最後に、産業分類を見てみると、**府中町では「製造業」17.1%が最多で、次いで「医療・福祉」13.2%**、「卸売・小売」10.4%、「飲食店・宿泊サービス業」6.0%、「建設業」4.7%と続く。「製造業」の多くはマツダ本社が立地していることと関係していると思われるが、全体の比率は全国データと比較してそれほど多いわけではない。2010年度の国勢調査でも20-30代の「製造業」は16.9%、それに次ぐのは「卸売・小売」11.9%であり、**府中町の産業構成は全国平均の縮図に近い**。

これに対して、**三次市では「医療・福祉」が 23.6%と最多で、国勢調査による全国平均 の 11.9%のおよそ 2 倍と突出している。**それに次ぐのが「製造業」11.0%、「卸売・小売」

9.7%、「公務員」5.6%、「建設業」4.1%と続く。「農林漁業」はそれに次ぐ6番目で、3.7% のみである。三次市は地場産業が弱く、大規模な工場が立地しないために製造業の雇用が相対的に少ないが、広島県北の中心都市として「医療・福祉」や「卸売・小売」などの対面型サービスが産業・雇用の核となっている。

性別という観点から見ると、どうか。府中町、三次市ともに男性は「製造業」(府中町 33.1%、三次市 19.1%)、女性は「医療・福祉」(府中町 19.2%、三次市 29.6%)のシェアが多い。 雇用の定着性という観点から、正社員に限って注目してみても同様で、両自治体とも男性は「製造業」(府中町 40.9%、三次市 25.3%)、女性は「医療・福祉」(府中町 37.2%、三次市 53.3%)という雇用の傾向が一層はっきりする。

## 2・8 就労時間と家事時間

週当たりの就労時間の中央値は、男性は府中町 50 時間、三次市 48 時間とあまり差が無い。女性は府中町 25 時間、三次市 35 時間で、三次市の中央値は高くなるのは就業率が高いためである。正社員に限ると、男性は府中町 50 時間、三次市 48 時間、女性は府中町も三次市もいずれも 43 時間となる。週 60 時間以上の長時間労働に従事している男性は、府中町 25.3%、三次市で 22.2%と多い。「30 代で週 60 時間以上の労働をしている男性雇用者は 18.2%」という内閣府調査(『少子化問題白書 2013 年度版』)の結果と比べても、比率は高いと言える。そして、男性正社員に限ると、全国平均と比べて府中町の労働時間の長さが際立つ(府中町 30.9%、三次市 20.5%)。その理由として、男性片働き世帯の比率が高いことが関係していると考えられる。一方、三次市の場合、特に「自営業・家族従業員」の男性の労働時間の長さが顕著であり、週 60 時間以上の労働は過半数の 52.2%に達する。人手不足を長時間労働でカバーしている傾向があるのではないかと考えられる。

「週当たりの家事時間(育児、介護を含む)」は、男性の中央値は府中町・三次市ともに7時間と短い(平均値は府中町 8.9 時間、三次市 7.1 時間)。女性の中央値は府中町・三次市ともに28時間(平均値は府中町 40.2 時間、三次市 34.4 時間)。正規雇用の者に限ると、男性の中央値は変わらないが、女性は府中町10時間、三次市14時間に減少する。家事時間に影響を与えるのは圧倒的に「子の有無」である。女性の場合は、「子なし」では、女性でも府中町7時間、三次市10時間と男性と比べて大差があるわけではない。だが、「子あり」の女性は、府中町64時間、三次市42時間ととても多い。これに対して、男性の場合は、「子なし」で府中町6.5時間、三次市4時間なのが、「子あり」でともに7時間と微増にとどまる。そして、「専業主婦」の家事時間の中央値は府中町84時間、三次市60時間ととても長い。

#### 2.9 収入

本調査では、個人年収と世帯年収をそれぞれ回答してもらっている。それぞれについて、 全体的な傾向を確認しておく。

まず、個人年収。20 代男性の中央値は、府中町・三次市のいずれも 200 万円台。国税庁の『民間給与実態調査(2013 年)』(20 代前半 200 万円台、20 代後半 300 万円台)と比較して、やや低いとみられる。30 代男性の個人年収は、府中町が 400-500 万円台と全国平均レベルであるのに対して、三次市はやはり 300 万円台と低い。個人年収 300 万円に満たない 30 代男性は、府中町 19.1%、三次市 29.5%とやはり三次市で多い。個人年収 600 万を超える人はほとんどいない。一方、20 代女性の個人年収の中央値は府中町・三次市いずれも100 万円台で、いずれも全国平均に比べてやや低い。そして、30 代女性は、出産・育児のために就業していない者が多く、府中町でも三次市でも 100 万円未満に下がる。30 代女性で 300 万円以上の個人年収があるのは、府中町 21.0%、三次市 20.8%のみである。

個人年収を目的変数とする重回帰分析によると、府中町と三次市の間の地域差にも説明力があるが(-.056)、何よりも雇用形態による格差が大きい。「正規雇用」および「会社経営者・役員」(.044)の個人年収は300万円台であるのに対し、「自営業または家族従業員」が200万円台(-.104)、「仕事が主な非正規雇用」は100万円台(-.253)、「家事が主な非正規雇用」(-.253)、「通学が主な非正規雇用」(-.120)は100万円会である。職種では「サービス」従事者の低さが突出していて、年代を問わず個人年収100万円台である(-.055、業種でいうとそのなかでも特に「飲食店・宿泊サービス業」が低い)。府中町の「仕事で転入」した層の個人年収が有意に高く(.100)、年代を問わず400-500万円台である。大企業の社員、または転勤族が多いのではないかと考えられる。業種では「公務員」が400-500万円台と最も高い。

次に世帯年収。府中町・三次市とも「400-500 万円台」が中央値であり、最頻値であるが、データの分布をみると府中町 500 万円台、三次市 400 万円台と推定され、三次市のほうが低い。2013 年度の「住宅・土地統計調査」に基づき推計すると府中町は 466.3 万円、三次市は 407.5 万円であるが、本調査では高齢者のみの世帯が除かれるので、これよりも少し高くなるのだと考えられる。同様の推計をすると、全国平均は 464.2 万円、広島県の平均は 450.0 万円である(「国民生活基礎調査」のデータによると、全世帯の平均世帯年収は 537 万円(2012 年度))。総合的に考えると、府中町の世帯年収は広島都市圏では最も高い水準であるが、全国的には平均値に近いレベルである。そして、三次市はやや低めの水準と言える。本調査での世帯年収 600 万円以上の「高収入層」は府中町 36.2%、三次市 30.1%。一方、世帯年収 400 万円未満の「低収入層」は、府中町 29.8%、三次市 41.5%となる。府中町のほうが「高収入層」が多く、三次市のほうが「低収入層」が多い。また、世帯年収が 1000 万を超える高額所得世帯の割合は、府中町 4.4%、三次市では 4.5%にとどまる。『住宅・土地統計調査』(2013 年度)によれば、府中町 6.3%、三次市 3.6%である。広島県内

で最も階層の高い自治体の一つと見られる府中町であっても、10%を超える東京都にはるかに及ばない。**高額所得層が薄い点が、首都圏とは異なるポイント**である。

世帯年収を目的変数とする重回帰分析によると、最も説明力のある変数は「父または母との同居」。**父または母と同居している世帯のほうが世帯年収は高く**(.411)、府中町で **600** 万円台、三次市で **500** 万円台と推定される。相対的な「高収入層」である世帯年収 **600** 万円以上の人のうち、かなりの部分が「父または母と同居」しているケースである(府中町 **64.2**%、三次市 **42.6**%)。

就業状態・雇用形態による「世帯年収」の差も大きく、特に「家事が主の無業者」(専業主婦)の低さが目立つ(-.203)。特に三次市では専業主婦家庭の世帯年収の中央値は300万円台にとどまっている。昨今、「専業主婦の二極化」が議論されることが多いが、本調査においては、特に高所得者世帯の比率は低く(「世帯年収」600万円以上が府中町20.2%、三次市5.7%のみ)、その「世帯年収」はおしなべて低い。働くことによって見込める収入が低く、働くことで増大する家事・育児への負担に見合わないために、「合理的選択」として働かないというタイプの専業主婦が多数を占めるのではないかと想定される。「金銭的余裕がある生活を送っている」と思っている人も決して多くなく、夫の収入があるから働く必要がないというタイプの専業主婦は少ないと考えられる。

また、「仕事が主の非正規雇用」の場合の「世帯年収」も低く、府中町では中央値が300万円台である(-.135)。「家事が主の非正規雇用」の場合も、三次市では中央値が300万円台と低い(-.107)。また、「自営業主・家族従業員」も低めである(-.075)。「大卒・大学院卒」は400-500万円台で、「高卒」が300万円台となるのよりは高い(.104)。また、「配偶者あり」で高めである(.284)。職種では「サービス」が突出して低く(-.103)、業種でも「飲食店・宿泊サービス業」「生活関連サービス業」で300万円台と低めである。一方、「公務員」(府中町700~800万円台、三次市600~700万円台)の世帯年収は全業種のなかで最も高く(.089)、女性に多い「医療・福祉」がそれに続く(府中町、三次市ともに400-500万円台、.090)。

このほか、「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」(.113)や「職場参加としての地域活動・社会活動」(.094)への参加度の高い場合、世帯年収が高くなる。

# 第三章 生活に対する評価

# 3・1 階層意識

「階層意識」は、主観的に生活水準を尋ねた質問に対する答えから構成される。本調査では「現在の生活水準は一般的な家庭と比べて高いほうだと思う」と、「現在の生活水準は一般的家庭と比べて低いほうだとは思わない」という二つの項目についての賛否をそれぞれ4点法で確認することによって、「階層意識」を尺度化している。

まず、「一般的な家庭と比べて高いほうだ」とする回答者は府中町 42.0%、三次市 38.2%。 「高いほうでも低いほうでもない」者は府中町 30.4%、三次市 29.9%、「低いほうだ」とする回答者は府中町 27.6%、三次市 31.9%であった。

重回帰分析を行うと、「階層意識」の違いについて、最も説明力があるのは「世帯年収」であるのは当然であろう(「高いほう」.379、「低いほうではない」-.282)。府中町でも三次市でも「世帯年収 600 万円」以上で「高いほう」が 5 割を超える。では、「世帯年収」の他にはどのような変数が関係しているのだろうか。

まず、「生活水準が高いほう」という意識については、「就労時間」が少ないほうが「高 いほう」と答える傾向がある(-.126)。それと関連し、「時間的余裕がある」という意識と の相関も強い (r=.222)。したがって、「専業主婦」 や「学生 (バイト収入なし)」で「生 活水準が高いほう」と考える人の比率はその世帯収入に比べて高くなる。特に三次市の「専 業主婦」の世帯年収の中央値は「300万円台」と他に比べて低く、「金銭的余裕がある」と 考える人も多くないのだが、それと相反して「一般的な家庭と比べて生活水準が高いほう」 だという人が平均を上回る43.5%もいる。これと対照的に、「家事が主の非正規雇用」は「生 活水準が高いほう」 の人が少ない (-.107、府中町 10.7%、三次市 30.6%)。 「子どもの有無」 も説明力があり、「子あり」は金銭的・時間的余裕がないためか、「高いほう」の人が少な くなる(-.084)。また、「大卒以上」の学歴がある者は「生活水準が高いほう」である割合 **が増える(.087)**。「大卒」では府中町 53.6%、三次市 41.9%であるのに対し、「高卒」では 府中町 26.7%、三次市 29.0%と約 2 倍の差が出ている。業種については、「公務員」が突出 して「生活水準が高いほう」の割合が多い(.069、府中町 77.8%、三次市 53.9%)。このほ か、「趣味関係のグループの活動」(.078) や「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の 活動」(.082) への参加度にも説明力がある。そして、男女別に重回帰分析をすると、男性 では「世帯年収」「学生(無収入)」に次いで「他地域で就学後 U ターン」の高さが目立つ (.158)。また、年収の低い三次市の階層意識の低さも有意である(-.138)。そのほか、「管 理職」(.179)、「事務職」(.149)、「販売職」(.145)で階層意識は高めである。その一方、 女性では「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」に参加度が高い場合や、「公 務員」である場合に階層意識は高めである(.110)。だが、非正規雇用(「家事が主」(-.146) または「仕事が主」(-.141))である場合には「高いほう」の人は少なくなる。

一方、「低いほうだ」とする回答については、「年齢」の説明力が大きい(.114)。「低いほうだ」が 20 代では府中町 21.4%、三次市 26.6%なのが、30 代では府中町 31.5%、三次市 34.4%に上がる。「学生(バイト収入なし)」は「低いほうだ」とする割合が少ない(-.090)。注目すべきなのは「家事が主の非正規雇用」で、「低いほうだ」という意識が強く、半数ほどもいることだ(.122、府中町 59.4%、三次市 45.4%)。「専業主婦」と「家事が主の非正規雇用」の人たちでは、「世帯年収」という点ではあまり変わらないのだが、「階層意識」については、「専業主婦」の「階層意識」は低くないのに、「非正規雇用の主婦」は最も「階層意識の低い社会的属性となっている。そして、男女別に重回帰分析をすると、いずれも「世帯年収」の説明力が最も高いが(男性.245、女性.297)、それに次ぐ説明変数が異なっている。男性では「学生(無収入)」は高めに(.194)、そして「他地域で就職後 U ターン」した層が低いほうに傾く(-.128)。同じ U ターンでも、「他地域で就職後 U ターン」した人たちは階層意識が高めなのに、「他地域で就職後 U ターン」した人たちは階層意識が高めなのに、「他地域で就職後 U ターン」した人たちは、逆に階層意識が低めになるということである。一方、女性では「家事が主の非正規雇用」(.297)である場合、そして「年齢」が高いと低めになる傾向が強い(-.110)。

過去の社会学的研究の蓄積のなかで、「階層意識」は「世帯年収」のような変数とゆるやかに結びつきつつも、完全に経済的条件によって決定されるのではなく、生活の質の感覚や比較対象が何であるかによって規定される変数であることがわかっている。具体的な規定メカニズムについては、いくつかの説明モデルがあるが、ここではこれ以上立ち入らない。ただ、本報告で注目するのは、「世帯年収」や「個人年収」よりもむしろ「階層意識」の高さがこの質問紙調査の他の多くの項目の回答傾向と相関しているという現象である。そのことの持つ意味については、総括の章で引き続き考察する。

#### 3・2 生活時間についての満足度

「時間的余裕がある生活を送っている」という項目に同意した比率は府中町 48.4%、三次市 49.7%。当然、「就労時間」の説明力が最も大きいが、これを説明変数候補から外した重回帰分析では、専業主婦が「そう思う」傾向が際立つ(.162、府中町 72.9%、三次市 72.6%)。専業主婦は、子どもがいる場合でも府中町 65.1%、三次市 63.4%、子どもがいない場合は実に府中町 95.5%、三次市 90.5%が「余裕がある」と回答している。先に、専業主婦の「階層意識」の高さは、就労時間の短さによって媒介されていると述べたが、それはすなわち時間的余裕の感覚があるということが考えられる。そのため、「正規雇用」の場合は府中町38.8%、三次市 40.2%と「時間的余裕」がある人の割合がとても少ない。次に重要な変数は「子の有無」である。子どもがいる場合は、府中町 42.6%、三次市 42.9%と「余裕がない」人のほうが多くなる(-.147)。ライフコース別に見て最も「余裕がある」人の割合が少ないのは、正規雇用の女性(子あり)で府中町 37.5%、三次市 23.2%にとどまる。また、

同じグループ活動でも「趣味関係のグループの活動」への参加の程度が高いと「時間的余裕がある」傾向にあるのに (.146)、「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」に参加の程度が高い人は、「時間的余裕がない」傾向がある (-.089)。また、「サービス」従事者は最も「時間的余裕がある」人が少ない職業であるといえる (-.085、府中町 41.3%、三次市 45.6%)。「建設作業」(-.081) 従事者もそれに次いで「時間的余裕」がない。

「家族と過ごす時間は満足にとれている」のは、府中町 62.9%、三次市 53.6%と差がついており、地域差そのものに説明力がある (-.090)。就労時間が短ければ満足度が上がる傾向があり (.130)、「専業主婦」については府中町 82.4%、三次市 79.0%と、きわめて満足度が高い。正規雇用に限ると「家族と過ごす時間は満足」にとれているという人は府中町 54.4%、三次市 46.8%にまで下がる。また、「地縁組織の活動への参加」に説明力があり、参加の程度が高い人は「家族と過ごす時間」についての満足度が高い (.124)。地縁組織の活動には、家族ぐるみで参加することが多いからであろう。また、「他地域で就学後に U ターン」した層の満足度も高いが (.079)、「仕事で転入」(-.091) または「就学で転入」(-.094) してきた者については家族と離れて暮らしている者も多いからか、ネガティブになる。

「友人と過ごす時間は満足にとれている」のは、府中町 39.6%、三次市 33.1%と否定的な回答が多くなる。やはり地域差そのものが有意である (-.106)。就労時間が長ければ、否定的な回答は増える (-.298)。正規雇用に限ると、府中町 36.9%、三次市 30.9%と「友人と過ごす時間」についての満足度はさらに低下する。したがって、仕事をしていない専業主婦や学生の満足度は比較的高い。ただし、家事時間が長かったり、子どもがいたりすると、専業主婦でも満足度は下がる。子どもがいると、友人付き合いに割く時間が減少することを不満に思っている人が多くなる (-.182、府中町 29.0%、三次市 24.5%)。また、「趣味関係のグループへの参加」の度合も説明力が大きい (.158)。友人付き合いにおいて、趣味関係のグループが大きな役割を果たしている可能性がある。また、この項目でも、「他地域で就学後に U ターン」した層の満足度が高い (.097)。

「自分の自由な時間が満足にとれている」のは、府中町 52.5%、三次市 53.3%。「自分の自由な時間」については子どもの有無による回答傾向の差が圧倒的に大きく、子無しの府中町 68.7%、三次市 70.5%に対して、子ありは府中町 34.2%、三次市 36.5%と満足度が半減する (-.317)。この項目も「就労時間」に負の説明力があるが (-.295)、「家事時間」も増えると満足度が減少するため(-.215)、専業主婦の満足度は高くはない。時間的余裕はあっても、家族のために使うばかりで、自分の自由な時間はそれほどないという専業主婦の状況が見えてくる結果である。また、この他に「趣味関係のグループ」との関わりが深い場合、「自分の自由な時間」についての満足度が高まる傾向がある (.109)。

そして、「家事負担についての不満」がある者は、府中町 31.8%、三次市 33.1%。当然、「家事時間」の説明力が最も大きく、性別の説明力もそれに解消される(-.214)。一人暮らしとは違って、「父または母と同居」の場合(-.148)、または「配偶者あり」の場合(-.141)、「家事負担についての不満」を持つ者の割合が増えるが、何よりも説明力が大きいのは「子

どもの有無」である (-.186)。子どもがいない場合に家事負担について「不満」な人の比率 は府中町 19.2%、三次市 23.7%にとどまるのが、子どもがいる場合は府中町 45.2%、三次市 42.2%と倍増する。とりわけ子どものいる女性は、府中町 50.0%、三次市 47.2%と約半数が不満を持っている。また、「就労時間」が長くなると、家事負担についても「不満」がある者の割合も増える (-.130)。

生活時間に関する以上の質問は、いずれも生活満足度との相関が高い。「時間的余裕がある」という意識と「総合的に言って、現在の生活に満足している」という意識には相関が高く(r=.338)、「全く時間的余裕がない」場合、生活に満足している者の比率は、府中町45.5%、三次市47.9%と低くなる。また、「時間的余裕」がない場合、収入が変わらなくても生活の質が下がるため、「階層意識」が下がる(階層意識が「高いほう」とr=.222、「低いほうではない」とr=.151)。

# 3・3 経済状況についてのネガティブな評価

個人の経済状況についての評価を尋ねた以下の三つの項目では、全体的傾向がおしなべてネガティブに出ている。

第一に「金銭的余裕がある生活を送っている」という項目については、賛同するのは府中町 43.3%、三次市 34.4%のみとなっている。府中町でも三次市でも、「世帯年収」が「400~500万円台」及びそれより低い場合、「金銭的余裕がない」という回答が多数派となる。「世帯年収」(.369)に次いで説明力があるのが、「子あり」の余裕のなさである(.184、府中町 36.2%、三次市 31.0%)。また、職業では「サービス」従事者 (-.149、府中町 31.1%、三次市 24.1%)や「建設作業」従事者 (-.079)で「金銭的余裕がある」という人が突出して少ない (-.149)。「父または母と同居」している人は、「世帯年収」は高い傾向にあるけれども、「金銭的余裕」は無いと答える傾向がある (-.117)。また、階層意識が「高い」層の70.0%が「金銭的」な余裕があると回答しているが、「高くも低くもない」と考えている層では22.6%しかおらず、この間に大きな断絶があると見られる。

第二に、「今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくていいと思う」のは、府中町 23.8%、三次市 18.4%のみ。 8割前後が、経済的不安を抱えている。そして、これも「世帯年収」の説明力が最大だが、年収が高くても過半数が「心配」であると考えている(.172)。その他に「今後、自分の生活が厳しくなる可能性について、心配しなくていい」と考える傾向が最も強いのは「公務員」(.130)と「専業主婦」(.131)、そして「学生(無収入)」である(.156)。いずれも、「階層意識」が比較的高い層である。しかし、その他の全職業について、生活が厳しくなることを恐れている傾向が顕著である。

第三に、「20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」人の比率 も府中町 33.9%、三次市 29.4%ととても低い。「世帯年収」(.141) や「個人年収」(.155) が高いほうが肯定的な回答が増えるとはいえ、世帯年収 400 万円以上でも府中町 38.7%、三次市 36.4%にとどまる。また、年齢差が大きく、20 代が府中町 39.7%、三次市 38.0%であるのに対し、30 代は府中町 30.8%、三次市 25.1%にまで低下する(-.227)。加齢によって、上昇移動できないという現実認識がさらに深まるのだと考えられる。そして、「父または母と同居」している者については、府中町 28.8%、三次市 18.4%ととても低い(-.157)。その大半が親のサポートを受けていると考えられ、そうしたなかで親よりも生活水準を超えることをイメージするのは難しいためだと考えられる。業種としては「飲食店・宿泊サービス業」は収入も少なく、ポジティブな回答の割合はきわめて少ない(-.124、府中町 13.0%、三次市 33.3%)。女性の仕事として最も大きなシェアを占める「医療・福祉」も相対的に低い(-.120、府中町 22.7%、三次市 26.1%)。このように、突出してネガティブな社会的属性はある一方、半数以上が「親の生活水準よりも高い暮らしができている」と考えるような社会的属性は存在せず、総じてネガティブな回答傾向があることが確認できる。

経済状況や将来展望についての評価は、いずれもその「世帯収入」と結びつき、「階層意識」が高めであれば肯定的な回答比率が高まる。しかし、その結びつきは緩やかであり、年収が高めの階層であっても、ポジティブな評価を下す人は半数に及ばない。生活水準について右肩上がりの将来イメージを持てない時代であるという認識は、社会的属性を問わず幅広く共有されていると言える。

#### 3・4 生活満足度

「総合的に言って、現在の生活に満足である」とするのは府中町 68.4%、三次市 70.2% と肯定的な回答の割合が高い。16~39 歳を対象とした厚生労働省の「若者の意識に関する調査」(2013年)でも6割台が満足と答えており、類似した結果が出ていると言える。生活展望に対するネガティブな認識とは対照的な現状肯定傾向に注目することができる。

「生活満足度」について、重回帰分析では「世帯年収」の説明力が最も大きい(.175)。 「世帯年収 400 万円以上」で府中町 70.1%、三次市 80.6%が満足と答えているが、「400 万円未満」では府中町 57.6%、三次市 58.3%に下がる。「金銭的余裕」との相関関係が強く (r=.515)、「全く余裕がない」と答えた者については、府中町 34.0%、三次市 34.9%と大 半が満足していない。「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだと思う」人の 生活満足度も高く(r=.463)、経済階層および「階層意識」と生活満足度とのかかわりは 深いと考えられる。

ただし、非経済的要因も生活満足度に対して説明力を持っている。そのなかで最も重要なのは、「父または母との同居」の有無(-.139)。これと関連して、居住歴で「ずっと地元」にいる人が目立って低い点についても注目できる(-.088)。すでに見たように、「父または母と同居」のほうが世帯年収は高いにも関わらず、「別居」の場合のほうが生活満足度は高

い(別居の場合、府中町 71.4%、三次市 72.3%。同居の場合、府中町 51.2%、三次市 61.3%)。 これに関連し、「配偶者・恋人等がいてその関係に満足している」( $\mathbf{r}$ =.366)や、「親から独立した生活が成り立つ」( $\mathbf{r}$ =.242)という意識も、総合的な生活満足度の高さと強く結びついている。

就業状態や雇用形態による説明力はないが、職業変数としては「製造作業・機械操作」 (-.092)、「建設作業」(-.103)、「サービス」(-.090)の満足度が低い。これらの職種は学歴が低く、実際「中卒」の満足度の低さにも説明力がある(-.090)。特に「製造作業・機械操作」や「建設作業」は、単身暮らし比率や父母との同居率が高い一方で有配偶率が少なく、また、男職場で出会いに乏しいということも生活満足度の低さと関係がありそうである。その一方、グループ活動との関わりについては、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加度には説明力があるが(.098)、その他のグループ活動については、参加度が高いからといって生活満足度が上がるわけではない。ただし、「友人関係の満足度」(r=.323)や「親との関係の満足度」(r=.341)、「職場の人間関係の満足度」などの人間関係との相関関係は有意である(r=.234)。したがって、インフォーマルな人間関係の満足度については、生活満足度に影響していると考えられる。

「生活満足度」のほかの項目を見てみると、「生活」の現状評価については、ネガティブ な社会経済展望に反して、非経済的要因が重視されて、肯定的な全体傾向が強い項目が目 立つ。以下、その回答傾向を分析してみよう。

#### 3.5 自己充足的傾向

まず、「毎日の生活が「楽しい」と感じられる」のは府中町 70.4%、三次市 67.9%とやはり全体傾向としては多い。この項目は「生活満足度」と相関が極めて高く(r=.600)、その回答傾向は似ている。ただし、「生活満足度」とは大きな違いが一つある。重回帰分析をしても、「世帯年収」のような経済状況や、「就業状態・雇用形態」などの地位の安定性に関わる変数の説明力がないという点である。最も強い説明力がある変数は、「配偶者の有無」で、「配偶者あり」が府中町 77.6%、三次市 78.9%であるのに対し、「配偶者なし」は府中町 55.3%、三次市 52.2%にとどまっている(.195)。第二に、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加度である(.164)。「積極的に参加」している人は府中町 82.6%、三次市 76.3%と「毎日の生活が楽しい」人の比率が高い。ただし、「積極的に参加」している人自体は全体の割合のなかでは一桁台なので、多数派とはいえない。第三に、「製造作業・機械操作」(・.144) や「販売」(・.088)、「建設作業」(・.073) といった職種はネガティブな傾向が強く、「楽しい」人は約半数にとどまる。その一方、「輸送運転・機械操作」の高さに説明力がある(.080)。この点について、後述の「毎日の仕事が「楽しい」と感じられる」という項目と似たような回答傾向が見られる(r=.414)。第四に、「父または母と同居」(・.109)

の場合も、「毎日の生活が楽しい」人の比率は少ない(府中町 51.2%、三次市 51.3%)。第五に、「大卒・大学院卒」で「楽しい」人の比率が府中町 72.1%、三次市 77.5%と高めに出る(.085)。そのほか、就業状態・雇用形態で最も「毎日の生活が「楽しい」」と感じているのは「学生(アルバイト収入あり)」である(.119)。このほか、重回帰分析では検討されていないが、インフォーマルな友人関係の充足度も影響を与えていると考えられる。この項目と「友人関係に満足している」との相関は非常に強い(r=.406)。

次に「現在の住居に満足している」人の比率は、府中町 71.6%、三次市 67.1%。やはり「生活満足度」(r=.374) や「高めの階層意識」と相関が強い (r=.277)。重回帰分析をすると、説明力があるのは「中卒」(-.111)、「高卒」(-.126)、「専門学校卒」(-.094) の満足度の低さであるが、地域別に分析してみると、それは高学歴者の満足度が高いというよりは、主に三次市で大卒者が多い「他地域で就学後に U ターン」した人の満足度が有意に高いことなど、諸要因が複雑にかかわっていると見られる。意識調査項目では「可能ならば、今住んでいる地域にずっと住みたい」という地域定住意識との相関が強く (r=.345)、「他地域で就学後に U ターン」した人もそういう意向を持つ傾向が強い。また、「地域の総合的な満足度」との相関関係も非常に強く、それが府中町の住居満足度が少し高くなる理由であると考えられる (r=.430)。府中町に限って重回帰分析をすると、三次市とは違って、地域定住意識が強くない「学生」の住居満足度の高さが説明力を持つ。

そして、「心身ともに健康である」人の比率であるが、これも府中町 72.6%、三次市 68.6% と高めになる。「生活満足度」(r=.479)や「高めの階層意識」との相関は高い(r=.284)。この項目については、最も重要な変数は「就労時間」であり(-.165)、就労時間が長ければ「心身ともに健康である」比率はやや低くなる。就労時間 60 時間以上の人では、府中町62.2%、三次市 59.3%に下がる。第二に、「家事も通学もしていない無業者」(-.142)や「家事が主の非正規雇用」(-.083)の人たちの否定的な回答傾向に注目できる。第三に、「趣味関係のグループ」の関与の程度が高ければ、「心身ともに健康である」比率は高くなる(.126)。また、「大卒・大学院卒」の学歴もポジティブに作用する(.090)。

そのほか、先述したように「親」や「友人」とのインフォーマルな関係についても、世帯年収や個人年収とは関係がないにもかかわらず、「生活満足度」(親; $\mathbf{r}$ =.341、友人; $\mathbf{r}$ =.323) や「高めの階層意識」との関わりは強い。

まず、「親との関係に満足している」人の比率であるが、府中町 85.3%、三次市 84.6% ときわめて高い。そのため、重回帰分析でも「製造作業・機械操作」(-.116) や「建設作業」(-.106) 従事者で「満足」である人が相対的に少ないのを除けば、何らかの社会的属性の違いで、回答傾向が割れるわけではない。いわゆる「パラサイトシングル」と目される「親と同居している未婚シングル」についても、「満足している」人の割合は平均値と変わりはない(83.3%)。親との関係の満足度について、親との同居の有無による違いはない。

また、「友人関係に満足している」人の比率も、府中町 80.1%、三次市 77.2%と高い。これについて最も説明力があるのは「配偶者の有無」。「配偶者」がいる人の満足度は高い

(.149)。第二に重要なのは、年齢格差(.140)。20代に比べて、30代は満足度が低くなる。 30代は「友人と会う時間が満足にとれていない」者の比率が高く、それが満足度を下げていると考えられる(r=.434)。第三に、親との関係と同様に「製造作業・機械操作」における満足度の低さが指摘できる(-.134)。第四に、「趣味関係のグループ」への関与の程度が高ければ、「友人関係に満足している」比率が高まる(.088)。その他、「家事も通学もしていない無業者」は否定的な回答傾向が強い(-.102)。

「生活満足度」と関わりの深い以上の5項目は、他項目と比べて肯定的回答の比率が高く、いずれも3分の2以上を占めている。「友人関係や親との強固な人間関係に守られ、住居に不安もなく、心身ともに健康で楽しい生活ができている」と考えている人たちが多数派であるということである。

その一方、これらの項目での回答傾向を見ると、「仕事の総合的な満足度」「自分自身の 仕事の将来展望」「今後の勤務先の経営見通し」「地域の総合的な満足度」「日本社会・政治 の総合的な満足度」「総合的な自分自身の現状についての満足度」「幸福度」「自分自身の将 来展望」については、おたがいに、いずれも強い正の相関関係が見られる。つまり、「現在 の生活に満足」である者は、「仕事」にも「地域」にも「日本社会・政治」にも満足であり、 や親との関係もよく、「毎日が楽しい」と答える現状肯定傾向が相対的に強くなるあるとい うことだ。そして、興味深いのは、これらの項目の回答傾向に共通しているのは、必ずし も「世帯年収」や「個人年収」との直接的な結びつきはないが、「階層意識」との相関関係 についてはいずれも強い点である。つまり、たいして年収が高くなくても、「友人関係」や 「家族との関係」が充実するなど、生活のクオリティを高める要因があるならば、自分の 生活水準を高めに見積もる傾向があるということである。この問題については、「コンサマ トリー(=自己充足)」傾向の問題として、総括の章で引き続き考察する。

#### 3・6 結婚生活とその見通し

「血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人(配偶者または恋人等)がいて、その関係に満足」だという人の比率は、府中町 71.9%、三次市 71.3%。ただし、この項目は「配偶者の有無」によって大きく分かれる。「配偶者がいる人」については府中町 90.7%、三次市 89.7%が満足だと答えている。そのなかでも「子あり」のほうが「子無し」よりも(-.168)、30 代のほうが 20 代よりも、満足だという人は減少するが (-101)、大半が「満足」という状況には変わらない。

ところが、「配偶者がいない人」については、府中町 37.8%、三次市 42.7%とネガティブ な答えのほうが多くなる。このデータからは、6~7割の未婚者には恋人等がいないと推 定され、また府中町のほうがその割合が低い可能性が示唆される。そして、女性で恋人等 がいて「その関係に満足」なのは府中町 37.9%、三次市 47.3%であるのに対し、男性は府

中町 32.2%、三次市 37.8%とより低い。この項目について、最も説明力が大きいのは、「職場参加の地域活動・社会活動」への参加度である(.310)。こうした活動への参加が、交際可能性を広げているということが考えられる。年齢による違いは当然大きく、30 代のほうが否定的な回答が増える(-.209)。また、単身暮らしなどに比べ、「父または母と同居」の場合にネガティブさが強まる(.163)。「仕事が主の非正規雇用」の場合も、「満足」な人の割合は府中町 34.6%、三次市 41.4%とやや少なく、経済的な理由が交際に響いていることがおおいに考えられる(-.120)。だが、一概に社会経済的にアドバンテージがあれば、交際の可能性が増えるというわけではない。例えば、この項目では低学歴層よりも「大学卒・大学院卒」でネガティブな人の割合が増えているが、女性の高学歴の未婚女性にその傾向が強い(-.145)。このほか、製造業では男性を中心にネガティブな回答割合が高い。男性割合が多く、出会いの機会が少ない職場環境であることが関係している可能性がある

配偶者がいない人で、「今後、結婚できないのではないかと心配」なのは、府中町 64.3%、三次市 68.5%と三分の二ほどを占める。重回帰分析では、「大学卒・大学院卒」で心配である人の割合が増える(-.278)。女性のほうが男性より不安が大きく(-.202)、特に「大卒・大学院卒」未婚女性で「結婚できないかも」不安を持つ比率がとても高いことがわかる(府中町 77.2%、三次市 91.6%)。「年齢」が上がる場合、「不安」な人の比率は増える(-.167)。30 代男性では府中町 54.5%、三次市 61.3%が、30 代女性では府中町 87.5%、三次市 75.0%が「不安」を抱いている。そして、「世帯年収」が低い場合ではなく、むしろ高い場合に「心配」とする比率がむしろ上がる(-.182)。また、「趣味関係のグループ活動」に参加度が高い人は「今後、結婚できないのではないか」と考える人が少ない(.197)。交友関係が豊かであることがその理由であろう。そして、結婚に対する不安がある人は、「自分の将来には明るい希望がある」比率も低い(r=.383)。

一方、配偶者がいる人で、「結婚生活を続けられないのではないかと、心配」であると回答したのは、府中町 27.5%、三次市 35.2%となっている。年齢が上がると「心配」とする比率が上がる(-.123)。学歴による違いが大きく、「大卒・大学院卒以外」で府中町 30.1%、三次市 37.2%と「心配」である人の比率が若干増える。学歴の違いは、将来の経済的な見通しの格差と関わっている可能性がある。

それでは、家族形成についての将来展望はどうだろうか。「20年後、子育てを経験し、配偶者と暮らしていると思う」人は、配偶者がいない者は半数をやや上回る程度(府中町52.1%、三次市56.2%)にとどまり、既婚者(府中町89.5%、三次市86.8%)と大きな差がついている。未婚者の半数近くの者が、結婚して子どもを育てるというごく一般的なライフコースを歩むという将来像を描いてはいない。未婚者に限って重回帰分析をすると、年齢による違いは大きく、30代未婚者については、男女ともネガティブで、府中町26.7%、三次市43.0%ときわめて低い(.272)。雇用形態による格差があり、「家事・通学をしていない無収入」(-.145)がとても否定的であるほか、「仕事が主の非正規雇用」の場合も府中町28.6%、三次市12.5%と割合は非常に低い(-.127)。やはり将来の経済見通しとの関連

が深いようで、「20年後、親よりも高い水準の暮らしをしていない」と考える人はネガティブな回答傾向が強い(r=.357)。これに対して、「職場参加の地域活動・社会活動」の参加度の高い場合は比較的楽観的で(.201)、「自営業主・家族従業員」も比較的ポジティブである(.132)。

## 3・7 親への依存

自分の生活が「親から完全に自立している」と考えている者の比率は、府中町 51.9%、 三次市 44.4%。「親と同居」している者に限れば、府中町 1.8%、三次市 13.1% しか「自立 している」という人はいない (-.472)。 興味深いのは、「親と同居」している者は、配偶者 のいる場合であっても「自立している」という者の比率がほとんど変わらないという点で ある(それぞれ府中町8.3%、三次市8.8%)。また、同じ既婚女性でも、「専業主婦」は「自 立している」という回答が高いが、それ以外の女性ではむしろ少ない。**結婚後も多くの者** が、家事や育児、あるいは経済面において親の支えを必要としているために、「自立してい ない」と考えている。「親との同居」の次に説明力があるのは、「個人年収」(.148)。「個人 年収 300 万円未満」では、「自立している」と考える者は、府中町 44.1%、三次市 36.4% と少なくなる。年代で見ると、府中町(20代:33.4%、30代:63.1%)、三次市(20代: 35.0%、30代:51.1%)となっている。**30代になっても「自立できていない」と考える者** の比率が高く、特に親との同居率が高い三次市では約半数に達していることに注目できる。 「親の援助が全くなくても、今の自分の生活は成り立つ」と考えている者は、府中町 58.3%、 三次市 50.2%である。「親と同居」している者については府中町 79.3%、三次市 69.5%と 高いが(-.337)、そのうち未婚者(「パラサイトシングル」と言われる)だけを取り出して も比率はあまり変わらない(府中町 79.8%、三次市 67.2%)。「親と同居」している場合は、 配偶者がいるとしても、かなりの部分が「親の援助」を必要としているということである。 特に「子あり」の場合は、「親の援助」が無くては現在の生活が成り立たないという者の比 率は増える(-.156)。特に「子あり」のうち、「親と同居している者」については府中町 81.8%、 三次市 80.6%に達する。いわゆる「パラサイトシングル」のみならず、多くの既婚者も親 に依存しているということがわかる。このほか、「個人年収」の説明力も高く、「個人年収」 が低い場合、「親の援助」が不可欠と考える者の比率が増える(.208)。この項目についても、 「専業主婦」は「親の援助が無くてもかまわない」と考える人の比率が高く、それ以外の 女性と差がついている(.112)。そして、「公務員」は「親の援助が無くても」かまわないと いう人の比率が全業種のなかで最も高い(.071)。

## 3・8 社会状況への経済的適応—ゼロ成長時代のジレンマ

先にも見たように、社会的属性を問わず、自分の生活を取り巻く経済的状況について明るい見通しを持てる人は少なく、ネガティブな認識は広く共有されている。それでは、生活水準が上がらないゼロ成長経済の時代が続くとして、価値観の面でもこの状況に適応しようという意識が見られるのであろうか。

まず、「将来の生活のことを考えて、お金をなるべく使いたくないと思っている」人は府中町 62.9%、三次市 57.9%と比較的割合が高い。バブル経済を知らない平成世代は「嫌消費」傾向をその特徴としていると言われるが、この結果からも消費について消極的な全体傾向が見える。この傾向は、年齢が高まるほど弱く(-.099)、「男性」のほうが「女性」よりも弱いとは言え(.083)、どの属性でも過半数がこの考え方を支持している。特に収入に関わる変数が説明力を持たず、「階層意識」とも相関しないということは、消費を控える傾向は収入の低い人に特に強い考え方というより、時代的あるいは世代的な共通認識となっていることを示唆する。そんななか、「中卒」者については、年収は低いにも関わらず消費を控える傾向は弱い(-.133)。

それでは、消費を控える傾向が、ゼロ成長経済のもとでの単なる消費の萎縮ではなく、「スマート」で「成熟」した消費のあり方を志向する傾向につながっているのか。その可能性を見るために、「環境や健康の問題に関心があり、そのために良いことならお金をかけてもかまわない」という項目を用意したところ、府中町 53.8%、三次市 52.6%と回答が割れた。重回帰分析では、やはり「世帯年収」に説明力はなく、「高卒」(-.102、府中町 38.6%、三次市 41.3%)や「中卒」(-.092)の低さが目立つが、「短大・高専」に比べて「大卒」も特に高いとは言えない。この考え方についてポジティブな回答傾向が強いのは、「他地域で就学後 U ターン」した層(.088、府中町 62.8%、三次市 58.6%)、そして「趣味関係のグループに関わりの程度が強い層」(.078、府中町 56.7%、三次市 61.8%)である。「他地域で就学後 U ターン」した層は、「趣味関係のグループ」を始め、ソーシャルな活動について一般的に積極的な層であり、「環境」や「健康」というキーワードに反応する度合も比較的高いようだ。一方、意識調査項目間の関係を見てみると、「階層意識」との間には正の相関が見られる(「生活水準は高いほう」 r=.252、「生活水準は低くない」 r=.141)。各種の満足度もおしなべて高い傾向にある。

それでは、ゼロ成長経済で生活水準が上がらないこと自体は、どう評価されているのだろうか。「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」と考えている人は府中町 40.2%、三次市 41.1%と半数を下回る。「世帯年収」や「個人年収」が高いからといってこの考え方を支持する人が増えるわけでは必ずしもないが、「階層意識」の高さや各種の満足度とは相関がある。つまり、収入階層とは関係なく、右肩上がりの社会ではない現実を素直に受け入れている人のほうが、生活・仕事・地域・日本社会・人生のいずれについても総合的な満足度が高いということである。そして、この項目について重回帰分

析で最も強い説明力があるのは「就労時間」である (-.131)。男性も女性も「就労時間」が短い人ほど、この考え方を受け入れる傾向にある。「全くそうは思わない」と答えた男性の週当たり「就労時間」の中央値は、府中町 57.5 時間、三次市 50 時間ととても長い。しかし、長時間労働に従事する者は、就労時間が長いからといって、特に「個人収入」が多いわけでも、「世帯収入」が多いわけでもなく、その「階層意識」はやや低めである(個人年収 400 万円未満は府中町 50.0%、三次市 66.0%)。つまり、就労時間の長い人たちは、特に経済的に厳しいわけでもないが、「生活水準が上がらなくても仕方ない」と価値観を転換することができず、悲観的な傾向が強いことが示唆される。

次に、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上が らなくてもかまわない」という項目について。これは、ゼロ成長経済の時代に合わせた「ダ ウンシフター」的な価値観であり、ロハス系の雑誌に出てくるような言い方だ。シェアハ ウスなどの脱消費主義的な文化にも通じる考え方である。この項目についても、肯定的回 答傾向のある人は階層意識が高めであり、総合的な満足度が高い(「生活水準が高め」r=.213、 「生活水準が低くない」r=.118)。ただし、この価値観については、大半の者に受け入れら れておらず、肯定的な回答をする者は府中町 21.4%、三次市 20.1%にとどまることにも注 意が必要だ。重回帰分析で重要とみなされた変数は第一に「子どもの有無」(-.166)。子ど もがいる場合は 19.0%、三次市 17.3%とさらに少ない。**子どもがいれば、子どもたちの立** 場から考え、「今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」とは言いにくくなる、という ことであろう。 第二に、「サービス」 で肯定的な回答をする者は府中町 19.5%、 三次市 13.8% と非常に少ない(-.122)。「製造業」(-.073) も同様に少ない値が出ているが、これらはい ずれも総合的な生活満足度についての項目でも低い値を出している属性である。そして、 第三に「世帯年収」(.111)である。「世帯年収」が 600 万円以上あると、若干増えるが(府 中町 25.8%、三次市 20.5%)、それでも大半が否定的であることには変わらない。そのほか、 「就労時間」が短ければ、この価値観を受け入れる傾向が少し増えるが大きな差ではない (-.093)。多くの人は金銭的に余裕がなく、「お金をかけなくても楽しく暮らす方法」があ ったとしても、「生活水準が上がらなくても仕方ない」とまでは考えられない人が多数派を 占める。ゼロ成長経済に適応するべく、脱消費的な価値観が様々に提案されているが、そ うした考え方は経済的に厳しい層にとっては受け入れにくいものであるということが示唆 される。

#### 3.9 趣味

従来は侮蔑的な意味を伴っていた「おたく」という言葉だが、若者文化のメインストリームにおいて承認されるようになり、様相が変わってきたとしばしばいわれる。実際、「自分の趣味には「おたく」的要素があると思う」者の割合は三分の一超(府中町 35.8%、三

次市 36.7%)で、非常に高くなっている。重回帰分析によると、性別による違いが最も大きく(.-191)、男性は4割台で(府中町 48.6%、三次市 45.4%)、女性は3割ほどである(府中町 28.5%、三次市 30.6%)。また、子の有無による違いも大きく(-.151)、子無しでは府中町 43.6%、三次市 49.1%とさらに割合は高くなる。「父または母と同居」は有意に高い一方(.146)、個人年収は低い傾向にある(-.100)。子無しの20代男性に限ると、府中町 61.6%、三次市 55.4%と過半数が「おたく」を自認している。この世代のなかで、「おたく」がネガティブワードでなくなっているということを確認できる。ただし、年齢による比率の差は、重回帰分析では「父または母と同居」「子の有無」の変数の効果に解消される。

「おたく的要素がある」人は、その趣味に「こだわり」があり( $\mathbf{r}$ =-.390)、「余暇の時間は、一人で楽しみたい」という回答が目立つ( $\mathbf{r}$ =.261)。そして、「自分が一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいいと思う」と考える人の比率が有意に高いが( $\mathbf{r}$ =.119)、その一方で「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」という人は少ない( $\mathbf{r}$ =-.121)。

一方、「自分の趣味には「ヤンキー」的要素があると思う」人の割合は、府中町 5.9%、三次市 5.7%と非常に低い。不良系の若者文化を指す言葉として、広く普及している「ヤンキー」という言葉であるが、オタクとは対称的にすっかりネガティブワードになっている。抵抗文化としての積極的な意味は失われ、「DQN」という言い方に象徴的なように、むしろ社会の規範から外れる者たちに対する侮蔑的な呼称として一般化する傾向にあり、「自称ヤンキー」は非常に少ない。重回帰分析では、性別が最も説明力を持ち(-.154)、男性に限れば府中町 10.2%、三次市 7.5%と比率は上がる。約1割の男性が「自称ヤンキー」であるということだ。次に説明力があるのは「建設作業」の高さで(.125)、比率としても突出している(41.2%)。また、「中卒」で高い一方(.091、25.0%)、「大卒・大学院卒」(-.118)や「専門学校卒」(-.088)の比率はやや低い。職場が地元で若くして就職しているというプロフィールが見えてくる。年収等の経済状況について、高くも低くもなく、現状肯定的な回答傾向も強いわけでも弱いわけでもない。階層は「低いほうだ」と考える人がやや少ない(.155)。

原田曜平の「マイルドヤンキー」論などでは、「ヤンキー」の消費意識は旺盛で、地元好き、そして人間関係は内向きとされている。確かに、「自称ヤンキー」が多い「中卒」「建設作業」については、消費を控える傾向が他よりも弱いが、特に「ヤンキー的ではない」人と比べて「定住意向」が突出しているわけではない。また、人間関係については、「自分と異なる世界の人と出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う」人の比率がむしろ高いなど(r=.101)、特に内向きな価値観が強いというわけではない。

「自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと思う」という項目については、 府中町 45.9%、三次市 48.8%とそれほどに強くない。これが地方の特徴であるのか、ある いは時代的・世代的特徴であるのかについては、さらに考察する必要がありそうである。 ただ、ここで注目したいのは、社会的属性による格差が大きい点である。重回帰分析によ れば、「趣味の個性やこだわり」については「性別」による違いが最も重要で(-.224)、男 性では府中町55.8%、三次市62.6%と過半数を占めるのに対して、女性では府中町40.2%、 **三次市 39.3%と少数派にとどまる**。「子どもの有無」による差も大きく(-.153)、子無しで は府中町 54.2%、三次市 55.6%だが、子ありでは府中町 46.9%、三次市 42.0%と下がる。 そして、「趣味関係のグループ」(.092) あるいは「職場参加の地域活動・社会活動」(.095) への参加の度合が高いと「個性やこだわりが強い」傾向が強い。「個性やこだわり」という と個人主義的なニュアンスがあるが、グループ活動に積極的に参加し、コミュニカティブ **な志向性が強い人のほうが、趣味の「個性やこだわり」も強い**ということであろう。この ほか、「階層意識」が高めだと「個性やこだわり」志向が強くなる(「高め」r=.133、「低く ない」r=.170)。「環境や健康」にお金をかけていいという意識との結びつきも強い(r=.169)。 また、「趣味へのこだわり」がある人は、「無理をしてでもチャレンジ」してみたいとか (r=.182、)「組織に縛られない自由な考え方」を重視したいとか (r=.110)、「人とは異な る自分の個性」を磨きたいといった(.180)、アクティブな自己実現志向とも関係が強い。 だが、その一方で、「趣味」に「個性やこだわり」を求めるのは、子どものいない男性に偏 っている。また、就労時間が長ければ、ネガティブな回答の割合が増える(-.084)。こうし た格差も念頭に置きながら、地方の若者文化のあり方について考察していく必要がある。

# 3・10 生活時間についての価値観

「余暇の時間」の過ごし方について、「家族とともに楽しみたい」「友人とともに楽しみたい」「一人で楽しみたい」と3つの項目を立て、それぞれに同意するか否かを4点法で尋ねている。それによると、突出して多いのは「家族とともに楽しみたい」で、府中町83.6%、三次市83.9%。「友人とともに楽しみたい」「一人で楽しみたい」はそれほど差が無い(「友人」が府中町62.6%、三次市66.9%、「一人」が府中町62.2%、三次市58.4%)。それぞれの選好についてはライフコース上の地位の違いと対応し、社会経済格差とも階層意識とはとくに関係が見られない。

「余暇の時間は、友人とともに楽しみたい」に関して、重回帰分析では「年齢」の説明力がもっとも強い (-.166)。20 代で府中町 74.2%、三次市 75.3%なのが、30 代で府中町 56.1%、三次市 61.8%にまで下がる。また、「趣味関係のグループの活動」への関与の度合いが強い人は、「余暇を友人とともに楽しみたい」傾向が強い (.140)。「趣味関係グループの活動」への参加については、趣味そのものだけではなく、友人作りが目的となっているという側面が大きそうだ。また、「輸送・機械運転」従事者は、一人でいることを楽しむ傾向があるためか、「友人とともに楽しみたい」人は少ない傾向にある (-.116)。そして、「余暇を友人とともに楽しみたい」人は、地域での交流に積極的である。「地域活動に積極的に参加したい」(r=.169)や、「現在住んでいる多様な人たちと交流したい」(r=.225)といっ

た考え方を持つ人が多い。「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所」にも出かけたいとか (r=.200)、「海外」にも行ってみたい (r=.224) などと、地域外への移動についても積極的である。

「余暇の時間は、家族とともに楽しみたい」に関しては、重回帰分析では「配偶者の有無」による違いが大きいとわかる(.357)。配偶者がいない場合は府中町 64.3%、三次市 65.4%であるのに対し、有配偶者の場合は府中町 94.2%、三次市 95.4%とほとんどの場合が「余暇は家族で楽しみたい」と考えている。また、「子どもの有無」による違いも大きく、子どもがいると、家族と過ごしたい人が増える(.169)。そして、「友人とともに楽しみたい」人と同様に、「地域活動に積極的に参加したい」(r=.163)とか、「現在住んでいる地域の多様な人たちと交流したい」(r=.160)気持ちが強い。そして、「幸せ」であるという意識との相関がとても高い(r=.331)。その他、ファミリーでの活動を重視するため「現在住んでいる地域での生活には、自家用車が欠かせない」と考える傾向が強い(r=.187)。そして、「一生住む場所」として「中国山地のような田舎が理想」と考える傾向がある(r=.112)。

「余暇の時間は、一人で楽しみたい」に関して、重回帰分析ではやはり「配偶者の有無」による違いが大きい( $\cdot$ .200)。配偶者がいない場合は府中町 74.8%、三次市 69.3%と一人で楽しむ時間を重視していることがわかるが、配偶者がいると府中町 55.0%、三次市 51.7%にまで下がる。ただし、その一方で、「家事が主の非正規雇用」は、配偶者がいるにも関わらず「一人で楽しみたい」と考える傾向が比較的強い点は注目に値する( $\cdot$ .113、府中町 71.9%、63.9%)。そして、「余暇を一人で過ごしたい」人は「心身ともに健康」ではないという人( $\cdot$ r= $\cdot$ .095)や、「幸せ」ではないという人( $\cdot$ r= $\cdot$ .113)の比率が高い。そして、「一生住む場所」として「広島のような地方都市が理想」と考える傾向がある( $\cdot$ r= $\cdot$ .113)。

#### 3・11 家族のケア負担についての考え方

「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然だと思う」人は、府中町 62.4%、三次市 58.0%。介護の負担について家族によるケアを基本とする考え方は、マジョリティの共通認識になっているということが確認される。重回帰分析では、「家事時間」が増えると否定的な回答が増え(-106)、それに媒介されて有配偶者も否定的な割合が高くなる。配偶者無しでは府中町 65.5%、三次市 63.0%なのが、有配偶者は府中町 55.4%、三次市 54.8%とやや下がる。家事負担の多い者は、介護負担の当事者としての役割期待を意識し、現実的観点から否定的になると考えられる。また、結婚前は親と同居し、面倒を見なくてはいけないと意識していても、結婚して離家したのちは「家で面倒をみる」という意識が薄れるために否定的になるということもあるだろう。

この価値観は、家族との関係との良好さを示す項目と強く関連している。「親との関係に満足している」(r=.253)とか、「余暇の時間は、家族とともに楽しみたいと思う」(r=.113)

といった項目との相関が強い。そして、「他地域で就学後 U ターン」してきた者は、「子どもが家で面倒を見るのは当然」と考える傾向が特に強いが、これもこの層における実家志向の強さが関連していると見られる(.086)。業種としては「サービス業(その他)」従事者が「当然だと思う」意識が強い(.080)。また、この考え方に同意する人は、特に世帯年収が高いわけではないのに、階層意識が高く(「高いほうだ」r=.097、「低いほうではない」r=.121)、生活満足度等について現状肯定傾向が強い(r=.161)。

# 3・12 男女の家事分担についての考え方

「男性も女性と平等に家事(育児・介護を含む)分担をするのが当然だと思う」人の割合は、府中町 75.1%、三次市 80.4%と圧倒的に多い。重回帰分析をすると、性別、世帯年収、学歴による比率の差は有意ではない。性別についていうと、男性(府中町 75.5%、三次市 81.3%)に対して、女性(府中町 74.8%、三次市 79.8%)となっている。興味深いことに、否定的な答えが増えるのは、最も家事時間の長い「専業主婦」(府中町 63.5%、三次市 77.5%、-.084)である。「専業主婦」のケア役割意識が、この回答に否定的な影響を与えているのではないかと考えられる。また、「自営業主・家族従業員」(-.132) あるいは「経営者・役員」(-.095) の否定的な傾向も強い。年齢の説明力も有意で、年齢が若いほうが「当然だと思う」割合は高い(-.075)。「20代」では府中町 82.1%、三次市 81.5%であるのが、「30代」では府中町 70.7%、三次市 80.0%となっている。経年変化がわからないので加齢効果か世代効果かは判別できないが、少なくとも若い世代のほうが性別役割分業に肯定的という「若者保守化論」の根拠とされるような傾向は、この調査では確認されなかった。

調査結果からは、府中町も三次市も変わらず、男女間に家事分担についての伝統的な性別役割分業観がなくなっていることが確認された。だが、男性がその意識の高さという点では十分に高くなっているにもかかわらず、実際の家事時間については女性のほうが圧倒的に長い。実態と意識のずれは非常に大きく、その点についてさらに検討を要する課題であると言える。

# 第四章 仕事に対する評価

# 4・1 仕事についての現状評価

「総合的に言って、仕事の現状に満足している」人の割合は、府中町 49.8%、三次市 56.5% で、半々に分かれている。しかし、「とても満足している」人の割合が府中町 8.2%、三次 市 7.7%なのに対して、「全く満足していない人」は府中町 17.1%、三次市 15.2%と多いこ とを考えると、**全体として仕事に対する総合評価はややネガティブに傾く**。重回帰分析で 最も重要な変数とみなされるのは「就労時間」(・.234)。**労働時間が長い者の仕事満足度は** 低い。「全く満足していない人」の週あたり就労時間(男性)の中央値は、府中町60時間、 三次市 50 時間と長い。第二に、「個人年収」(.164)。男性に限れば、府中町で年収 600 万 円未満、三次市で400万円未満の場合、「不満」が大半を占める。また、就業状態・雇用形 態による違いに説明力はないが、「サービス」(-.126、府中町 46.1%、三次市 44.2%) や「製 造作業・機械操作」(-.136、府中町 30.0%、三次市 41.1%)といった職種の満足度が低い。 それに対して、「輸送・機械運転」の高さは目立っている(0.97、府中町80.0%、三次市87.5%)。 ただし、男女別に重回帰分析をすると、説明モデルは多少変わってくる。男性の場合、「就 労時間」の短さ(-.240)と「個人年収」(.171)が最も重要。それに対して、女性の場合は 「世帯年収」(.160) が最も重要で、「個人年収」は説明力をもたない。そして、三次市のほ うが府中町よりも、女性の仕事満足度は有意に高い (.113、府中町 49.7%、三次市 56.3%)。 前述したように、三次市のほうが女性正社員で配偶者・子どもがいる比率が高く、仕事と 子育てを比較的両立しやすいことが関係していると考えられる。

仕事の満足度は、階層意識と強い相関関係があり(「生活水準が高いほう」r=.245、「生活水準が低いほうではない」r=.187)、仕事の満足度が高ければ、各種の現状評価についても肯定的である傾向が強い。

#### 4・2 仕事の将来展望について

仕事の将来展望に関しては、深刻な見通しを持っている人が多数を占める。

「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている」人の割合は府中町 35.9%、三次市 36.9%。リクルートマネジメントソリューションズが行った、大卒以上の ホワイトカラー総合職の新入社員を対象とした調査 (2014 年) でも類似の質問で非常に低い値 (21.6%) が出ており、また 2010 年と比べて 10%も低下したことが指摘されている

が、本調査でもネガティブな数字が出ている。重回帰分析では、特に「飲食店・宿泊サービス業」(-.150、特に女性)や「生活関連サービス業」(-.091)の満足度の低さが目立つ。また、「自営業主・家族従業員」(.124)や「管理職」(.099)はポジティブであるが、被雇用者は職種・業種を問わずおしなべて「明るい希望」を持っている人は少ない。職業では「製造作業・機械操作」(-.115、特に男性)と「事務」(-.087、特に女性)がとてもネガティブである。また、年齢が高いほうがネガティブな見通しをする人が増える(-.128)。そのほか、「職場参加としての地域活動・社会活動」(.110)や「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会関係の活動」(.104)への参加の度合の高い者は、ポジティブな見方を示す傾向が強い。全体では個人収入や世帯収入の説明力はないが、「階層意識」(「高いほう」 r=.251、「低くはない」 r=.196)や「金銭的余裕がある」という意識との相関が高く(r=.308)、男性に限ると「個人年収」の説明力もある。

また、「今後の勤務先の将来(経営など)について、明るい希望を持てると思う」人の比率も府中町 34.0%、三次市 29.3%ととても少ない。重回帰分析をすると、やはり「自営業主・家族従業員」のポジティブな傾向が目立つ(.121、府中町 50.0%、三次市 56.0%)が、その一方で、「正規雇用」の勤務先に対する将来見通しは特に三次市においてとても厳しい(府中町 32.4%、三次市 23.5%)。業種では「電気・ガス・水道・熱供給」が例外的にやや高いが(府中町 57.1%、三次市 50.0%)、他の全業種について、ネガティブな将来見通しが過半数を占めている。その他の社会的属性の違いもあまりなく、勤務先について明るい希望を持っている人は少数派であるということがわかる。「勤務先について明るい希望」がある人は「20 年後も同じ職場で働いている」と考える傾向にあるが(r=.331)、全体ではそのような人は府中町 22.6%、三次市 18.6%にとどまっている。

また、「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事していると思う」人は府中町50.9%、三次市50.7%と回答傾向は割れている。これについては、最も説明力があるのは現在の「個人年収」である(.274)。府中町でも三次市でも、「個人年収400万円以上」で過半数が「20年後は、今よりも高い給料や報酬」をもらえるだろうと考えている。しかし、過半数を占める「個人年収400万円未満」の人についていうと、20年後の給料や報酬に対して、ネガティブな見通しのほうが強くなる。また、「年齢」が上がると、より現実的な見方になるためか、厳しい見通しをする人が増える。「20代」では府中町54.9%、三次市54.9%なのが、「30代」では府中町48.8%、三次市48.8%に下がる(-.220)。業種では、特に「飲食店・宿泊サービス業」が府中町10.0%、三次市26.7%ときわめて低いが、これは特に女性の場合に顕著である(-.144)。そして、男性については「職場参加の地域活動・社会活動」への参加の度合の高い者は、ポジティブな見方を示す傾向にある(.183)。

そして、注目できるのは雇用形態による違いで、「正規雇用」であっても「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事している」と考えている人は、男女ともに何とか過半数に達している程度であるということだ(府中町 58.6%、三次市 55.7%)。これは、従来の年功序列を当然視する日本的雇用慣行からすれば、考えられないような低い数字であ

ると言えるだろう。まして、「仕事が主の非正規雇用」については、府中町 28.6%、三次市 35.1%にとどまり、大半の者がネガティブな見通しを示している(男性に限った重回帰分析で-.191)。これに対して、「自営業・家族従業員」のポジティブさが目立つ(.169、府中町 66.0%、三次市 72.0%)。

このように、仕事の将来展望に関しては総じてネガティブであるが、以上の質問すべてについて、「階層意識」による格差は存在している。仕事の将来展望が明るいと感じている人は、生活満足度その他の現状評価について、肯定的な回答傾向が相対的に高く、日本社会・政治について信頼度が高い人もやや多い。

## 4・3 職場の待遇や就労環境について

職場の待遇や就労環境について、「給料や報酬」「勤務時間」「職場の人間関係」「個人や家族の事情への配慮」の四点から考えてみる。

「給料や報酬に満足している」人は、府中町 40.1%、三次市 34.7%ととても少ない。「給料や報酬に満足」している人は、現状評価に関する多くの項目で肯定的傾向が強いが少数派である。「世帯年収 400 万円以下」では府中町 26.1%、三次市 28.5%とさらに少ない。20 代で個人年収 400 万円以上、30 代で 600 万円以上に達すれば、「満足」している人がそうでない人よりも多くなるが、それぞれ同年代の1割ほどしかいない。性別によって状況が違うので、別々に重回帰分析を行った結果、「総合的な満足度」と同様に、男性では「個人年収」が最も重要であるのに対して(.367)、女性は「世帯年収」の説明力が最も大きい(.161)。つまり、女性は「給料や報酬」の満足度を、自分の収入だけで見るのではなく、世帯全体の収入のなかではかる傾向が強いということである。男性の場合は、個人年収に次いで、就労時間の長さが「給料や報酬」の満足度を下げる効果がある(-.154)。そして、配偶者がいる場合、経済的負担が増えるためか、やはり仕事満足度は下がる(-.151)。女性の場合は、世帯年収に次いで、「公務員」の満足度の高さが際立つ(.135)。

「勤務時間(長さ、時間帯)に関する不満はない」のは、府中町 53.7%、三次市 56.2%。 就労時間が長いと、不満は多くなる (-.302)。「正規雇用」に限ると、府中町 48.7%、三次市 49.8%と「不満はない」人の比率は減る。勤務時間について「とても不満がある」人たちの週当たり就労時間の中央値は府中町(男性 60 時間、女性 49 時間)、三次市(男性 50 時間、女性 46 時間)と長めである。「会社経営者」(.112)や「自営業・家族従業員」(.089)は、「不満はない」人が多い。業種では「情報通信業」(.105)、職種では「農林漁業」従事者(.091)の「不満はない」人の割合が多い。重回帰分析では、「勤務時間」の満足度は、就労時間以外の変数の説明力はあまりない。相関分析では「勤務時間」と「時間的余裕がある」という意識との間の相関関係が大きく(r=.364)、勤務時間に不満がある場合、「心身ともに健康」ではないと考える人も増える(r=.320)。

「現在の職場の人間関係に満足している」人の割合は、府中町 72.0%、三次市 72.1%ととても多い。「製造作業・機械操作」の否定的傾向の強さが突出しているが(-.171、府中町 36.0%、三次市 57.1%)、その他に「不満」が過半数を超えるような社会的属性は見当たらず、職場の人間関係については、おおむね「満足」している人が多い。ただし、「家事が主の非正規雇用」(府中町 96.3%、三次市 82.8%)の満足度が高いのに対して、「正規雇用」の場合は府中町 70.1%、三次市 68.7%と若干減る。正規雇用になると職場への関わりが深くなり、そのぶん人間関係についての不満も多くなるということであろう。

「家庭や個人の事情に配慮してくれる、働きやすい職場で働いていると思う」人の割合は、府中町 72.1%、三次市 75.1%。重回帰分析では、「就労時間」の短さが最も重要であるとわかる(-.247)。就労時間に媒介されて、正規雇用に限ってみると府中町 69.5%、三次市 66.4%とやや落ちる。「全くそう思わない」と回答した男性の週あたり労働時間の中央値は、府中町 60 時間、三次市 50 時間と長めである。業種では、やはり「製造作業・機械操作」の否定的傾向が強い(-.113)。また、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加の程度が高い人は肯定的である(.112)。

職場の待遇に関し、収入については否定的な回答をする人が多いが、職場の人間関係や働きやすさという点では不満な人の割合が比較的に少なくなる。「階層意識」との関わりが強く、これらの項目に肯定的な人は、他の問題についても現状肯定的な傾向が強い。そうしたなか、就労時間が長くなると不満を持つ人が増え、また、職種としては「製造作業・機械操作」の不満の強さが強いということが言える。

#### 4・4 仕事の魅力

自分の仕事を魅力的な仕事であると感じられているのだろうか。「仕事の楽しさ」「やりがい意識」「天職であるという意識」という三つの項目から考察を深めてみたい。

「仕事が楽しい」と感じている人は、府中町 47.3%、三次市 51.1%と約半数である。 最も説明力があるのは「家事時間」(.138)。これは女性だけの効果であるが、家事に十分な時間がとれていると仕事も楽しいという結果が出ている。第二に、「製造作業・機械操作」従事者の満足度の低さが際立つ (-.108)。「製造作業・機械操作」従事者は、収入や就労時間という点では他とさほど変わらないが、有配偶率が極めて低く(府中町 9.4%、三次市8.3%)、生活満足度に関しても多くの項目においてネガティブな評価をしている。第三に、「職場参加の地域活動・社会活動」に参加の度合が高い人は、「仕事が楽しい」という傾向が強い (.111)。いずれの要因についても、女性の場合は仕事そのものというより、家庭生活や諸活動とのバランスがとれていることが「仕事が楽しい」と感じられる条件となっていることが示唆される。雇用形態についていうと、正規雇用は府中町 45.1%、三次市 46.7%と「仕事が楽しい」人が非正規雇用の人たちと比べ、むしろ低い傾向にあるということが わかる。正規雇用の場合、職場へのコミットの程度が深いために、「仕事が楽しい」とは思えないようだ。このほか、男性の場合、業種としての「輸送・機械運転」や産業としての「運輸・郵便」が「仕事が楽しい」人の比率が突出して多い。「輸送・機械運転」は、就労時間の中央値が 60 時間と全職種のなかで最も多いが、収入も特に多いわけではない。運転という仕事に伴う「楽しさ」の特殊性を示唆している。

「仕事に「やりがい」がある」という人は、府中町 62.4%、三次市 67.2%と高めの比率が出ている。しかし、社会的属性による違いは大きく、重回帰分析では、やはり「製造作業・機械操作」(-.268、府中町 36.6%、三次市 46.2%)の否定的傾向が際立っている。この他、「仕事に「やりがい」がある」という人は、「専門技術」(府中町 76.0%、三次市 74.6%)職が突出して高い一方、「事務」(-.270、府中町 54.7%、三次市 55.3%)と「卸売・小売」(-.165)が低く、女性に限れば「サービス」(-.152)や「運搬・清掃・包装」(-.147)も低い。職種の違いによる「やりがい格差」が非常に大きいと言える。また、業種では「飲食店・宿泊サービス」の低さが目立つ(-.088)。「サービス」従事者では「やりがい」があるという人はむしろ多いほうで、同じ「サービス」従事者といっても業種による違いがあり、「飲食店・宿泊サービス」での接客従事者がきわめて低いのに対して、「医療・福祉」に属する介護従事者、あるいは「生活関連サービス業」に属する美容師などの仕事はそうではなく、「やりがい」についての感じ方にずいぶんと違いがあることが考えられる。また、年齢が上がれば「やりがい」がないと答える人が増える(-.105)。そのほか、「職場参加の地域活動・社会活動」に参加の度合が高い人もポジティブである(.172)。

「今の仕事が「天職」である」と感じている人は、府中町 39.1%、三次市 41.6%と男女 問わず相対的に低い。重回帰分析では、「輸送・機械運転」(.156、府中町 60.0%、三次市 100.0%) や「農林漁業」(.094、三次市 63.7%)の肯定的な傾向が際立つ一方、やはり「製造作業・機械操作」(-.109、府中町 16.6%、三次市 30.8%)が低いほか、「事務」(-.123、府中町 28.1%、三次市 20.9%)もその低さが目立つ。また、業種では「医療・福祉」(.101、府中町 52.8%、三次市 46.7%)が高い。そして、女性に限って重回帰分析をすると、「個人年収」の高さによる説明力が大きい(.176)。また、ワーク・ライフ・バランスを重視した働き方を重視する人が多いためか、「家事時間」を確保できている人のほうが今の仕事を「天職」であると感じる人が多い(.122、女性限定.226)。その一方、特に女性は「職場関係の地域活動・社会活動」への関与が強い人は「天職」と感じる傾向が強い(.153)。

以上、仕事の魅力に関する三つの質問は、ともに他の質問に比べて「余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない」という回答傾向と負の相関関係にあるという点が目立っている。「仕事が楽しい」(r=-.244)、「仕事にやりがいがある」(r=-.180)、「仕事が天職と思える」人(r=-.156)は、そうでない人よりも余暇よりも長時間労働を優先する価値観に親和的である。だが、分析結果からは、むしろ仕事内容そのものに備わる要素とは直接かかわらない要因の重要性が浮かび上がる。第一に、「職場の地域活動・社会活動」への参加で、仕事に関わる人間関係の充実度を高める効果があると見られる。第二に、女

性について、家庭生活との両立という観点の重要性が重要であるということである。第三に、週60時間超の長時間労働をしている者(男性がそのうち77.3%)については、そうでない人に比べて、「仕事が楽しい」人(府中町28.9%、三次市40.4%)は断然少なく、「仕事にやりがいがある」人(府中町55.5%、三次市66.7%)もやや少ないことがわかる。「仕事が天職」と思える人についても、府中町は33.3%とやはり低い(三次市については自営業の長時間労働者が多く、低くない)。総じて言って、長時間労働者は仕事の魅力に対して、ネガティブになっている状況がうかがえる。

## 4.5 転職傾向

本調査では、以下の三つの項目から、転職や勤続、そしてキャリア継続に関する意識を 尋ねてみた。

「今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンスを求めて転職しようという考えは持っていない」人の割合は府中町 45.9%、三次市 46.0%と回答傾向は割れている。男性は49.0%、女性は 43.4%である。この項目に関して、最も説明力が大きいのは「個人年収」で(.129)、「電気ガス熱供給水道」業で若干転職志向が弱い傾向が見られるほかは(.107)、他の変数にはあまり説明力がない(.129)。個人年収が低いと、転職志向の割合が増える。府中町でも三次市でも、「個人年収」が男性は300万円以上、女性は400万円以上になると、転職意思のある人は半数以下になる。仕事の現状についての満足度が高いほか(r=.428)、「階層意識」も高め(「高いほう」r=.120)である場合、現状肯定傾向が強く、転職志向は少ない。転職志向がない人は「日本はこつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だと思う」人が多く、「組織に縛られない自由な考え方が大事」(-.117)とか、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」(-.129)と考える人は少ない。また、「一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいい」と考える人も、転職志向のある人に比べて顕著に少ない(-.146)。

次に、「20年後も現在の延長線上にある内容の仕事をしていると思う」という項目で、キャリア継続志向を探ってみたところ、府中町 60.3%、三次市 61.3%。正規雇用に限ると府中町 65.5%、三次市 64.3%と少し高くなる。男性が府中町 72.8%、三次市 68.8%であるのに対して、女性は府中町 50.1%、三次市 54.7%。男性よりは少ないとはいえ、キャリア継続志向を持つ女性は半数程度いる。男性と女性の状況がかなり異なるので、別々に重回帰分析をすると、男性の場合は「経営者」の場合は肯定的傾向が強いが(.204)、「仕事が主の非正規雇用」の場合、否定的な回答傾向が強くなる(-.155)。収入は関係せず、職種・業種による違いにも説明力はない。男性の場合、将来にわたるキャリアの継続において重要なのは、収入よりも雇用の安定性であると考えられる。そのほか、「職場参加の地域活動・社会活動」への関与の度合いが強いと、肯定的な回答が強くなる(.153)。一方、女性の場合

は、最も重要な変数は「配偶者の有無」で、「配偶者あり」の場合は府中町 58.6%、三次市 58.2%と高いのに対して、「配偶者なし」が府中町38.9%、三次市47.8%と低くなる(.232)。 このことは、女性の場合、キャリア継続の見通しを立てる上で、結婚が大きな転機になる ことを示している。配偶者がいない女性は、結婚・出産を経ても現在のキャリアを継続す **るかどうか、見通しを立てにくいのだと考えられる**。また、年齢が上がると、キャリア継 続について否定的な立場をとる人が増える(-.179)。これは **20 代と 30 代のあいだに世代** 差が見られるというより、加齢にともない、結婚・出産を経て、キャリアの継続を断念す る女性が多いためではないかと考えられる。そして、女性の場合、職業では「専門技術職」 に比べ、「事務職」(-.224)、業種では「飲食店・宿泊サービス業」(-.155) のキャリア継続 に対する否定的傾向が目立つ。そして、「個人年収」が高い場合や(.172)、男性同様に「職 場参加の地域活動・社会活動」への参加の度合が高い場合、肯定的な回答傾向が強まる(.091)。 そして、興味深いことに、この項目は「無理をしてでも、自分の目標に向かってチャレ ンジしたい」という考えとは相関しない一方、「人並みに安定した暮らしを手に入れるため に、現実的に考えて行動しようと思っている」という堅実志向との相関が高い(r=.149)。 性別を問わず、多くの人々にとって、キャリア継続への意思があるということは、上昇志 向溢れる、いわゆる「バリキャリ」的なものではなく、むしろ地道にキャリアを積み上げ ていき、安定した生活を実現したいという考えと結びついているようである。

次に、「20年後も勤務先を変えずに働いていると思う」のは、府中町 45.9%、三次市 47.3%。 性別による違いが非常に大きく、男性が府中町 68.0%、三次市 66.1%であるのに対して、 女性は府中町 27.9%、三次市 30.4%と大差がついている。女性は、その半数ほどにキャリ ア継続志向があるが、さらにその約半分ほどしか、同じ職場で働き続ける意思を持ってい ない。その他、男性の場合は、「会社経営者・役員」(.196) や「自営業主・家族従業員」(.171) の場合に職場継続傾向は強く、職業的には「サービス」従事者での否定的回答が多い(-.138)。 女性の場合は、「個人年収」の説明力が大きいほか(.261)、「職場参加の地域活動・社会活動」 (.141) や「地縁組織の活動」(.107) への関与の度合いも重要である。また、「販売」職で の職場継続傾向が強いが(.141)、非正規就労が半数で、結婚・出産を経たあとに復職した と見られるケースが多い。

転職志向と勤続志向をクロス分析してみると、転職するつもりがなく、20 年後も勤続しているだろうと考えている人は、男性のばあいは府中町 45.0%、三次市 43.3%であるのに対して、女性のばあいは府中町 20.7%、三次市 23.6%にとどまっている。男性の場合は、転職志向がありながら勤続志向がある人が府中町 23.2%、三次市 22.8%と多いことに注目できる。つまり転職を模索しつつも、結局はそのチャンスが見つからないのではないかと考えている人が多いということである。一方、女性では、逆に今のところ転職志向がないけれども、20年後は勤続していないだろうと考える人が多い(府中町 23.2%、三次市 18.8%)。これは、結婚や出産を機にいまの職場をやめようと考えている層であると考えられる。

以上の転職や勤続に関わる三つの項目すべてについて、転職志望の少ない人は階層意識

が比較的高く、転職志向に乏しい人たちは、各種の満足度を示す項目についても現状肯定 傾向が強い傾向が見いだせる。また、どの項目についても「日本は、こつこつと努力すれ ば成功する可能性のある国だと思う」という項目とは正の相関関係がある。その一方で、「今 よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンスを求めて転職しようという考えは持ってい ない」人のほうが、「自分の将来には明るい希望があると思う」傾向が顕著である(r=.256)。 つまり、**転職を考えていない人のほうが将来に希望を持っている、という**ことである。

# 4・6 仕事に対する自信

仕事に対する自信は、他者から得られる承認と大きく関わる。承認には、職場の内部から得られる承認と、職場外の人からの承認とがある。それぞれに項目を立てて尋ねてみた。

「自分の仕事ぶりは、仕事で関わる社会の人々に認められていると思う」人の割合は、府中町 57.6%、三次市 61.8%と過半数を上回る。この項目については、職種や業種、収入による違いがあまり見られない。男性の場合、「会社経営者・役員」の肯定的傾向が強い(.227)。また、「学校・保育所・幼稚園・同窓会組織の活動」に参加の度合が大きいと肯定的傾向が強まるが(.247)、因果関係としては逆で、現在の仕事についての自信があるとこの種の活動に参加するモチベーションが上がっているとも考えられる。そして、学歴差もあり、「高卒」の者は否定的な傾向が強まる(-.133)。興味深いのは、説明変数としての「家事時間」の効果が性別によって異なっているということである。「家事時間」が長い場合、男性では「仕事で関わる社会の人々に認められていると思う」という回答が減る傾向にあり(-.189)、女性では逆に肯定的な傾向を増やす傾向がある(.152)。つまり、家事・育児に時間を割きながら仕事をしているという状況は、男性には仕事上の負い目に繋がっているが、女性にとってはむしろ自負心を高める効果があると考えられる。

また、「自分の仕事ぶりは、職場の同僚に認められていると思う」人の割合も府中町 66.3%、三次市 65.8%と多い。これについては、「職場参加での地域活動・社会活動」への参加の度合の高さの説明力が最も大きい(.114)。収入や仕事についてのモチベーションの高さ(やりがい、天職という意識)よりも、職場参加の活動への積極的関与こそが、よりも職場の同僚からの承認と結びついているという状況は、日本的組織の特徴を示すものといえるかもしれない。その一方、男性については、職種による違いが大きく、「運搬・清掃・包装」(100.0%)では高く、「製造作業・機械操作」(50.9%)で低い。また業種では、「卸売・小売」で高く(86.2%)、「医療福祉」で低い(40.7%)。女性に限れば、やはり「家事時間」の説明力が大きく(.182)、長い家事時間にも関わらず仕事をこなしているという自負心が、肯定的回答の度合を高めていると考えられる。

## 4・7 仕事のモチベーションと長時間労働に対する考え方

「余暇の時間を大切にしたいので、仕事で長時間働きたくない」と思っている人の比率は、府中町70.8%、三次市68.3%。全体的傾向として、仕事で長時間働くよりは余暇の時間を大切にしたいという考えの傾向が、収入・地域・性別・年代・学歴を問わず強い。階層意識とも相関しない。ただし、「正規雇用」については府中町71.8%、三次市69.8%と余暇優先志向が強いのに対して、「仕事を主にしている非正規雇用」の場合は府中町68.8%、三次市63.8%とやや弱まる(・.100)。また、業種のなかで、余暇優先志向の強さが目立つのは「公務員」で、逆に弱いのは「農林漁業」であるが、「公務員」の就労時間の中央値は男女とも50時間で割と長めである。

そして、注目したいのは、この項目と「自分の仕事にやりがいがある」という項目との間に負の相関関係があることだ(r=-.180)。仕事にやりがいのある人は、余暇よりも長時間労働を優先しているということである。逆にいうと、仕事にやりがいのない人が余暇を優先したいと考えているとも言える。また、「仕事の現状」に対する満足度とは負の相関関係にある(r=.152)。そうしたことから考えると、「余暇を大切にしたい」という意識は、現在の仕事へのモチベーションの低さを示しているとも言える。また、「余暇の時間を大切にしたい」人は「一生過ごす場所として、広島のような地方都市はいいと思う」傾向が強いが(r=.105)、「中国山地のような田舎」に対する評価は低い(r=.-083)。余暇を過ごす消費や娯楽の環境として、「地方都市」が高く評価されていることを示す結果である。

「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思う」のは、府中町 47.7%、三次市 49.7%と半々に分かれる。最も説明力があるのは「高卒」の長時間労働肯定の傾向である(.139)。第二に「性別」で、男性が府中町 57.2%、三次市 55.7%であるのに対して、女性は府中町 42.0%、三次市 45.4%と低い(-.111)。ただし、女性は特に学歴による意識の違いが大きく、長時間労働肯定傾向は「大卒」が府中町 38.8%、三次市 39.1%と少ない一方、「高卒」は府中町 55.0%、三次市 62.9%と強くなる。そして、高卒女性は、「飲食店・宿泊サービス業」で勤務している者の割合が多い。第三に「世帯年収」の説明力もあり、年収が高いと否定的な回答が増える(-.110)。第四に「公務員」である場合、否定的な傾向が強い。また、男性に限ると、「配偶者の有無」の説明力が大きい(-.226)。配偶者がいない場合は府中町 61.9%、三次市 59.7%と長時間労働を肯定する傾向が強いが、いる場合は府中町 54.3%、三次市 52.0%にまで下がる。

ここで注意したいのは、「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわない」という考える人の生活水準は低めであるにも関わらず、「階層意識」は特に低いわけでもなく、収入に不満が多いわけでもないということだ。その一方、「やりがいのある仕事であれば、長時間労働でもかまわない」という項目との間に強いつながりがあり(r=.527)、「毎日の仕事を楽しいと思う」という項目とも関連深い(r=.105)。つまり、「高卒女性」の多くは、生活水準が低いにも関わらず、長時間労働を厭わない勤勉さがあるために相対的な

剥奪感に乏しく、むしろ毎日の仕事を楽しいと感じている傾向があるということである。

次に、「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわないと思う」のは、府中町 30.4%、三次市 30.8%。厳しい経済事情を反映して、否定的な全体傾向が強いことが確認される。配偶者がいると、さらに否定的な傾向が強まる。特に男性の場合、そうした傾向がある。配偶者がいると、自分の仕事のやりがいよりも、満足な収入を得て生活を安定させることが優先課題となるからだろう(・.142)。そして、最も説明力が大きいのは「個人年収」で、「個人年収」が低い場合のほうが否定的な傾向が強い(・.172)。個人年収が低い人にとっては、「やりがい」よりも「満足な収入」が優先すべきことであるということだろう。ところが、注目すべきは、他の業種よりも収入が低い「飲食店・宿泊サービス業」において、肯定的な回答傾向がむしろ強いということである(.075、府中町 54.6%、三次市 44.6%)。これに対して、むしろ世帯年収については高いほうである「医療・福祉」(やはり女性に多い)については、全業種のなかで最も否定的になる(・.085、府中町 20.8%、三次市 26.9%)。これは、なぜだろうか。

「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」という人は収入満足度が高い(r=.176)。これは一般的傾向である。だが、「飲食店・宿泊サービス業」(府中町 45.0%、三次市 46.7%)の従事者は、「医療・福祉」(府中町 35.9%、三次市 31.7%)よりも収入についての満足度が高い。その一方、「飲食店・宿泊サービス業」従事者は「今の仕事にやりがいがある」者も府中町 55.0%、三次市 60.0%と他の業種に比べて相対的に少ない。これに対して、「医療・福祉」関係者(多くは女性)は、「今の仕事にやりがいがある」者が府中町 77.4%、三次市 78.5%と高い。一般的に言って、この項目と「現在の仕事にやりがいを感じられる」かどうかは相関しないのである。

つまり、今の仕事に「やりがい」があるか否かによって、その回答動機には二通りの労働観が考えられるということである。一つは、「やりがいのある仕事」であるゆえに、不満足な収入を甘受するという労働観である。「やりがいの搾取」である。「医療・福祉」関係者は、まさにそうした傾向が強いからこそ、「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」という言い方に違和感を持つ人が多いと考えられる。これに対して、「飲食店・宿泊サービス業」の場合には、内在的な「やりがい」に乏しく、収入が低くてもそれを甘受する傾向がより強くなる。そうしたなか、労働者を支えるのは勤勉さである。「飲食店・宿泊サービス業」の関係者にとって、収入が低いのは仕方のないことであり、だからこそ、勤勉に働く日常を支える「やりがい」が求められるのである。そして、以下に見るように、それが長時間労働を肯定するメンタリティにも繋がっている。そうだとしたら、そこには「医療・福祉」関係者に見られる「やりがい」の搾取とは区別される、「勤勉さ」の搾取がある、と言うことができる。

「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわないと思う」のは、府中町 47.1%、三次市 44.7%。最も説明力が大きいのは「配偶者の有無」(-.184)と「世帯年収」(-.129)。

「配偶者あり」の場合は 40.3%で、「配偶者なし」の場合 54.8%と比べて、否定的な傾向が強まる。また、「世帯年収 400 万円」以上で 37.6%なのが、「400 万円未満」で 53.1%に上がる。また、この項目においても、「飲食店・宿泊サービス業」の肯定的な傾向 (.085、女性に限ると.109) と「医療・福祉」の否定的な傾向 (-.086) に説明力がある。「やりがいがない」飲食店・宿泊サービス業のほうが長時間労働を容認する、という逆説的状況がここでも見いだせる。このほか、やはり「高卒」の長時間労働肯定傾向が顕著である。男女ごとに重回帰分析を行うと、男性は「個人年収」の説明力があり (-.142)、女性は「世帯年収」 (-.167) の説明力があるということがわかる。いずれにしても、年収が低いほうが長時間労働容認の傾向がある。また、男性について、府中町のほうが三次市より長時間労働容認の傾向があるが、府中町のほうが男性片働き世帯が多いことと関係している。

以上からは、まず、一般に労働より余暇を優先したいと考える傾向が強く、「やりがい」があるからといって、低収入や長時間労働が積極的に受け入れられているわけではないということが示唆される。むしろ、低収入であるからこそ、やむをえない長時間労働を支えるために、「やりがい」を発見することが求められるのである。内在的な「やりがい」がなかったとしても、勤勉に働き続けるために、自分で自分を納得させるやり方が必要だからだ。一方、そもそも内在的に仕事の「やりがい」を感じられるような仕事である場合には、むしろその「やりがい」ある仕事に対する正当な対価を求める意識が強くなる。このように仕事観の違いは職業の違いとの関係が大きく、「階層意識」とは相関しない。

#### 4・8 職場の対人関係観

職場の人間関係を評価するさいに、お互いに協調的で一体感がある関係としての「同質性結合」に注目する捉え方と、互いに異なる意見を自由にぶつけあうことができる関係としての「異質性結合」に注目する捉え方がある。それぞれについて、どのように評価されているだろうか。

「お互いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想だと思う」のは 府中町 87.0%、三次市 90.4%と、ほとんどの者がこの考え方を支持している。特に、「職場 参加での地域活動・社会活動」の参加の度合には説明力がある(.089)。最も評価の低い「製 造作業・機械操作」でも 77.3%が支持しており、社会的属性を問わず、「協調性」や「一体 感」のある職場が理想とされていることがわかる。

一方、「お互いに個人の自由な考えを言い合い、正直な気持ちで付き合える職場が理想だと思う」のは府中町 81.0%、三次市 76.9%と、一見対立する価値観であるにも関わらず、こちらも大半の者が支持している。重回帰分析では、「製造業」(.143、特に男性) や「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」への参加の度合の高さ(.128、特に女性)の説明力が強いが、そのほか「他地域で就学後 U ターン」した層もこの考えを支持する傾向

が強い(.094)。「製造業」は他の業種に比べて、ダイバーシティを尊重したコミュニケーションが重視される傾向があるということが考えられる。

理論的には、職場内の「同質性」を重視するか、「異質性」を重視するかは価値観の対立ポイントとして考えられることが多い。だが、この二つの項目の回答傾向は似ており、相関は高く、支持する人はどちらの項目も支持している(r=.421)。どちらの価値観も「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思う」や、「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわないと思う」という意識と親和的であり、長時間労働を厭わない勤勉性と関わっていると見られる。仕事観として勤勉性が何より重視され、「組織の一体性」の重視と「個人の自由な意見」の尊重という論点が対立したものと受け取らないところは日本的な組織文化の特徴と言えるかもしれない。ただし、生活観や人生観としては違いが出ている。「組織の一体性」を重視する人は、「人並みに安定した暮らし」(r=.161)や「平凡な幸せ」(r=.113)を求める傾向が特に強い。一方「個人の自由な意見」を尊重する人は、「組織に縛られない自由な生き方」(r=.258)を重視する傾向が強い。

## 4.9 出産後の女性の職業継続に対する考え方

「女性は子どもができても、ずっと職業を続けるほうがいいと思う」という回答は、府中町 61.3%、三次市 69.4%ととても高い。重回帰分析では、「サービス」(.186) または「事務」(.130) という女性の割合が多い職種で特に肯定的な回答傾向が強い。そのため、女性のほうが男性よりもこの考え方に肯定的な傾向は少しあるが(女性 67.7%、男性 62.2%)、その説明力は、職種による違いに解消される。注目すべきは、女性については現在就業中の人と専業主婦との間で女性の職業継続についての考え方が割れていて、専業主婦については男性よりも否定的な回答傾向があるということだ(.108、府中町 49.4%、三次市58.0%)。ただし、専業主婦と有業女性の価値観を対立した構図で捉えるのは適切ではない。専業主婦を含め、女性の就業継続に批判的な考え方は「家事(育児・介護を含む)の負担への不満」と結びつく(r=.089)。つまり、女性は家事をするべきだという伝統的性役割観が強いから専業主婦になったというわけではなく、家事や子育ての負担が大きく、仕事との両立が困難であることを鑑みて、職業継続を断念したというケースも多いのではないかと考えられるからである。

また、この項目は「生活満足度」や「階層意識」などとは相関しないが、人生観に関わるいくつかの項目と相関する。すなわち、女性の職業継続を支持する人は、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジ」( $\mathbf{r}=.121$ )したい人や、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」( $\mathbf{r}=.166$ )という自己実現志向が比較的に高い。

# 第五章 地域に対する評価

# 5・1 地域の満足度

「地域の現状に満足している」人の割合は、府中町 89.8%、三次市 58.2%とかなりの差がついており、重回帰分析でも両自治体の「地域差」が最も重要な変数となっている(.-413)。 府中町の地区別では、「西部」の「府中中央学校区」の 93.0%が満足しているのに対して、同じ府中町でも「東部」の「府中北小学校区」は 78.3%と少し下がる。「府中町西部」は「イオンモール広島府中」が立地するほか、商業開発が進んでいる地域で、広島市中心部に出るにもアクセスがよく、分譲や賃貸の住宅供給も活発なエリアであるため、広島都市圏のなかでも若者に人気のエリアと言える(全体では 91.4%)。他方、「府中町東部」は、高度経済成長期に開発されたニュータウンを中心とする住宅地で、「西部」のように活発な新しい商業開発や住宅供給は無く、そのため地域の満足度が少し下がる。

一方、三次市は、「中心部」が全体で 59.3%が満足しているのに対して、「周辺部」は全体で 52.9%と低くなる。「中心部」は広島県北唯一の人口集中地区 (DID) を含む市街地であり、どの地区も満足度は 50%を超えている。ただし、「中心部」で最も満足度の高い「酒屋地区」(三次ワイナリー、三次工業団地、市立三次中央病院が立地)であっても 71.4%と、府中町で最も満足度の低いエリアにも及ばない。他方、「周辺部」はおおむね田園や山林が広がる地域であるが、そのなかでも詳しくみると、主に中心部へのアクセスの違いによって、満足度に差異は見られる。市街地に隣接し、車で 10 分程度と近い「和田地区」「神杉地区」「栗屋地区」の三地区については、実数は少ないが満足度が 70%を超えている。他方、「青河地区」「川西地区」「布野町」「作木町」「甲奴町」の五地区については満足している人の割合が非常に少なく、3分の1を下回っている。これらの五地区は、地区内にほとんど(あるいは全く)店舗がなく、三次市市街地までのアクセスもよくないという点で共通している。こうしてみると、「地域差」のかなりの部分が、商業環境の格差と、商業地へのアクセスから説明されることは明白である。要は便利でアクセスさえよければ、総合的な地域の満足度は上がるということである。

それでは、「地域差」以外に地域満足度に対して説明力のある要因として、何が考えられるだろうか。重回帰分析を行ってみると、第一に「個人年収」の説明力がある (-.097)。地域満足度は個人年収の高い人のほうが下がる。特に府中町の場合はそうした傾向が見られるが、詳しく見てみると、男性の個人年収 400 万円以上の層で満足度が落ちている。「個人年収」高いと仕事へのコミットが深まり、府中町の魅力であるところの便利な商業施設を利用することもあまりないためであろう。あるいは、「個人年収」が低くても関係なく、府中町はその充実した消費環境ゆえに満足度が高い地域であるとも言える。また、府中町で

は、年齢が高いと若干満足度が落ちるが、これも同様の説明があてはまるだろう(-.140)。 20 代は消費や娯楽目当てに積極的に外出する傾向が強いが、30 代になるとそれが鈍る。「20 代女性」の満足度は 94.1%なのに対して、「30 代男性」は 87.3%。30 代になると消費環境 以外の部分にも目を向けるので、地域に対する視点が少し変わるのではないかと考えられ る。

一方、「地縁組織の活動」(.081)、「趣味関係のグループの活動」(.081) への参加など、 地域活動・社会活動への関与の程度も説明力を持っているが、府中町について限るとそれ は有意ではない。三次市では「職場参加としての地域活動」(.145、「積極的に参加」「一般 的参加」で 64.9%)や「地縁組織の活動」(.129、「積極的に参加」「一般的に参加」 62.0%) への参加の度合は、地域の満足度を高める要因になっている。地域満足度は「地域活動に 積極的に参加したい」(r=.261) とか、「地域にいる多様な人たちと交流することに興味が ある」(r=.251) とか、「隣近所の人たちと交流することに興味がある」(r=.254) といった 価値観と正の相関関係にある。つまり、地域コミュニティへの関与が深い人は、満足度が 高い傾向があるということだ。

府中町と三次市との間には圧倒的な消費環境格差があり、地域満足度はそれによって決まる部分が大きい。府中町は年収にかかわらず満足できる消費環境をおおむね実現している。ただし、地域での消費に積極的でない層の満足度はやや落ちる。そして、特に三次市では、地域コミュニティへの参加の度合も説明力を持つ。このような府中町と三次市との間に見られるコントラストは、ある程度、全国の拠点都市と周辺部の地域満足度格差の議論において一般的モデルとなりうるのではないだろうか。

地域満足度の高い人は「階層意識」も高く(「生活水準が高いほう」r=.133、「低いほうではない」r=.132)、生活満足度、仕事満足度、そして日本社会・政治の評価も含めて、あらゆる現状評価において満足度が相対的に高くなる傾向がある。だが、興味深いのは、三次市の地域満足度が府中町に及ばないけれども、三次市の生活満足度は府中町とほぼ同じであるということである。この点については、総括の章において、引き続き議論したい。

#### 5・2 交通の問題/モータリゼーション

「現在住んでいる地域の交通が不便だ」と感じる人の割合は、府中町 30.1%なのに対して、三次市は 61.9%と約 2 倍である。地域差の説明力はやはり大きい (.368)。特に三次市の「周辺部」に限ると 73.2%とその比率が高い。総合的な地域満足度の低い地域ではたいてい「交通が不便だ」と感じる割合が高く、とても強い相関関係がある  $(\mathbf{r}=.470)$ 。「交通問題」は地域満足度と最も強く結びつきが強い変数であると言える。また、「今住んでいる地域にずっと住み続けたい」という意識とも最も相関関係が強い変数の一つである  $(\mathbf{r}=.338)$ 。その一方、「就労時間」が長いと、「不便」という人が増える (.082)。週あたり

60 時間超の長時間労働者については府中町 48.8%、三次市 77.7%と「交通が不便」と考える人が多くなる。就労時間が長いと、時間的効率を求める意識が強まるためであろう。

府中町のなかではイオンモールまで徒歩圏内の「府中小学校区」が 17.6%と低いが、その一方、鉄道駅からやや遠い住宅地である「府中北小学校区」だけは 56.5%と半数以上が不便を感じている。ニュータウンの高齢化とともに交通弱者が増えることが心配される地域である。

これに対して、三次市では「三次地区」だけが 47.8%と半数を下回るが、他の地域は不便を感じている人の割合が半数を超える。三次市中心部、特に十日市地区は徒歩圏内に 2 つのショッピングセンター、市役所、ファミリーレストランなどが集まっており、基本的な日常生活機能は整っている。雇用も比較的狭いエリアに集中しているので、通勤時間が府中町に比べて長いとも思えない。つまり、三次市で「交通が不便」という回答が増える理由は、日常生活上の不便というよりは、主に休日などに広島などの他地域に出るための面倒さを意味すると考えられる。三次市に限った重回帰分析では「中卒」(.179、16.6%)「高卒」(.125、56.4%)で、「大卒」(67.4%)と比べて「不便」と考える人の比率がとても少ないことがわかる。それも同じ理由で、「大卒」の生活圏のほうが比較的広いからである。三次市で「大卒」の場合、広島など他地域に人間関係が広がっているため、移動範囲が大きくなるぶん、「交通の不便」さが気になるのだと考えられる。

これに関連し、「現在住んでいる地域での生活には、自家用車が欠かせない」と思うのは、 府中町 63.4%に対して、三次市は 96.5%。**両自治体の差は大きく(.577)、三次市ではほと んど全ての人が「自家用車が欠かせない」と回答している**。全地区のなかで最も低いのは 「府中小学校区 | 53.0%。イオンモールが徒歩圏内で、鉄道駅(天神川駅、矢賀駅)にも歩 いて行けるという利便性の高い地域であるため、自家用車の必要性が薄いと考えられるの であろう。ただし、府中町で自家用車の必要がないと考えるのは、主に配偶者がおらず(.131)、 女性である場合(.125)である。府中町の独身女性は、自家用車が欠かせないと考える人 が 41.4%と突出して少ない。その一方、配偶者のいる男性は 84.4%とその倍以上になる。 三次市の場合には独身女性は 94.5%、配偶者のいる男性が 91.6%と両者にほぼ差がないの とでは大きな違いがある。これは、配偶者のいる場合の「ファミリー型消費」と、独身女 性において活発な「個人型消費」の違いに対応しているのではないかと考えられる。モー タリゼーションに依存した「ファミリー型消費」については、府中町も三次市もあまり変 わりはない。ファミリーで移動することを考えるとき、公共交通機関を乗り継ぐより、車 で移動するほうがずっと快適だ。一方で、私事を中心とした「個人型消費」のためだけな らば、むしろ車が無いほうが身軽で効率的であることも多い。しかし、三次市は車が無い と商業施設にアクセスできないので、いずれにせよ車が必要となる。府中町と三次市で自 家用車の必要性についての比率が異なる理由は、この点にあると考えられる。

#### 5・3 地域外への移動への関心

「現在住んでいる地域の外に、買い物や遊びに行く必要を感じない」人の割合は、府中町が 47.2%なのに対して、三次市は 7.7%と大差がついている (.527)。三次市の場合は、重回帰分析をしても、社会的属性を問わず、ほとんどが「地域の外に」買い物や遊びに行く必要があると答えていることがわかる。一方、府中町は回答傾向が半々に割れている。「地域の外に」買い物や遊びに行くと考える傾向は、居住歴の違いによって説明される部分が大きい。府中町は消費環境が充実しているので、「ずっと地元」にいる人については「他地域に買い物や遊びに行く必要を感じない」人が 57.2%と過半数を占める。それに対して、府中町でも「結婚で転入」した人は (40.6%、・.190) や、「他地域で就学後 U ターン」した人 (37.3%、・.112)、「仕事で転入」した人 (39.4%)の否定的な回答が増えるのは、他地域に愛着があり、人間関係もあるためだと考えられる。そして、この項目は「階層意識」とは相関しないが、各種の満足度と正の相関関係にある。そして、定住希望とも強い正の相関がある (r=.249)。

「仮に現在住んでいる地域の外に行く機会がなくても、退屈だと感じないと思う」人の 比率は、府中町 45.7%に対して、三次市は 17.7%とやはり大差がついている (-.390)。地 区別ではやはり消費が至便な「府中小学校区」で 60.5%ととりわけ高い。この項目は、地 域満足度と正の相関関係にあり (r=.311)、定住志向の強さとも関係している (r=.303)。 た だし、「階層意識」とは相関しておらず、各種の満足度とも相関しない。「現在住んでいる 地域には、刺激的な人との出会いの機会が多い」と考える人が多く(r=.260)、人生観とし ては堅実志向との関係が深い(「平凡で安定した暮らし」r=.103)。三次市の場合は、「農林 漁業」従事者は、「退屈だと感じない」傾向が強い(.173)。また、「地縁組織の活動」に参 加の程度が高いと、「退屈だと感じない」傾向が強い(.146)。**三次市では、農村型の地域コ** ミュニティに居場所のある人は「退屈とは感じない」傾向があると考えられる。だが、そ ういう人たちは少数派にとどまり、その他、ほとんどの社会的属性において「退屈」と感 じている人のほうが圧倒的に多い。これに対して、府中町の場合は回答が割れている。最 も説明力があるのは「就労時間」で、仕事の時間が長ければ長いほど「退屈だ」と感じる 人が増える(-.201)。就労時間が長い人は関心が地域での消費やコミュニティに目が向いて おらず、そのために地域の消費環境が充実していても、地域が味気なく思える、という状 況が考えられる。また、この項目についても、「ずっと地元」の人は 57.7%が「退屈だと感 じない」のに対して、「結婚で転入した人」は40.6%、「仕事で転入した人」は31.8%と少 なく、差がついている。

「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」という考えについて、府中町52.8%に対して三次市は70.1%と多い(.185)。府中町では平日生活圏と休日生活圏がそれほど変わらないのに対して、三次市では休日に広島都市圏にまで遠出する人が多いという状況が如実に現れている。この項目と地域満足度は負の相関関係にあり

( $\mathbf{r}$ =-.111)、定住志向も弱い ( $\cdot$ -.185)。「一生暮らす場所」として、「中国山地のような田舎」を支持する人は少なく ( $\mathbf{r}$ =-.155)、「東京のような大都市」を支持する人が多い ( $\mathbf{r}$ =-.125)。そして、自己実現志向と相関が強く、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」人や ( $\mathbf{r}$ =-.178)、「人とは異なる自分の個性を磨くことが大事」という人が多い( $\mathbf{r}$ =-.201)。**どちらの地域においても、年齢に説明力があり、若いほうが地域外に出かけたいという意欲が高い傾向にある** ( $\cdot$ -.116、20 代は府中町 55.7%、三次市 73.1%)。また、府中町でも三次市でも「休日には、地域外に出かけたい」人の割合が、「結婚で転入」した人(府中町 62.5%、三次市 79.4%)は高くなる。その一方、「地元在住」の者は府中町 48.6%、三次市 68.2%と低めになる。

一方、「長い休みがとれたとしたら、海外に行くなど遠出をして、見聞を広めることに興 味がある」という考えについては、府中町 70.6%、三次市 64.2%である。**府中町のほうが** 「海外志向」「見聞を広める」ことに関心が高い (-.095)。この項目への賛否は地域満足度 とは特に相関がないが、定住志向の弱さと関連がある (r=-.136)。 職種による違いが大きく、 「製造作業・機械操作」に従事する者については府中町 53.4%、三次市 53.7%とポジティ ブな回答の比率が低い(-.147)。その一方、**「事務職」はポジティブで、府中町 89.2%、三** 次市 **69.7%と、特に府中町において比率がきわめて高い** (.149)。また、「個人年収」によ る違いもあり、「個人年収400万円以上」では府中町81.1%、三次市71.1%と高くなる(.101)。 ただし、個人年収が無くても過半数が「興味がある」と回答しており、収入が低いからと いって「海外」や「見聞を広める」ことに興味がないというわけではない。「階層意識」が 高めな傾向があるが(r=.179)、生活満足度ほか現状肯定傾向との結びつきは強くなく、む しろ、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしたい」等の自己実現志向との相関 が強い(r=.337)。地域活動・社会活動はその種類によって効果が違う。**「海外志向」「見聞** を広めること」 について、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」 (.091) や 「職 場参加としての地域活動・社会活動」(.113) への参加度が高い者は比較的ポジティブなの に対して、「地縁組織の活動」(-.107)への参加度が高い者はむしろネガティブである。

一言で地域外での活動への関心といっても、消費や人間関係を目的とした都市部への移動への欲求が高い三次市と、その必要性に乏しい府中町とでは回答傾向がずいぶん異なる。ただし、両地域の共通点として、地域外への移動に不活発な「ずっと地元にいる人々」と、積極的な「U ターン層を含む地域外での生活経験がある人々」との間にずいぶんと価値観の相違があることに注目できる。地域社会は流動化しており、「ずっと地元」という居住歴の人は少数派であるので、総じていえば地域外での活動に関心の強い人が多くなる。また、地域外の活動への関心の高さは、「階層意識」とはそれほど関連せず、むしろ人生観の違いとの結びつきが強い。すなわち、「堅実志向」の強い人たちは地域外への移動についての関心が乏しいが、その一方で「自己実現志向」の強い人は「地域にこもる」ことに飽きたらない傾向があると言える。

## 5・4 「若者や子育て世代」にとっての地域

「現在住んでいる地域に、20~30代の若者や子育て世代にとって暮らしやすい生活環境がある」と考えている人の比率は、府中町 78.2%、三次市 32.5%。両自治体のあいだで、はっきりとネガ・ポジの分かれた評価が下されている (-.467)。

三次市では近年開発が進み、子ども向けの公園施設なども立地している「酒屋地区」が45.0%と突出して高いが、それでも過半数に至らず、府中町のどの地区にも及ばない。府中町では、「子あり」が「子無し」より評価が高い(.212、81.9%)。ファミリー型の消費環境が整っていることが影響していると考えられる。また、「世帯年収」の違いによって、評価が変わる(.155)。「世帯年収 400 万円以上」では82.6%と評価が高いが、「世帯年収 400 万円未満」では68.0%にまで落ちる。一方、三次市では「中心部」と「周辺部」の違いが大きい。「若者や子育て世代にとって暮らしやすい生活環境」があると考える人の割合は、「中心部」では38.1%なのが、「周辺部」ではわずかに24.2%である。「周辺部」は若者や子育て世代向けの住宅供給が乏しく、多くが父母と同居している。父母と同居している場合は、別居している場合と比べて評価が低い(-.156、24.4%)。また、「地縁組織の活動」に「積極的に参加」あるいは「一般的に参加」している人は、平均よりも高い38.1%が評価している(.112)。

次に雇用問題について。「現在住んでいる地域に、20~30 代の若者や子育て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある」については府中町も 29.2%と少ないが、三次市はわずかに 8.0%となっている (-.423)。「職場参加の地域活動・社会活動」への参加度が高い場合、比較的ポジティブな評価をする傾向があるが (.107)、ポジティブな回答が多数を占める社会的属性はその他に一つもない。若い世代の雇用について、府中町でも、三次市ほどではないとはいえ、「魅力的な仕事の選択肢がない」という悲観的な認識が一般に共有されている。広島都市圏に包摂された府中町でさえこれほどにネガティブであるのだから、全国の地方圏の若い人の雇用状況に対する見方は相当に厳しいということが推定される。

そして、「現在住んでいる地域に、20~30 代の若者や子育て世代にとって魅力的な地域活動の選択肢がある」については、三次市が 19.5%と低い評価であるのに対して、府中町は 48.4%とかなりの差がある。広島圏全体の地域活動に参加できる府中町と、三次・庄原エリアのなかで選択せざるをえない三次市との差は明確である。だが、実際には、何らかの地域活動・社会活動に積極的に参加している者は府中町では 25.8%、三次市では 34.6%と三次市のほうが多い。地域活動・社会活動について、選択肢はそこそこにあっても参加しない府中町と、参加意欲はあっても選択肢がない三次市とでは、対照的な問題構造があると言える。そして、「選択肢がある」と考えるかどうかについては、実際に地域活動・社会活動に参加している者の評価が比較的高い。特に「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓会等の活動」(.122、府中町 56.4%、三次市 21.5%)、府中町では「趣味関係のグループの

活動」(.180、55.8%)、三次市では「職場参加としての地域活動・社会活動」(.168、22.5%) に「積極的」ないし「一般的」に参加している者は、相対的にポジティブな評価傾向にある。このほか、三次市では、比較的に地域活動・社会活動への関わりが深い「自営業主・家族従業員」で肯定的な傾向が強いことに注目できる(.132)。一方で、「飲食店・宿泊サービス業」はネガティブな傾向が強い(-.121)。

「若者や子育て世代」にとっての地域の現状評価を尋ねた以上の3つの項目は、消費や 娯楽の格差を象徴し、いずれも三次市は府中町より肯定的回答が圧倒的に少ない。だが、 どちらの地域についても、「階層意識」が高い人については高めに評価する傾向があるとい う点は共通している。

## 5.5 地域の交友関係についての満足度

地域の交友関係について、「リラックスして付き合える関係の友人」と「刺激的な人との 出会い」とに分けて尋ねてみた。交友関係の状況について、自分と近い関係にある人との 結びつき、すなわち「同質的結合」と、自分と異なる立場の人々との結びつき、すなわち 「異質性結合」とに分けて考えてみるためである。

「現在住んでいる地域には、リラックスして付き合える関係の友人が多い」と答えた人の割合は、府中町 39.9%、三次市 43.5%とやや否定的な回答が多い。両自治体間の地域差はない。説明力があるのは、第一に居住歴であり、第二に地域活動への参加の程度である。居住歴では、肯定的比率が最も高いのが、府中町では「ずっと地元」(.252、57.3%)、そして三次市に限られるが、「他地域で就学後に U ターン」(.225、51.3%) や「他地域で就職後に U ターン」した者の肯定的回答の比率も高い(.155、61.2%)。いずれも現住所が「地元」である者である。その一方、最も肯定的回答が少ないのは「結婚で転入」(府中町 25.0%、三次市 37.7%) であり、「仕事で転入」も少ない。府中町でも三次市でも、今住んでいる地域が地元である場合は「リラックスして付き合える関係の友人は多い」と考える者が過半数だが、地元でない場合は対照的に少ない。

また、各種の地域活動・社会活動の参加の程度が高ければ、「リラックスして付き合える関係の友人が多い」比率が高まる。 具体的には「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」(府中町 53.3%=.283、三次市 48.4%)、「趣味関係のグループの活動」(府中町 45.1%=.105、三次市 56.1%=.155)、「職場参加の地域活動・社会活動」(府中町 44.7%、三次市 50.0%=.125)、「地縁組織の活動」(府中町 44.7%、三次市 50.0%=.097)であるが、いずれもそれぞれの活動に「積極的参加」あるいは「一般的参加」している場合に、「リラックスして付き合える友人が多い」人の比率が高い。その一方、「製造業・機械操作」に従事する人は、ネガティブな回答比率が目立って多い(府中町 26.0%、三次市 29.3%=-.120)。

また、「現在住んでいる地域には、刺激的な人との出会いの機会が多い」と思うのは、府

中町 15.7%、三次市 13.3%。肯定的な答えをする人の割合は総じてとても少ない。**住んでいる地域では、刺激を受ける人との出会いの機会が少ないと感じている者が多い**。重回帰分析では、両自治体の差も有意であり、**都市圏規模の小さい三次市のほうが「刺激的な人との出会いが多い」と感じている人は少ない**(-.136)。居住歴による説明力も大きく、やはり「他地域に就学後 U ターン」(.146) してきた層や、「ずっと地元」層(.115) が肯定的な傾向が強いが、「父または母と同居」の場合はネガティブな傾向が強い(-.123)。また、各種の地域活動・社会活動の参加の程度にも、やはり説明力がある。具体的には、「地縁組織の活動」(.098)、「業界団体・同業者団体・労働組合」(.098)、「趣味関係のグループの活動」(.119) に関わりのある人は、比較的ポジティブな回答傾向を示す。

両項目とも、各種の満足度に関わる項目についての現状肯定傾向とも結びついており、収入とは直接関係していないが、高めの「階層意識」と相関している(r=.176)。地域の交友関係が充実している人は、生活水準を高めに見積もる傾向があるということである。そして、上記二つの項目をクロス分析すると、「リラックスして付き合える関係」と「刺激的な人との出会い」のどちらも多くないという人が両自治体とも過半数を占める(府中町56.1%、三次市53.1%)。地域での交友関係が最も薄いこのタイプは、地元外出身者(府中町64.9%、三次市60.8%)のほうが地元出身者(府中町45.0%、三次市45.6%)より多くなる。次いで多いのは「リラックスして付き合える関係」の友人はいるが「刺激的な人との出会い」に乏しいと考えている人で府中町28.4%、三次市33.6%である。このタイプは、Uターン層を含む地元出身者(府中町38.1%、三次市41.7%)が地元外出身者よりも多くなる(府中町20.6%、三次市25.0%)。

## 5.6 地域定住意識

「今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたいと思っている」のは府中町75.1%と多いのに対して、三次市は56.4%にとどまっている(-.278)。府中町を「東部」(郊外住宅地)と「西部」(商業地域)に分けると、「西部」が76.8%と高いのに対して、世帯内シングルの多い「東部」はやや落ちて73.2%である。一方、三次市を「中心部」(人口集中地区)と「周辺部」(農山村地域)とに分けると、「中心部」が54.8%であるのに対して、「周辺部」は61.2%。世帯内シングルが多いにも関わらず「周辺部」のほうが定住希望者の比率が高い。三次市の中心部で最も人口が多い「十日市地区」は、市内で最も商業施設が集まっている場所であるが、「ずっと住み続けたい」人の割合は非常に低く、約半数(51.8%)にとどまっている。三次市中心部に居住する者は、周辺の農村部に(自分のまたは夫の)実家がある場合も多く、将来的には実家周辺に戻ることを念頭に置いていることも理由として考えられる。

重回帰分析では、地域差の次に居住歴の説明力が大きい。今住んでいる地域が「地元」

である者と「地元外」である者を比べると、「地元」では府中町 83.0%、三次市 70.8%が「ずっと住み続けたい」のに対して、「地元外」が府中町 68.7%、三次市 41.1%と大差がついている(「ずっと地元」.283、「他地域で就学後 U ターン」.258、「他地域で就職後 U ターン」.139)。特に、三次市の「地元外」出身者の定住希望の少なさが際立っている。どちらの自治体でも、年齢に説明力があり、30代になると定住希望が強まる(.115)。また、府中町に限ると、「子あり」(.153)「女性」(.161)で定住希望が増える。子どものいる者や女性にとって、府中町の充実した消費環境は、定住希望を強める主要因である。一方、三次市については、「地縁組織の活動」への参加と定住希望との結びつきが強い(.191)。

定住の希望とは別に、現実的な将来予想はどうだろうか。「20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う」という項目については、府中町 66.4%、三次市 64.7%が同意している。「定住希望」については府中町と三次市の開きは大きいが、この項目についてはほとんどなく、府中町でも三次市でも 3分の 2ほどの者が 20年後も今の地域に住んでいるだろうと予想している (-.116)。地区による違いも見られない。ただし、重回帰分析をすると「定住希望」と似たような結果がでる。例えば、居住歴による違いは大きく、「地元」が府中町 75.7%、三次市 76.0%であるのに対して、「地元外」が府中町 59.2%、三次市 52.7%と差がついている(「ずっと地元」.353、「他地域で就学後 U ターン」.295、「他地域で就職後 U ターン」.181)。また、「子あり」の場合、定住を予想する者の割合が増える(.100)。「地縁組織の活動」に説明力があり、「積極的に参加」「一般的に参加」している者は府中町 77.0%、三次市 81.3%と定住を予想する者の比率が高い(.188)。このほか、府中町では、マツダ本社工場が立地することと関係するためか、「製造作業・機械操作」の比率が 80.0%と高い。三次市では「学生」で今の地域での定住を予想する者は 13.6%しかいない。

定住希望と定住予想をクロス分析してみると、府中町と三次市の違いがはっきりする。 府中町では「住み続けたいが、20 年後は住んでいないと思う」という者が三次市 4.6%と 少ないのに対し、府中町は 13.4%と多い。生活環境には満足しているが、転勤や就職など の事情でやむを得ずに転出しなくてはいけない事情を考えてのことだろう。一方、「住み続 けたくないが、20 年後にも住んでいると思う」者は、府中町 4.6%に対して、三次市は 14.2% と多い。つまり、府中町には転勤などの事情のため「やむを得ない転出」となる者が多く、 逆に三次市は就職や実家との関係から「やむを得ない定住」となる者が多い、ということ になる。また、「住み続けたくないし、20 年後には住んでいないと思う」者も府中町 20.2% に対して、三次市 29.4%は多い。

定住希望にしても、定住予想にしても、「階層意識」や経済条件との相関はない。日本社会・政治についての満足度も高くない。しかし、生活満足度や仕事満足度、そして自分の現状評価とは正の相関関係にある。逆に言うと、生活満足度や仕事満足度が低い人たちの定住傾向が弱い。人生観としては、定住傾向の強い人は「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしたい」という考えがやや弱く(r=-.085)、「人並みの幸せ」を大事にした

## 5.7 田舎志向/地方都市志向/大都市志向

本調査では、「自分が一生暮らす場所」として「理想的だと思う」か否かについて、「中国山地のような田舎」「広島のような地方都市」「東京のような大都市」の三つを挙げ、それぞれについての考えを尋ねている。それによれば、府中町では「田舎」40.3%、「地方都市」86.3%、「大都市」16.2%となっており、圧倒的に「地方都市」の評価が高く、大都市を評価する者はとても少ない。他方、三次市では「田舎」66.1%、「地方都市」65.6%、「大都市」12.0%となっている。三次市は「中国山地のような田舎」であるにも関わらず、「田舎」と「地方都市」の評価はほぼ同じであることに注目できる。これに関しては居住地区による違いが大きく、三次市を「中心部」と「周辺部」に分けた時に、「周辺部」は「田舎」志向が強くなるが(「田舎」74.0%、「地方都市」60.4%)、「中心部」はむしろ「地方都市」のほうの評価が高い(「田舎」62.6%、「地方都市」67.1%)。

そして、必ずしも「田舎志向」と「地方都市志向」が対立するわけではない。府中町では「地方都市」に肯定的で「田舎」に否定的な人が 43.0%と最も多いが、「地方都市」と「田舎」のどちらについても肯定的な人も 31.1%と多い。広島都市圏の周辺部の「田舎」を地元とする人も多いためだと見られる。一方、三次市では「田舎」は評価するが「地方都市」を評価しない人は多数派ではなく(27.7%、「周辺部」では 33.7%)、「田舎」も「地方都市」も評価する人が最も多い(34.6%)。また、「地方都市」は評価するが「田舎」は評価しない人も多い(27.4%、「中心部」では 30.1%)。一方、「大都市志向」を評価して「地方都市」を評価しない人は、府中町 2.0%、三次市 2.1%しかいない。

府中町では、田舎志向は「大卒」(-.207)や「短大卒」(-.129)で弱い。圧倒的に地方都市志向が強いなかでは、「製造業」の地方都市志向が弱く(75.3%)、大都市志向も相対的に高い傾向がやや目立つが(23.1%)、そのほかに社会的属性による違いは説明力を持たない。

これに対して、三次市の「田舎志向」は、「地縁組織の活動」への参加の度合が最も説明力が大きい(.263)。また、地元出身者の田舎志向の強さも鮮明である(「他地域で就学後に U ターン」.185、「ずっと地元」.110)。「他地域で就学後に U ターン」した層のなかでも最も積極的な定住層とみられ、それを裏付けるデータになっている。その一方、特に「田舎志向」の強い職業はなく、そのなかで「公務員」の「田舎志向」が弱いのが目立つ(・.105)。「公務員」はそもそも地元外出身者の職員比率が高く、県職員など三次市に特に愛着のない人も多いためではないかと考えられる。また、「地方都市志向」は「販売」職(.153)や「教育・学習支援」業(.113)で強いほか、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」(.107)への参加も説明力を持つが、特にその強弱が目立つ社会的属性は他にない。そして「大都市志向」についても、「不動産・金品売買」業(.167)でやや高いのを例外とし

て、社会的属性を問わず総じて低い。

「田舎志向」「地方都市志向」「大都市志向」は、様々な価値観の相違とも関わっている その違いについて、偏相関分析の結果を中心にして、詳しくみてみよう。

第一に、「田舎志向」が強い人は、収入や「階層意識」が特に高いわけではないにもかかわらず、生活や仕事、地域や日本社会、そして自分自身の現状についての満足度が総じて高い(生活満足度 r=.169)。これに対して、「地方都市志向」の人たちは、地域の現状評価(r=.138)や友人満足度(r=.130)が有意に高いが、その他の項目に現状肯定傾向が見られるわけではない。「大都市志向」の人にはそのような傾向はなく、地域の現状評価については否定的傾向が強い(-.126)。そして、「現在の地域における定住希望」についても「大都市志向」の人は顕著に低い(r=-.210)。また、「田舎志向」の人たちは平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れたい」と考える人が多い(r=.110)。これに対して、「地方都市志向」や「大都市志向」が強い人は「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」傾向が相対的に高い(地方都市 r=.085、大都市 r=.162)。

第二に、「田舎志向」の人は、仕事の「やりがい」を重視し、なおかつ低収入や長時間労働などの悪い労働条件に適応しようとする勤勉さがある。「田舎志向」と「やりがいのある仕事をしている」(r=.123)という考えとの間には相関関係があり、なおかつ「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない」(r=.190)や「やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかまわない」(r=.168)といった考え方についても支持する人が多い。「地方都市志向」や「大都市志向」にはこのような傾向はない。また、「余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない」という項目については、「地方都市志向」の人は肯定的な回答傾向が強いが(r=.105)、「田舎志向」とはむしろ負の相関関係にある(r=.083)。

第三に、「田舎志向」の人は「お互いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想」だと考える傾向が相対的に強い(.099)。「地方都市志向」や「大都市志向」にはそのような傾向がない。

第四に、「田舎志向」の人は、家族志向的な傾向が強いと言える。「田舎志向」の人は「家族で過ごしたい」という傾向が強いのに対して(r=.112)、「地方都市志向」の人は「一人で過ごしたい」傾向が相対的に強い(r=.113)。「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然」と考える傾向も強く(r=.177)、家族によるケアを優先するメンタリティが強い。「自分の利益と関係なく、自分の身内や仲間のためを考えて行動しよう」という自己犠牲的な考え方の人も多く(r=.106)、「地方都市志向」や「大都市志向」の場合には、そのような傾向は強くない。

第五に、「田舎志向」の人は、「地域」における交流に関心が高い。たとえば「地域活動への積極性」(r=.274)や、「地域の多様な人たちとの交流への関心」(r=.212)が高い。「地方都市志向」や「大都市志向」の強い人たちには特にそういう傾向はない。「地方都市志向」の人は「地域コミュニティ」とは関係のない人の繋がりを重視する傾向があり、田舎志向

の人に比べて「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」 という人が多い (r=.155)。

## 5・8 地域開発についての価値観

「近所の商店街には、大型商業施設や大型小売店にはない魅力があるので、行ってみたいと思う」のは、府中町 50.2%に対し、三次市は 35.2%と少ない (-.231)。「職場参加としての地域活動・社会活動」に参加度が深い場合、肯定的な割合が増える (.140)。活動を通して、地域の商店街との関わりが増えるためだろう。地区別にみると、三次市では「みよし本通り商店街」が存在する「三次地区」が 40.6%で最も高いが、他の地域は総じて低い。府中町では、ニュータウンを中心とする「府中東小学校区」は 40.2%と最も低いが、向洋駅前商店街がある「府中南小学校区」で 65.2%と高い。地域別に重回帰分析をすると、府中町では製造業で否定的な度合が高いが (-.227)、製造業の中でも「製造作業・機械操作」に関わる人たちについては独身男性が多く、ファミリー消費向けの大型商業施設よりも商店街の居酒屋などを利用する傾向があるためか、むしろ肯定的な度合が高い(.185)。また、「非正規雇用の主婦」は大型商業施設を利用する傾向が強く、否定的である (-.132)。一方、三次市では商店街と関わりが深いと見られる「自営業主・家族従業員」が肯定的だが (.102)、その他のほとんどの人にとっては「近所の商店街」に対する期待感は低いと言える。そして、この項目は、収入や「階層意識」とは相関しないが、「地域の満足度」(r=.221) や「定住希望」(r=.138)、あるいは「田舎志向」(r=.209) と正の相関関係にある。

「現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」は府中町68.1%に対して、三次市は81.6%とそれよりも有意に高い(.218)。商業開発が既にかなり進んでいる「府中中央小学校区」で61.4%と最も低い一方、三次市の最大の人口集中地区である「十日市地区」では86.4%と最も高い。また、配偶者がいる場合のほうが、「嬉しく思う」比率は高くなる(.151)。大型商業施設ができれば、ファミリー消費が充実するからであろう。その一方で、「製造作業・機械操作」に関わる人たちはやや否定的である(府中町63.3%、三次市75.6%=.131)。そして、この項目については、収入や「階層意識」と相関しない一方で、「地域の満足度」(r=.084)や「定住希望」(r=.103)と負の相関関係にある。「田舎志向」が相対的に弱く(r=.192)、「地方都市志向」(r=.094)や「大都市志向」(r=.153)が多くなる。

「地域の開発が進むことで、安全で安心できる暮らしが失われることが心配」という考えに同意する者は府中町 43.8%、三次市 38.7%で、三次市のほうが少ない (-.107)。上記の「大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」人は、地域開発を支持するため、「心配ではない」傾向が鮮明である (r=-.238)。三次市に限られるが、「地縁組織の活動」の高さの説明力が大きく、「積極的に参加」ないし「一般的に参加」している人の 48.9%が「心

配」している(.142)。地域コミュニティに深くかかわる人が、開発によって地域が変化することを恐れる傾向があると言える。その一方、「配偶者あり」の場合や(-.144)、「就労時間」が長い人(-.127)については、「心配」していない人が多くなる。この項目についても、収入や「階層意識」と相関しない一方で、「地域の満足度」(r=.178)や「定住希望」(r=.254)と相関し、「地域開発が進むことを心配」している人のほうが「満足度」が高く、「定住希望」も強い。また、「地域開発を心配」する人は、「田舎志向」(r=.288)との親和性が高く、「大都市志向」(r=-.147)とは相反する傾向にある。

総じて言えば、三次市の人の大半は大型商業施設や大型小売店の乏しい地域の現状について不満に思っており、大型開発に伴うリスクも心配していない。これに対して、府中町は大型開発に反対する考えを持っている人が三次市より多い。

#### 5・9 地域コミュニティ

地域コミュニティについての考え方について、三つの項目から探ってみた。

まず、「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」のは、府中町 46.8%、三次市 49.1%と回答傾向が割れる。この価値観は、「田舎志向」との相関が強く、伝統的な地域社会の規範とのかかわりが考えられる。「階層意識」とは関係ないが、生活や仕事、地域などの各種の満足度に関する項目の現状肯定傾向とも相関する。だが、注目すべきは、この項目について府中町と三次市との間に地域差が見られなかったことである。すでに見たように、三次市でも「地方都市」志向を持つ者は三分の二ほどを占めていて、「田舎志向」に拮抗している。「何でも相談したり、助け合ったり」するのではなく、一定の距離感を持って近所づきあいしたいという都市社会的な価値観を持つ人の割合については、府中町も三次市もあまり変わりはないと考えられる。この点、大都市と違いがあるかどうかは、興味深い論点である。

この項目について、重回帰分析で最も大きな説明力を持つのは「子ども」の存在。「子ども」がいる場合、近隣との密な関係を望む人の比率は府中町 53.1%、三次市 55.6%に増える (.129)。また、「地縁組織の活動」(.118)、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」(.109)、「職場参加の地域活動・社会活動」(.089) という各種の地域活動・社会活動への参加の度合も関係する。このほか、「世帯年収」が低いほうがこの考え方に同意する傾向が強い(-.098)。特に三次市ではそうした傾向が強く(-.169)、世帯年収が低いほど、近所の相互扶助を必要としている人が増える可能性を示唆している。

これに対して、「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」という考えを持つ人は、特に収入が高いわけではないが、生活水準が高いほうだという人が多い傾向にある( $\mathbf{r}$ =.184)。また、地域満足度をはじめとする各種の満足度との相関も高い( $\mathbf{r}$ =.251)。ただ、全体としては、府中町 40.8%、三次市 42.2%として否定的な傾向のほ

うが強くなる。重回帰分析をして「興味がある」人のプロフィールを探ると、まず、現在すでに各種の地域活動・社会活動に実際に関わっている人である。ほとんどの地域活動・社会活動で、参加度が強いと「興味がある」傾向があり、「趣味関係のグループの活動」に「積極的に参加」「一般的に参加」している人については、府中町 56.3%、三次市 59.5%と半数を上回る(.120)。その一方、「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会の活動」と「職場関係の地域活動・社会活動」については、他の活動と比べて、「多様な人たちとの交流に興味がある」程度が比較的低い。異業種交流のできる趣味関係の活動では「多様な人たちとの交流」が魅力の中心になるのに対して、「学校・保育園・幼稚園」関係の活動はニーズを共有する者どうしの同質的な繋がりになる傾向があるためではないかと考えられる。ただし、「家事時間」が長いと「多様な人たちの交流」に興味を持つ傾向が強く、主婦層はママ友的な関係にとどまらない、幅広い人間関係へのニーズを持っていると見られる(.190)。

このほか、「地域の多様な人たちの交流」に関心があるプロフィールとしては、第一に「大 卒以上」の学歴が挙げられる (.105)。学歴の高さは、一般的な他者への信頼を高め、異質 な人との交流への抵抗感をなくすということであろうか。第二に、「自営業主・家族従業員」 である (.086、府中町 66.6%、三次市 68.2%)。これは、ビジネスが地域と密接に関連しているということが考えられる。第三に、三次市に限られるが、「他地域で就学後 U ターン」した層である。就学後に他地域から U ターンした者は、I ターン者と同じく外部の視点があるゆえに人材の多様性への感度が高く、その一方で同級生関係などの地元の付き合いも多いゆえに「地域の多様性」に対する関心が高くなるのだと考えられる。第四に、年齢の若さである。20 代は府中町 45.1%、三次市 47.5%と割と高い。地域に居場所を確保するために、年齢が若いほうが、人付き合いを広げることについて積極的であるということだろう。

そして、「今後、地域活動に積極的に参加したいと思っている」のは、府中町 38.1%、三次市 45.6%。三次市でも半数を下回るが、府中町よりは多い。やはり「階層意識」との結びつきが強く、地域活動への参加意思の強い人は、各種の生活満足度も高い(地域満足度との相関は r=.261)。重回帰分析では、特に三次市の場合、「他地域で就学後に U ターン」した人のポジティブさが目立っている(.135)。また、「大卒以上」でやや多くなる(.078)。その一方で「飲食店・宿泊サービス業」(-.091) や「生活関連サービス業」関係者 (-.075)、そして「建設作業」(-.109) に従事する者についてはネガティブである。

「地域活動に積極的に参加」するモチベーションは、社会的属性によって異なる。「今後、地域活動に積極性に参加したいと思っている」人の比率は、「家事が主」の人については、府中町 43.6%、三次市 40.8%と両自治体にそれほど差がないのに対し、「仕事が主」の人については府中町 35.8%、三次市 48.2%とかなりの差がつく。一般に府中町よりも三次市のほうが、有業者が地域活動を通して人との繋がりを求めるニーズが高いと言える。その結果、三次市では男性のほうが「地域活動に積極的に参加したい」人の比率が高くなる。その一方、府中町のほうは専業主婦比率が高いぶん、全体として女性のほうが「地域活動に積極的に参加したい」人の比率はより高くなる。だから、他の地域活動・社会活動と異な

り、「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会の活動」については両自治体の参加度にあまり違いはない。

「隣近所との交流」「地域の多様な人々との交流」そして「地域活動への参加」に意欲的な人たちは、総じて各種の生活満足度が高く、自分自身の現状についての評価も高い。だが、一方で、三項目すべてにネガティブな人たちが府中町 37.7%、三次市 34.1%もいるということも念頭に置くべきだろう。単純に地域活動・社会活動への参加度が高ければいいというわけではなく、人々が地域に関わるニーズの有無、そして地域に関わるモチベーションの多様性について理解を深める必要があると考える。

# 第六章 日本社会・政治に対する評価

# 6・1 日本社会・政治の状況についての満足度

「総合的に見て、日本社会や政治の現状について満足している」のは、府中町 16.6%、三次市 17.2%ととても少ない。重回帰分析では「世帯年収」に説明力があり、「世帯年収600 万円以上」になると、府中町 17.7%、三次市 22.1%になるが、微増にとどまる(.124)。また、「子どもあり」の場合の満足度が低い(.121、府中町 13.7%、三次市 13.8%)。職業では特に「サービス」従事者については評価が厳しい(-.132)。その半数以上を占める非正規雇用に限れば、この項目の満足度はわずかに 5.8%である。「サービス」従事者(理容師・美容師、介護職員、調理人、接客等)は非正規雇用の比率が高く(女性が大半)、個人年収の中央値は 100 万円台とその低さできわだっており、厳しい生活状況が日本社会や政治の現状に対する不満の高さと関係している可能性がある。これに対して「農林漁業」従事者は比較的ポジティブな傾向があるが(.084)、その他に特に高い評価をしている社会的属性は見当たらない。以下に示すように、関連項目についても似通った結果が出ている。一般に「日本社会・政治の状況」については、あらゆる「満足度」に関する項目のなかで最もネガティブな回答傾向があることは間違いない。

政治に対する信頼も非常に低い。「今の日本政府を信頼している」のは府中町 19.1%、三 次市 17.6%とかなり少ない (地域の有意差はない)。特に「サービス」(-.095) や「建設作業」(-.080) 従事者は肯定的な人が少ない。他方、三次市の「農林漁業」従事者は「信頼」する人の比率が高い(.106、41.7%)。府中町に限って「世帯年収」の説明力があり、「世帯年収 600 万円以上」で 21.0%に増える (.097)。「年齢」は若いほうが「信頼」する比率は下がり、20代 14.4%、30代 20.8%となっている(.075)。

そして、「日本の将来には明るい希望があると思う」のは、府中町 23.4%、三次市 23.5% と圧倒的に少ない。これは、内閣府の「社会意識に関する意識調査」でも同様の結果が出ている。やはり職種変数で「農林漁業」従事者が比較的高く(.123)、「サービス」(-.100)で低いという傾向が出ている。また、三次市に限ると、「家事を主とする非正規雇用」の評価が低い(-.133)。そして、この項目について、「階層意識」とは相関関係が見出せるが、重回帰分析では性別・年齢・世帯年収・学歴による有意差が出ていない。日本の将来については、社会的属性にかかわらず、大多数の人が「明るい希望」を持っていないと言うことができる。

日本社会・政治の現状評価に関わる以上3つの項目について、肯定的な少数の人たちの「階層意識」は高く(「生活水準が高いほう」r=.301)、各種の満足度に関する項目についても比較的現状肯定傾向が強くなる。だが、この層の経済階層は特に高いわけではなく、

むしろダウンシフター的な価値観との親和性の高さに注目できる。日本社会・政治の現状評価と「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」(r=.226)とか、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」(r=.341)といった項目との相関がとても強い。右肩上がりの社会状況が再び到来することを信じているから「日本社会・政治の現状」に満足しているわけではない。社会状況を認識し、現実的に適応する用意があるからこそ、楽観的でいられるというわけである。

だが、日本の社会・政治の現状そして将来展望の厳しさについては、社会的属性を問わず、共通認識となっている。「自分の将来に明るい希望がある」と思っている人に限ると、「日本の将来には明るい希望があると思う」人は府中町 34.2%、三次市 36.6%と 10 ポイントほど増加するが、それでもネガティブな評価が大勢を占める状況は変わらない。日本社会・政治の現状について楽観的になれば展望がひらけるという考え方は支持されてはいない。そのなかでも、最もネガティブな見方を示しているのが、女性に多い非正規雇用のサービス職従事者である。

## 6・2 日本社会に対する「不安」

日本社会・政治の状況に対する「不安」感情を探るために、調査項目では、戦争リスク と原発リスク、社会秩序混乱のリスクの問題を取り上げている。戦争リスクについては、「他 国からの攻撃のリスク」と、「日本の戦争参加に伴うリスク」とに分けて尋ねた。

まず、「将来、日本が他国に攻撃されて、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていいと思う」のは府中町 18.3%、三次市 14.5%。いずれも「心配」である人が圧倒的に多い傾向であるが、三次市のほうが不安を抱いている人が多く、地域差に説明力がある(-.084)。そのようななか、「大学卒以上の学歴」(.107)、「教育学習支援業」従事者(.139)は、比較的に「心配しなくていい」と考える傾向がある。社会・政治リスクに関わる関連質問について全て同様の回答傾向が見られることから、これはイデオロギーの違いというより、学歴が高いと、科学や社会システムへの信頼が高まるためではないかと考えられる。その一方で、女性に多い「サービス」従事者については不安を抱く人が多い(-.065)。また、「就労時間」が長い人が「不安」が高い傾向がある(-.113)。

次に、「将来、日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる可能性について、心配しなくていいと思う」については、府中町 20.1%、三次市 15.9%と、やはり「心配」である人が圧倒的に多い。この項目についても、「大卒以上の学歴」(.130)、「教育学習支援業」従事者(.099)で「心配しなくていい」と考える傾向が目立つ。また、居住歴による差異も目立ち、「ずっと地元」の人が府中町 25.0%、三次市 27.5%と「心配しなくていい」人が増える(.135)。他地域での生活を経験したことのある人のほうが「不安」を抱く傾向が強いようだ。この

ほか、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等」の活動への参加度が高い人も「心配」である人が多い(-.067)。

興味深いのは、上記二つの項目の間に非常に強い相関関係があり(r=.847)、回答傾向が類似していることだ。政治的な文脈においては、「他国からの攻撃」リスクを問題視することは、日本の軍事的強化を促す議論につながり、逆に「日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる」リスクを問題視することは、そうした日本の軍事的強化にともなう危険性を指摘する議論につながる。その意味で、これらは政治的な意味での「保守」「リベラル」を分かつ指標ともなりうる項目とも言える。じっさい、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等」への参加度が高い人たちが後者のほうを不安視する傾向があるのは、「リベラル」への親和性を示すとも言える。

だが、大半の人は、この二つの項目は対立する価値観を示すものとして捉えていない。 回答傾向からすると、戦争が起きるリスクが自分にとって身近であると考えるか、そうで はないかという観点から回答している者が多いようだ。近年の世論調査では、「左右」のイ デオロギー的対立軸に沿って回答傾向が分かれることがなくなってきていると言われるが、 その一つの証左となる結果であると言える。従来、各種の世論調査では大卒以上の高学歴 者のほうが「リベラル」である傾向が鮮明であったが、上に見たように、むしろ大卒のほ うが「心配しなくていい」と保守的な判断をしている傾向が強いことにも留意したい。

「将来、原発事故の影響で、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていいと思う」のは府中町 17.9%、三次市は 14.7%。女性に多い「専門学校卒」(-.108) や「家事が主の非正規雇用」(-087) で、「心配」である人が増える。「家事が主の非正規雇用」の割合が高いぶん、三次市は府中町よりも「心配」である人の割合が若干高く、t 検定ではその差は有意である。トピックの影響のためか、「電気・ガス・熱供給・水道」業は全業種のなかで、最も「心配」であると思う人が少ない(.084)。

そして「将来、日本の伝統や慣習が失われ、社会の雰囲気が悪くなる可能性について、心配しなくていいと思う」のは府中町 16.8%、三次市 11.8%と比率はとても低いが、地域間で有意な差がある (-.076)。また、性別による違いが有意で、男性のほうが「心配しなくていい」という傾向が強い (.126)。だが、圧倒的に「心配」な傾向が強いなかでは、地域や性別は、回答傾向を分けるほどの違いとは言えず、特に伝統主義的な考え方が強い社会的属性を特定することはできない。意識調査項目としては、「国を愛する気持ちをしっかり持とうと心掛けている」人が「心配」である傾向がある (r=-.151)

これら「社会・政治についての不安」に関わる四つの項目の回答傾向を分析すると、どのトピックについても「不安」である人が圧倒的多数を占めるということがわかる。そして、「階層意識」が相関し、「社会に対する不安」が多い者は「階層意識」が低く、自分自身そして社会の将来展望についてネガティブな傾向がさらに強くなるということがわかる。そのなかでも、女性の非正規労働者(サービス職が多い)で社会・政治に対する「不安」が特に強い。この層は、生活が比較的厳しく、階層意識も低い。生活不安が社会不安に直

結していると考えられる。だが、その一方、**男性の非正規労働者については、同じように** 生活不安があると考えられるが、社会・政治に対する「不安」が特に強いというわけでは ない。

他方、少数派である「心配しなくていい」という回答傾向が強い人として、各項目に共通するプロフィールは特にないが、その意識調査項目の回答パターンは類似している。まず、その収入レベルや「階層意識」にかかわらず、給料や報酬に対する不満が少ない。仕事や地域についての満足度は高いわけではないが、日本社会・政治への満足度は高い。「社会情勢を考えれば、生活水準が上がらなくてもいい」と考える傾向が強く、将来見通しに関する項目(「自分の生活が経済的に厳しくなる可能性」「20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」など)では、総じて楽観的な見通しが顕著である。

### 6・3 日本の社会環境への評価

それでは、日本の社会環境はどのように評価されているのであろうか。いくつかの項目から探ってみる。

まず、「日本は、安全で安心して暮らせる国だと思う」のは府中町 79.7%、三次市 72.0% と全体的傾向としてはとても高い比率である。ただし、「サービス」従事者 (府中町 69.6%、三次市 58.2%) については評価が比較的に低く、学歴では「専門学校卒」(-.086)、あるいは「中卒」(-.077) でも低い。いずれも収入および「階層意識」が低いカテゴリーである。三次市の女性は「サービス」従事者や「専門学校卒」の人の比率が高いため、府中町よりネガティブな回答傾向となる(t 検定で有意)。また、子どもがいる場合はややネガティブに傾く (-.103)。子どもを取り巻く安全問題についての感度が高まるためであろうか。

次に、「日本は、こつこつと努力すれば成功する可能性のある国だと思う」についても、府中町 58.3%、三次市 56.4%と半数を上回る。この項目については、何よりも雇用形態の説明力が大きく、「非正規雇用」では「日本は、こつこつと努力すれば成功する可能性のある国」とは考える比率が相対的に低い。「仕事が主の非正規雇用」で府中町 54.9%、三次市48.2%(-.097)、「家事が主の非正規雇用」で府中町 46.9%、三次市 51.4%である(-.160)。その一方、この項目については、女性のほうがポジティブである(.137)。また、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加度の高い人はポジティブな回答傾向にあり、「積極的参加」+「一般的参加」で、府中町 66.4%、三次市 63.5%である(.147)。業種では「卸売・小売」業でポジティブな回答傾向が強いが(.098)、「飲食店・宿泊サービス業」は府中町 45.9%、三次市 25.0%とネガティブな傾向が強い(三次市で-.170)。また、年齢が上がると否定的な見解を持つ人が増える(-.152)。20 代で府中町 62.6%、三次市 61.0%なのに、30 代では府中町 55.9%、三次市 53.7%に落ちる。

このように、これら二つの日本の社会環境に関わる項目については、高めに評価がなさ

れている。日本の社会・政治情勢やその将来展望については非常にネガティブな数字が並んでいるのに比べると、対照的である。非正規雇用やサービス関係者など、収入が低めの社会的属性においてネガティブな傾向があるものの、全体的傾向として、日本の社会環境についての一般的信頼は高いと言える。そして、そのことがナショナル・プライドにも繋がっているようで、「こつこつと努力すれば成功する国だと思う」と「国を愛する心をしっかり持とうと心掛けている」との間には強い正の相関関係がある(r=.302)。

ただし、「日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人々がむしろ手厚く保護されている国だと思う」という項目については、府中町 42.6%、三次市 43.4%と、全体として否定的な回答が多くなっている。日本では「差別」や「弱者」の問題が深刻であると考えている人のほうが多数である。ただし、その一方、上記の二項目と回答傾向は似通っており、相互の相関係数も高い(「安全で安心して暮らせる国だと思う」 $\mathbf{r}=343$ 、「こつこつと努力すれば成功する国だと思う」 $\mathbf{r}=.338$ )。上記 2 項目と同様に、日本社会・政治の現状評価との相関は高く  $(\mathbf{r}=.327)$ 、「階層意識」は高めで  $(\mathbf{r}=.235)$ 、金銭的余裕もあり  $(\mathbf{r}=.241)$ 、生活・仕事・地域・自分の現状などの各種の満足度が高い傾向も共通している。共通の因子として、日本は制度が整っていて良い国であるという考えがあると考えられる。

ただし、ここで注目すべき観点がある。「金銭的余裕がある」と考える人や、「生活に満足している」という人が「日本は差別がない国である」と考えているとしたら、**日本の社会環境を信頼し、「生活に満足」している人たちは、差別問題やマイノリティ問題に対する、ある種の鈍感さを持っていると言えるのではないだろうか**。

「日本は差別があまりない国」だと思っている4割以上の人のプロフィールを重回帰分析で探ってみる。第一に、「職場参加の地域活動・社会活動」への参加度の強さである(.129)。「積極的に参加」もしくは「一般的に参加」している人についていうと、府中町 49.2%、三次市 51.3%と肯定的回答が多くなる。職場参加の活動への参加は、集団への同調性を重視する傾向と結びつくが、それが差別やマイノリティ問題の存在を見えなくしている可能性がある。意識調査項目でも、「対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり方にしたがえば、間違いはないと思う」や「国を愛する心をしっかり持とう」という項目と正の相関関係にあり、「日本は差別があまりない国」という認識が、共同体感覚や組織の一体性を重視する考え方と結びついていることがうかがえる。第二に、「個人年収」の説明力である(.122)。「個人年収」が低い人は、差別や弱者の問題について感度が高いが、「個人年収」が高い人は相対的にそういう意識が弱い。詳しく見てみると、特に男性の場合に「個人年収」の違いが大きく、「個人年収 300 万円以上」では府中町 51.5%、三次市 49.2%と半数前後なのに対して、「個人年収 300 万円未満」で府中町 38.1%、三次市 42.0%と否定的な回答が増える。このほかでは、三次市について「中卒」で否定的な回答が強いが(・.112)、性別・職業・年齢等のその他の社会的属性の違いによる回答傾向の違いはない。

### 6・4 日本社会の規範をめぐって

身内の「協調性」を重視する対人関係観は、日本的組織の強みと言われるが、一方で、 それは過剰な同調圧力としての弊害を示すこともある。特に昨今では、グローバル化が進むなかで、日本人の「内向き」傾向が批判されることがよくある。ひいては、留学を希望する若者が減少していること等を引き合いに、「内向き」批判がなされることもある。こうした状況に関わる調査項目を見てみよう。

「対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり方にしたがえば、間違いはない」と考えるのは府中町 49.5%、三次市 46.0%。回答傾向は割れている。「就労時間」が有意で (-.102)、府中町で「仕事が主」の生活をしている人の拒否感がやや強い。その一方で、「建設作業」(府中町 22.2%、三次市 11.1%、-.077)と、三次市で「中卒」(-.108)での否定的な見方も強い。先にも見たように「建設作業」と「中卒」といえば、「自称ヤンキー」の比率が最も多いプロファイルでもあり、特に同調規範への反発が強いことが考えられる。また、「自営業主・家族従業員」の否定的傾向も強い (-.089)。だが、その他に、この価値観と特定の社会的属性との間に結びつきは見られない。相関関係が強くて有意である意識調査項目は、「階層意識」(「生活水準は高いほう」 r=.089)、そして各種の満足度で、現状肯定傾向はおしなべて高い。「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然だ」と家族によるケア負担を重視する価値観も強い (r=.106)。「国を愛する気持ちをしっかり持とうと心掛けている」傾向も、他項目に比べて強く相関する (r=.161)。

一方、「日本は「内向き」過ぎるところがあるので、もっと外に目を向けたほうがいい」と考えているのは、府中町 71.5%、三次市 68.1%。「子ども」がいるとやや否定的になる傾向が有意であるほか (-.099)、「学生 (アルバイト収入あり)」も現実的に就職という課題を目の前にして、「もっと外に目を向けた方がいい」という教育的な言い方について食傷気味であるためか、否定的な回答傾向が目立っている (-.107)。このほか、「事務職」では肯定的回答の比率がやや高いが (.077)、そのほかに特にこの項目と結びつきが強いプロファイルはみあたらず、「「内向き」過ぎる」日本が変わるべきであるという意識については、一般に賛同する考えの人が多いと言える。そして、相関関係が強くて有意であるのは、「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」 (r=.102)、「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ」 (r=.206) などの多様性への志向性、「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」 (r=.132)、「海外に行くなどして遠出をして、見聞を広めたい」 (r=.202) 等のモビリティへの志向性、そして、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」 (r=.173) といった自己実現志向に関わる項目である。「階層意識」や各種の満足度とは相関していない。

「日本的協調性」を重視する価値観と「日本は内向きだ」という批判的価値観とはゆるやかに対立する関係にある(r=-.086)。それぞれに相関する項目から考えると、それは社会的な意味での「保守」と「リベラル」の価値観の対立に似ている。だが、それに社会的属

### 6-5 社会問題や政治への関心

「国を愛する心をしっかり持とうと心掛けている」のは、府中町 62.2%、三次市 62.0% と回答傾向は肯定的である。重回帰分析をすると、「地縁組織の活動」への参加の度合が最も説明力があるということがわかる(.129、府中町.171)。また、「政治団体への活動」の参加の度合がこれに続く(.101、三次市.141)。グループ活動を通して、地域や政治に関わりを持っている人が「国を愛する心」を重視する傾向が強いということがわかる。職業では「販売」従事者(.097、三次市.134)、そして「他地域で就職後 U ターン」した人も肯定的傾向がある(.079、三次市.112)。その他、三次市に限って「個人年収の高さ」(.110)と「農林漁業」(.108) が有意である。

「国を愛する」というと、ナショナリズム的な意識との繋がりが考えられるが、外国人受け入れの是非などについて、特に否定的な意見が強いわけではない。「将来、日本の伝統や慣習が失われ、社会の雰囲気が悪くなる可能性」を心配する傾向と強く相関するが(r=-.151)、男性の家事分担や女性の就業継続などの問題に関して、特に伝統主義的な観点が強いわけではない。こうしたことから考えると、「国を愛する心」ということで重要なのは、共同体の一体性を重んじる感覚であると考えられる。その共同体感覚が社会的に立場の弱い人たちへの想像力に繋がっているのかどうかという点で、「日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人たちがむしろ手厚く保護されている国だと思う」との相関の強さには注意が必要である(r=.221)。

そして、「国を愛する」傾向のある人は、特に経済階層が高いわけではないが、「階層意識」は高めで(r=.112)、日本の社会・政治の現状については現状肯定的で、「日本の将来に明るい希望を持っている」と考える人も非常に多い(r=.308)。将来展望に対してもポジティブで、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしよう」(r=.235)という考えや、「自分の利益と関係なく、広く社会に役立つ行動しよう」(r=.216)と考える傾向が強い。だが、自分の現状についての評価は必ずしも高くなく、生活や仕事、地域などの満足度も高いわけではない。

「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心掛けている」と思うのは、府中町52.4%、三次市51.7%と半々に割れる。重回帰分析をすると、「中卒」(-.126)と「建設作業」(-.096、府中町で-.123)の低さが際立つ。そして、「業界団体・同業者団体・労働組合」(.124)、「趣味関係のグループの活動」(.103)、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等」(.083)への参加度が高い人がポジティブな回答傾向にある。諸活動を通して、様々な地域の人々と繋がることが、社会問題や政治への関心を高めている可能性がある。また、「女性」については、有意に低い(.094)。居住歴では、「ずっと地元」が府中町48.0%、三次市50.0%

と低めなのに対して、「他地域で就職後 U ターン」した人は府中町 52.6%、三次市 60.3% と高い (.087)。地元外の地域で働く経験が、社会問題や政治に対する関心を高めている可能性がある。そして、意識調査項目としては、やはり高めの「階層意識」との相関関係があり、日本社会・政治の現状評価については比較的肯定的である(r=.108)。ただし、生活や仕事、地域や自分の現状についてはそれほど高い評価をしているわけではない。人生観においては「チャレンジ志向」(r=.315) や「自分の利益と関係なく、広く社会に役立つ行動しよう」(r=.219) と考えている人が多い点は、「国を愛する」志向性が強い人と共通している。

「自分や家族のことが優先で、社会問題や政治について考える気にならない」のは府中町 41.3%、三次市 41.6%と半数を下回る。重回帰分析によると、「趣味関係のグループの活動」(・.108、府中町で・.200)、「業界団体・同業者団体・労働者組合」(・.104) への参加度だけが説明力を持っている。それぞれの地域活動・社会活動への参加の程度が高いと「社会問題や政治について考える」傾向が強くなる。このほか、府中町では「事務職」が「社会問題や政治について考える」ことについてポジティブな回答傾向である一方(・.132)、三次市では「仕事が主の非正規雇用」で、「考える気にならない」人が増える(.125)。「考える気にならない」人は、高めの「階層意識」の人が少なく、金銭的余裕もあまりないと答える傾向にある。そして、日本社会・政治に対する見方も総じてネガティブである。「日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人たちがむしろ手厚く保護されている国」だという考え方にも否定的である(-.105)。その一方、「人並みに安定した暮らしを手に入れるため、現実的に考えて行動しよう」と考える堅実志向が有意に高い(.113)。

一方、類似の質問だが「地域社会の問題」に限った場合はどうか。「自分や家族のことが 優先で、地域社会の問題について考える気にならない」のは、府中町 48.3%、三次市 46.6% と、社会一般の問題についてよりは関心が高まる。各種の地域活動・社会活動に積極的な 人は、この考えに否定的で、「地域社会の問題」に関心が高い傾向が強い。最も「考える気」 があるのは「地縁組織の活動」に参加している人で、特に三次市でその傾向が強い(-.105、 府中町 44.9%、三次市 33.8%)。「業界団体・同業者団体・労働組合」に参加している場合 も、特に府中町で「地域社会の問題について考える気」のある人の割合が増える(-.091、 府中町 37.5%、三次市 42.7%)。**地域社会と最も結びつきのあるのが、三次市の場合は「地** 縁組織」であるが、府中町の場合は特に若年層の「地縁組織」への関わりが弱く、会社や 商店などの「職場関係」の活動で地域社会の問題に関わるケースがむしろ多くなる。この ほか、興味深いのは、「ずっと地元」に住んでいるという居住歴に説明力があり、「地元」 である地域社会の問題に関心のない傾向が強いことである(.098)。**他地域での生活の経験** があるほうが、地域社会に対する問題意識が上がることが示唆される。「高卒」の場合も「考 える気にならない」人の割合が増える(-.083)。そして、意識調査項目との関連では、「地 域社会の問題」に関心が薄い人は「高めの階層意識」の人が少なく、「自己の現状評価」な ど、各種の満足度に関する項目についても総じてネガティブな傾向が強い(-.148)。

そして、「自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がないと 思う」という項目については、府中町52.9%、三次市51.6%と半々に割れる。意識調査項 目との関係について言うと、上記の3つの項目と同様に、社会問題や政治問題への関心が 高い人は、「階層意識」が高く、総じて現状肯定傾向が強い。異なるのは、「社会情勢を考 えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ないと思う」という項目との正の相関が見 られる点である(.122)。つまり、この項目からは、単なる無関心ではなく、社会の変化に 対する諦めの意識が加わった「政治的無力感」をうかがうことができる。重回帰分析で回 答傾向を探ると、第一に、**各種のグループ活動への参加度が低い場合、政治的無力感は高** まることがわかる。 「政治団体の活動」 (-.141)、 「業界団体・同業者団体・労働組合」 (-.101)、 「学校・保育所・幼稚園等の保護者・同窓会組織の活動」(府中町のみ-.131)への参加度が 増えると、「仕方がない」という人が少なくなる。第二に、**学歴が低い場合、政治的無力感** が強まる傾向がある。「大卒以上の学歴」では否定的な回答が多く(-.104)、三次市では「中 卒」(.113)の政治的無力感が強い。第三に、「**階層意識」が低めのプロフィールで、政治的** 無力感が強い傾向である。たとえば、「サービス」従事者(.101)や「運搬・清掃・包装」 業(.070)では、政治的無力感が強い。また、三次市では、「他地域で就職後 U ターン」し た人は政治的有効感覚が強い(-.104)。

どの項目についても、各種のグループ活動への参加が社会や政治問題に対する関心を高めている傾向が確認される。だが、その種類によって関心を強める効果は異なっている。「趣味関係のグループ活動」については、一般的に社会や政治問題についての意識を高める傾向がある。これに対して、「地縁組織の活動」については、地域や国への愛着を高める傾向があると見られる。「職場参加としての地域活動・社会活動」については、社会や政治問題についての関心を高める効果はない。

また、各項目について、社会や政治問題に対する関心が高い人については、「階層意識」が高く、自分の現状評価も高い傾向が確認できる。つまり、生活や社会の現状について満足している人のほうが関心は高く、現状を肯定できていない人のほうが無関心であるという傾向である。現状に不満であっても個人的な問題として処理されて、社会や政治問題と結びつけて考えられていない傾向があり、注意が必要である。

#### 6・6 外国人受け入れの是非

「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ」と考えるのは、府中町 43.2%、三次市 55.2%。三次市のほうが府中町よりも地域の外国人受け入れに肯定的な人の比率が多く、重回帰分析でも地域差そのものの説明力が確かめられる(.187)。また、年齢が若いほど肯定的な傾向は強い(-.151)。20 代では府中町 55.0%、三次市 62.7%が「良いこと」だと考えるのに対して、30 代は府中町 36.0%、三次市 52.7%にとどまって

いる。職業では、「製造作業・機械操作」従事者がネガティブな傾向が強い(-.079)。外国人労働者の導入が進んでいる職種であり、競合関係が意識されている可能性がある。地域別に重回帰分析をすると、府中町では、「高卒」で反対する人が多い(.142)。一方で、「建設業」(.122)「飲食店・宿泊サービス」(.113) については、人手不足が目立つ分野であるためか、賛成する人の比率が高い。「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓会の活動」の参加度の高い人たちも比較的ポジティブである(.117)。また、三次市では、「世帯年収」が高い人のほうが否定的である(-.202)。業種としては、やはり人手不足が指摘される「医療・福祉」関係で賛成する人が多い(.149)。また、「趣味関係のグループの活動」に参加度の高い人たちも賛成する比率が高い(.110)。

一方、「今後、日本国内に外国人が増加することは、総合的に見ると良いことだ」と考えるのは、府中町 45.4%、三次市 49.0%である。重回帰分析では、やはり地域差そのものに説明力がある (.097)。三次市のほうが府中町に比べ、外国人への寛容性が高いことが示唆される。また、やはり年齢が若いほうが肯定的な傾向が強い (-.102)。「管理職」に賛成が多いのは、経営上の観点から外国人受け入れにメリットがあると考えるためだろうか(.085)。そのほか、「父または母と同居」している場合、ネガティブな意見を持つ人の割合が増える(-.090)。地域活動・社会活動では、やはり「趣味関係のグループの活動」に参加度の高さに説明力がある (.077)。地域別に重回帰分析すると、府中町では「サービス」職のネガティブな傾向がきわだつ (-.143)。三次市では、「職場関係の地域活動・社会活動」に参加度の高い人たちの賛成する比率が高い一方 (.171)、「世帯年収」高めで否定的になる (-.146)。

「地域での外国人受け入れ」と「日本国内の外国人受け入れ」との間の相関は強いが、意識調査項目間の関連を見てみると、共通点と相違点とがある。共通するポイントとしては、第一に、人間関係に関する充足度の高さとの間に見られる相関である。「外国人受け入れ」に積極的な人は、「友人関係の満足度」(地域 r=.126、国内 r=.088)、「職場の人間関係の満足度」(地域 r=.133、国内 r=.119)、「配偶者・恋人等がいて、その関係に満足」(地域 r=.087、国内 r=.120)、「地域のなかにリラックスできる関係の友人が多い」(地域 r=.208、国内 r=.162)、「地域のなかに刺激的な人との出会いの機会が多い」(地域 r=.224、国内 r=.149)、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けていると思う」(地域 r=.156、国内 r=.179)、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う」(地域 r=.156、国内 r=.179)といった項目との結びつきが強い。人間関係に充足している人が、住んでいる地域においても、日本国内においても外国人受け入れに肯定的であるということが確認される。

第二に、自身の将来展望の明るさとの相関である。「自分の仕事の将来に明るい希望があると思う」(地域 r=.133、国内 r=.143)、「勤務先の将来(経営など)に明るい希望があると思う」(地域 r=.133、国内 r=.154)、「20 年後、今よりも高い収入を得ていると思う」(地域 r=.110、国内 r=.148)、「自分の将来に明るい希望があると思う」(地域 r=.100、国内 r=.147)となっており、将来展望が暗い人は外国人受け入れについても否定的な傾向が強い。

第三に、地域や日本社会の変化を求める傾向性を持つ人が、外国人受け入れに積極的であるという傾向である。「地域の開発が進むことで、安全で安心できる暮らしが失われることが心配」な人は少なく(地域  $r=\cdot.116$ 、国内  $r=\cdot.102$ )、その一方で「日本の伝統や慣習が失われ、社会の雰囲気が悪くなる可能性について心配しなくていい」という人が多い(地域 r=.121、国内 r=.239)。また、「日本は「内向き」過ぎるところがあるので、もっと外に目を向けたほうがいい」と考える傾向との相関も有意に高い(地域 r=.206、国内 r=.202)。「男性も女性と平等に家事(育児・介護を含む)を負担するべきだと思う」(地域 r=.143、国内 r=.103)についての比率が高いことも合わせて考えると、比較的にリベラルな政治的立場との結びつきが考えられる。第四に、「自己実現志向」の高い傾向も明確で、「無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしたい」人や(地域 r=.161、国内 r=.151)、「人とは異なる自分の個性を磨く」ことを重視している人が多い(地域 r=.211、r=.157)。

一方、「地域における外国人受け入れ」と「国内における外国人受け入れ」とでは、回答傾向が異なる意識調査項目もある。第一に、「国内」については「階層意識」が高い傾向が見られ(r=.103)、「生活満足度」も高く(r=.103)、「日本社会・政治の現状」(r=.085)や「日本社会の将来展望」(r=.114)についても肯定的な立場の人が相対的に多い。これに対して、「地域」については、特にそのような傾向はない。つまり、「階層意識」が高く、現状肯定的な傾向がある人は「日本国内における外国人が増加すること」も一般論として受け入れるべきだと考える傾向があるが、今住んでいる地域における受け入れとなると話は別だということである。第二に、「地域」における受け入れに関して、「田舎志向」との関連が有意であることに注目できる(r=.085)。「田舎志向」の人のほうが内向きで閉鎖的な地域コミュニティに閉じこもっているというイメージは当たらず、むしろ地域コミュニティに対する関心が高いために、その活性化に寄与する可能性として、外国人を受け入れるべきだとする傾向が高い。そうしたこともあって、「田舎」の三次市のほうが府中町に比べ、外国人受け入れに賛成する人が多いのだと考えられる。これに関し、著しい人口減少に直面し、その解決のために外来人口を受け入れたほうがいいという考え方が強い、という三次市の地域事情との関係も考えられる。

# 第七章 自分の人生に対する評価

# 7・1 自分の現状についての評価

「自分の現状についての評価」について、「総合評価」「達成感」「自己効力感」「幸福度」 「将来展望」に関わるそれぞれ五つの項目から探ってみた。

まず、「総合的に見て、自分の現状に満足している」のは府中町62.1%、三次市59.0%。 **「自分の現状に満足」しているのは多数派であると言える**。ただし、様々な社会的属性の 違いに沿って、その格差は大きい。重回帰分析で重要な変数とみなされるのは、第一に「父 または母との同居」(・.199。ちなみにこの変数を除いて分析すると「配偶者の有無」が最も 重要になる)である。父または母と「別居」している人は府中町 67.3%、三次市 66.6%と 「自分の現状に満足」している人が多い。これに対して、**父または母と「同居」している** 人は府中町 48.2%、三次市 44.2%と過半数が「自分の現状に満足」していない。これに関 して、「親の援助が全くなくても、今の自分の生活が成り立つ」と考えていない人は、「現 状評価」が低いという傾向も確認される (r=.216)。また、第二に、「職場関係の地域活動・ 社会活動」への参加度も重要である(.186)。これは、仕事満足度に関係する変数で、**仕事** の満足度が自分の現状についての評価に繋がっていることとおおいに関係していると考え られる(r=.487)。第三に、「世帯年収」(.170)。「世帯年収 400 万円未満」では、府中町 50.0%、 三次市 50.6%と低い。第四に性別によって異なる「就労時間」の効果で、**「仕事が主」の女** 性はそうでない女性よりも自分の現状評価が低いが、男性の場合はその逆となる。雇用形 態では、「会社経営者・役員」の自己評価が高いのに対して(.094)、「(仕事も家事もしてい ない)無業者」の自己評価が低い(-.078)。第五に、業種では、「建設作業」の自己評価が 低い (-.089)。第六に低学歴層で自己評価が低い傾向があり、「専門学校卒」(-.106) や「高 卒」のネガティブさが目立つ(-.080)。

次に「今までの人生を振り返って、達成感がある」のは府中町 44.9%、三次市 41.9%と 半数を下回る。最も説明力のある要因は「個人年収」(.194)。職種では「建設作業」(-.108)、「サービス」(-.080)のネガティブな傾向が目立つ。また、「大卒または大学院卒」という 学歴がある者に限れば、府中町 48.6%、三次市 55.1%と三次市のほうが達成感は高くなる (.133)。三次市のほうが「大卒」者が少なく、その学歴の効用が大きいとも言える。「配偶者」がいる者は「ライフステージ上の達成感」を得られるためか、値は高くなる (.085)。その他、男性のほうが人生における達成についてのプレッシャーが大きいためか、達成感は相対的に低い (.114)。一方、女性について言うと、府中町の場合は「仕事以外が主」の ほうが達成感のほうが高いが (51.2%>45.2%)、三次市のほうは「仕事が主」のほうが高い (45.4%<50.0%)。ここでも、三次市の女性のほうが仕事を継続することで、達成感を

**得る傾向が強いことが示唆される**。このほか、「職場参加の地域活動・社会活動」(.145) 及び「趣味関係のグループの活動」(.130) への参加の程度に説明力がある。こうしたグル ープ活動への参加によって周囲から承認を得られる機会があり、それが達成感につながる と考えられる。

「自分は人の役に立っていると思う」という項目で「自己効力感」の強さを探ってみたところ、府中町 46.7%、三次市 47.6%とそれほど高くはない。「達成感」に関する質問と回答傾向が似ており、最も説明力があるのは「個人年収」(.222)。「職場参加の地域活動・社会活動」(.164)、そして、「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓会の活動」(.124)、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等」(.118)への参加の程度にも説明力がある。また、業種では「医療・福祉」ではわりと高いが(.083)、「製造業」は比較的低い(-.081)。

「自分は幸せだと思う」のは、府中町 80.9%、三次市 81.5%と大多数を占める。最も強い説明力がある変数は、「配偶者の有無」(.259)。「配偶者なし」では、府中町 65.9%、三次市 70.2%にまで下がる。「年齢」の説明力もあるが (-.122)、「配偶者の有無」によって違う効果が出ている。「配偶者なし」の場合は府中町の女性で下落幅が大きく、20 代で 73.0%なのが 30 代で 50.0%に落ちる。その一方、「配偶者あり」の場合は男女とも年齢による影響はない。また、「職場参加の地域活動・社会活動」(.149) や「趣味関係のグループの活動」(.079) に参加度が高い人の幸福度も高い。一方、学歴が低め(「専門学校卒」-.107、「高卒」-.101)で比較的ネガティブであるほか、職種で「建設作業」(-.093)、「サービス」(-.093)、業種で「製造業」(-.132) は幸福度が下がる。「家事も通学もしていない無業者」についてもネガティブである (-.077)。

また、「自分の将来に明るい希望を持っている」のは、府中町 55.9%、三次市 53.1%。 過半数を少し超える程度であるが、必ずしも高い値とは言えない。そして、この項目は、前述の「幸福」に関する項目と回答傾向がとても似通っている。重回帰分析をすると、収入や雇用形態や職業に関する諸変数には、「家事も通学もしていない無業者」(-.075) にネガティブな傾向が目立っているほかは説明力がなく、最も重要なのは「配偶者の有無」であることがわかる(.246)。配偶者がいない場合、府中町 44.4%、三次市 41.0%と過半数を下回るのが、配偶者がある場合は府中町 62.1%、三次市 60.5%にまで上がる。この傾向に男女差はない。また、年齢は若いほうが肯定的で、20代では府中町 61.6%、三次市 54.1%なのに対して、30代は府中町 52.6%、三次市 52.9%と否定的な回答傾向が強まる(.178)。学歴も説明力があり、「高卒」(-.143)「専門学校」(-.114)で否定的な傾向が強まる。その一方、「趣味関係のグループ活動」(.100)や「職場参加としての地域活動・社会活動」(.082)への参加の度合が強いと、ポジティブな回答傾向が強まる。

上記のいずれの項目についても「階層意識」の高さと相関があり、これらの項目でポジティブな回答をしている人は、他の各種満足度に関する項目でも現状肯定的である傾向がある。ただし、「世帯年収」や「個人年収」等の経済要因を示す変数との結びつきは、項目によって異なる。「自分の現状評価」は「世帯年収」が説明力を持ち、肯定的な回答のほう

が多数派である。一方、「人生の達成感」と「自己効力感」に関しては「個人年収」が説明力を持ち、多くの人が満足な個人年収を得られていない現状のなかでは、全体としては否定的な回答比率が高くなる。それらに対して、「幸福感」や「自分の将来展望の明るさ」は「個人年収」にも「世帯年収」にも有意な説明力がなく、「配偶者の有無」をはじめとする非経済的要因によって左右されるところが大きいと見られる。

# 7・2 交友関係についての現状評価

交友関係を評価するさいに、自分と近い仲間との「同質的結合」と、自分と異なる世界の人たちとの「異質的結合」とを区別して考えるべく、本調査でも別々に項目を立てて、 その現状評価を尋ねてみた。

まず「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けていると思う」のは、 府中町 59.8%、三次市 57.1%。地域間に有意差があり、三次市のほうが低い (-.085)。最 も説明力があるのは「趣味関係のグループの活動」への参加である (.220)。「職場関係の地 域活動・社会活動」への参加度もポジティブに作用する (.144)。一方、職業では「製造作 業・機械操作」従事者は突出して否定的傾向が強い (-.175)。若いほうがポジティブで、20 代は府中町 72.2%、三次市 69.8%と高いが、30 代になると府中町 52.2%、三次市 56.2% と下がる (-.107)。また、雇用形態では「家事も通学もしていない無業者」の交友関係が乏 しいようで、有意に低い(-.087)。

一方、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う」のは、府中町 35.7%、三次市 32.3%。「近い仲間たち」との交流に比べると、その比率はかなり低い。この項目についても地域間に有意差があり、三次市のほうが少ない(-.081)。重回帰分析では、「趣味関係のグループの活動」への参加の有意性が最も大きい(.213)。これに次ぐのが「ボランティア団体・消費者組織・NPO の活動」(.140)、そして「業界団体・同業者団体・労働組合の活動」(.129) である。このほか、「自営業主・家族従業員」はポジティブな傾向も強い(.111)。

この二項目の回答傾向の分析からは、二つのことに注目できる。第一に、グループ活動への参加度が交友関係の満足度に関与していることである。ただし、グループ活動の種類によって交友関係の質が違うことが示唆される。「職場関係の地域活動・社会活動」が同質性結合に偏る傾向があるのに対して、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」は異質性結合に偏り、「趣味関係のグループの活動」はどちらのタイプの交友関係についても関わっている。第二に、地域の交友関係について説明力があった、地元出身者/地元外出身者の差異が見られないということである。地元外出身者は、地域のなかでリラックスできる人間関係がなくても、交友関係は地域外に広がっていて、総体としての交友関係の評価が低いわけではないということが理由として考えられる。

次に、意識調査項目について相関分析をし、上記の二つの項目の回答傾向の相違点を探 ってみる。第一に、「自分と近い仲間たちとの交流」に満足感の高い人は、「余暇は家族と ともに過ごしたい」と思い(r=.110)、「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるの は当然」と考えるなど(r=.115)、**家族で共有する時間を重視する傾向**が強い。「余暇は友 人とともに過ごしたい」という傾向も強いが、これは「自分と異なる世界の人たちと出会 う機会」に恵まれている人も同様である。また、「自分の利益と関係なく、自分の身内や仲 間のためを考えて行動しようと思う」傾向も有意で(r=.176)、**家族に対する献身的な考え との親和性**もうかがえる。「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」 に恵まれている人は、 そのような傾向はない。第二に、「自分と近い仲間たちの交流」の満足度が高い人は「お互 いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想」とする傾向や (r=.127)、 「対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり方」を重視する傾向が強いが(r=.116)、 「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人にはそのような傾向がない。 特に内集団との「協調性」を重視するか否かで、二つの項目は異なっている。第三に、「自 分と近い仲間たちとの交流」に満足している人は、「転職志向」が乏しい傾向があるが (r=.135)、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人にはそのような 傾向はない。「自分と近い仲間との交流」に満足しているゆえに、転職志向が低くなるとい うことも考えられる。

このような対人関係観の違いを念頭に置きつつ、二つの項目をクロス分析してみる。そ うすると、最も多いのは「自分と近い仲間たちとの交流」にも「自分と異なる世界の人た ちと出会う機会」のいずれにも満足していないタイプ(府中町 34.9%、三次市 36.7%)で あり、双方の項目ともに満足しているタイプ (府中町 30.1%、三次市 25.9%)、「自分と近 い仲間たちとの交流」には満足しているが「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」が 乏しいと感じているタイプ(府中町 29.3%、三次市 31.1%)とを合わせて、おおむね三分 される。これは、前述の地域の交友関係について尋ねた項目と同様である。ただし、違う のは、地域の交友関係についてみられた「地元出身者」の優位性が、総合的な交友関係の 評価についてはみられないということである。それどころか、三次市については、どちら の交友関係についても満足していない人が、「地元外出身者」では29.4%であるのに対して、 「地元出身者」では 36.7%と多くなっている。「地元出身者」でも「地元外で就学後 U タ ーン」した人については%と高いが、「ずっと地元」について限ると 51.9%とさらに多くな る。地域内の交友関係については、地元在住者のほうがポジティブな傾向があるが、交友 **関係全体の評価ということになるとこの優位性は消えるということが示唆される**。地元外 出身者は、地域外に交友関係のネットワークがあるため、かりに地域のなかに友人関係が なくても、友人関係に対する満足度がそれによって低くなるということはないのである。 とくに三次市のばあい、「ずっと地元」に住んでいる人は、地域にリラックスできる友人は **多くても、総合的な交友関係の評価が低く、その傾向はかなり明瞭**である。

### 7.3 堅実志向

「今後の人生では、人並みに安定した暮らしを手に入れるため、現実的に考えて行動しようと思っている」のは府中町 82.6%、三次市 84.2%。大半がこの考え方に同意している。最も説明力があるのは年齢で、20代(府中町 86.1%、三次市 86.0%)のほうが、30代(府中町 80.9%、三次市 83.9%)より肯定的な度合が強い( $\cdot$ .120)。加齢要因からするならば、年齢が高いほうが「安定」を求めて「現実的」になることが想定されそうだが、逆の調査結果が出ている。そのことは、年代による違いがコーホート要因によるところが大きく、若い世代に「人並みに安定した暮らし」や「現実的に考えて行動」する志向性が強まっている可能性を示唆する。このほか、配偶者がいる場合は、この考え方に同意する傾向はさらに強まる( $\cdot$ .086)。また、「高卒」( $\cdot$ .102)や「自営業主・家族従業員」は否定的な傾向が強い( $\cdot$ .097)。他の意識調査項目との関係では「将来の生活のことを計画的に考えて、お金をなるべく使いたくないと思っている」との相関が強く、特に経済的な堅実さを意味していると考えられる( $\cdot$ =.124)。

一方、「今後の人生では、平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れることが大事だと思っている」のは府中町 85.3%、三次市 87.6%。やはり圧倒的多数がこの考え方を支持している。「個人年収」による差異に説明力があるが、詳しく見ると「無業者」(専業主婦、学生等)と「有業者」との間の違いが大きい。無業者の場合は、府中町 89.8%、三次市 95.8%と比率はさらに高くなる(.235)。したがって、女性の場合、専業主婦は「人並みの幸せ」を重視する傾向がとりわけ強いが、職業のある女性についてはそうした傾向は若干弱まる。例えば、女性の割合が多い「飲食店宿泊サービス業」(-.121)や「生活関連サービス業」(-.120)では、むしろ比較的ネガティブな傾向がある。また、男性に多い職業でも、「建設作業」(-.105)はネガティブな傾向が増える。「サービス」や「建設作業」は、金銭的余裕や時間的余裕がなく、生活に対する現状評価が突出して低い職種である。このほか、男性に限ると、「中卒」「高卒」で否定的な傾向が強まる。

「堅実志向」を示すこれらの項目については、他の項目と比べても圧倒的に多数の人が 肯定している。「階層意識」や金銭的余裕とは相関しない。「人並み」や「平凡」という言 葉は、人生目標としてはネガティブワードにもなり得るが、大半の人はそのように受け止 めていない。階層格差とは関係なく、時代状況が「人並み」「平凡」を求めているのだと言 える。

それでは、多数の支持を集めている「堅実志向」の考え方は、政治的な意味での「保守」につながり得るのであろうか。相関分析をすると、「人並みに安定した暮らし」を志向している人は、「総合的に見て、日本国内に外国人が増加するのは良いことだと思う」人は少ない傾向にある(-.098)。外国人の増加を社会経済的に不安視する考えは、堅実志向とゆるやかに結びついていることがうかがえる。ただし、「堅実志向」を示す二項目とも「日本社会・

政治の現状満足度」とは相関していない。「日本の社会環境」についても、特に高い評価をしているわけではない。各種の満足度との関係についても、例えば「幸福度」「将来の希望」といった項目では、現状肯定傾向があるわけではない。「階層意識」の高さと結びついた、いわゆる「コンサマトリー志向」とは回答傾向が異なるのである。顕著であるのは「自分や家族のことが優先で、社会問題や政治について考える気にならない」とか、「自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がないと思う」傾向の強さである(「人並みに安定した暮らし」との相関は、それぞれ r=.113、r=.098)。その一方「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている」傾向が弱いわけではないので、社会や政治に無関心というわけではない。こうした結果からは、「堅実志向」の考え方を支持する人は社会や政治に様々な不満はあるけれども、目の前にある自分や家族の生活課題に向き合う「現実性」を優先するゆえに、それを言い控える傾向があるということが明らかになる。

### 7.4 自己実現志向

「堅実志向」は多数派を占める。だが、それによって若い世代の人生観が全て説明できるわけではないだろう。「人並み」であることに飽き足らず、他者と異なる生き方をしたいと考えている人はどの程度いるのだろうか。

人生観に関する項目の回答傾向を分析すると、「今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」「今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を追求することが大事だと思っている」「今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くことが大事だと思っている」の三つの質問は、回答傾向に共通性がある。この三項目で信頼性分析をするとクロンバックのα係数は.615 と比較的高い。そこで、この三項目のことを「自己実現志向」と呼んで議論をしたい。

まず、「今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」のは、府中町 41.7%、三次市 38.4%と半数を下回る。両自治体の地域差に説明力があり、三次市の方が「チャレンジ志向」を持つ人の割合が少ない(-.102)。ただし、年齢差は大きく、20 代では府中町 49.0%、三次市 51.0%と約半数を占めるのが、30 代では府中町 37.3%、三次市 31.5%とかなり減少することがわかる(-.149)。また、性別による違いも大きく、男性は府中町 52.7%、三次市 46.3%と半数前後であるのに対して、女性は府中町 35.3%、三次市 33.0%とかなり低くなる。男性のチャレンジ志向が強いことがわかる(-.140)。このほか、「職場参加の地域活動・社会活動」(.109)、「業界団体・同業者団体・労働組合」(.093)、「趣味関係のグループ」の活動(.086)といった各種のグループ活動への参加度にも説明力がある。そして、意識調査項目としては、「階層意識」と正の相関がありながら、生活満足度や地域満足度とは相関しないが、その他の各種の満足度の項目にお

いて、現状肯定的な傾向が見られる。特に現在の仕事については全般的に評価が高く、「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている」傾向も強い(r=.282)。日本社会・政治の現状についても、比較的に評価が高い(r=.091)。

次に「今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を追求することが大事だと思っ ている」のは、府中町 43.9%、三次市 49.6%。最も説明力のあるのは性別である。男性が 府中町 53.3%、三次市 58.0%と過半数が肯定的であるのに対して、女性は府中町 38.3%、 三次市 43.8%と否定的な回答のほうが多数派になる。組織に所属していることの多い男性 のほうが、女性よりも「組織に縛られない自由な考え方」を大事だと思っているという状 **況が示唆される** (.146)。組織に縛られている当事者であれば、かえって、組織からの自由 を求める傾向があるというふうにも言えるだろう。また、年齢は若いほうが肯定的な傾向 が強く、20 代では府中町 50.7%、三次市 58.6%だが、30 代では府中町 39.8%、三次市 44.0% に下がる(-.138)。ただし、若いといっても「学生(アルバイト収入あり)」(-.116) は突 出してネガティブである。学生は他の20代と比べて、比較的に組織に従順な考え方をする **傾向があるようだ**。おそらく就職という課題が念頭にあり、昨今の厳しい雇用情勢が他の 属性よりもより強く意識されているからではないかと考えられる。女性のなかでは、「専業 主婦」が比較的に肯定的な傾向があるが(.105、府中町 40.5%、三次市 47.5%)、「家事が 主の非正規雇用」の人はとても低い(府中町 32.2%、三次市 36.1%)。このほか、「ボラン ティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」への参加度にも説明力がある(.102)。興味深い のは、「世帯年収」は低いほうが肯定的であり(-.102)、「高卒」の肯定的な傾向も強いとい うことである(.088)。世帯年収や学歴が低いほうが、組織のなかでの自己実現よりも、「自 **由な考え方」に共感する傾向がある**ことが示唆される。そして、この項目は、「階層意識」 による違いや経済格差とは関係しない。ただ、「生活満足度」については負の相関関係にあ り (r=-.089)、転職志向が比較的強いことからすると (r=-.117)、現在の組織に不満でそこ から抜け出したいという状況にある人がポジティブな回答をする傾向にあると考えられる。

「今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くことが大事だと思っている」のは、府中町 53.1%、三次市 55.3%。上二つの項目とは違って、肯定的な回答のほうがやや多い。この項目についても、収入や「階層意識」、各種満足度は相関しない。最も説明力があるのは性別で(-.195)、男性は府中町 66.2%、三次市 60.7%であるのに対して、女性は府中町 45.5%、三次市 51.7%と半数前後にとどまる。また、年齢は 20 代(府中町 54.3%、三次市 64.9%)のほうが、30 代(府中町 52.2%、三次市 50.0%)よりも「自分の個性」を重視する傾向が強い(-.105)。また、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」への参加の度合が高ければ、個性重視志向は強まる(.148)。その一方、「学生(アルバイト収入あり)」は、むしろ個性重視傾向に対してネガティブな傾向が強い(.093)。業種では「公務員」が最も否定的である(-.075)。

以上、三つの「自己実現志向」に関する項目は、いずれも「堅実志向」に関わる項目と 比較して、全体としては肯定的な回答比率が低い。とくに低調なのは、「30代」そして「女 **性」である。**「女性」のなかでも「家事が主の非正規雇用」である者については低い。「脱組織」志向や「個性」志向について言えば、「学生」も低い。こうした社会的属性の違いによる格差が何を意味するのかについては、さらなる考察が必要である。その一方、「20代」は「30代」よりも「堅実志向」が高いにもかかわらず、「自己実現志向」は比較的高いということに注目できる。経年変化についての検討は別に必要だが、少なくともこの点において、若者が保守的であるという言い方は適切ではない。むしろ、加齢によって「自己実現」願望が低下している/させられている傾向が顕著である。

### 7・5 利他志向/ソーシャル志向

最近の日本の若者研究では、利他的な動機に基づく「ソーシャル志向」の高まりに注目する議論が多い。だが、「ソーシャル」といっても、身内や仲間うちの関係性を重視する、「同質結合的」な側面と、広く社会に開かれた「異質結合的」な側面とが考えられる。本調査ではそれぞれのソーシャル志向について、別項目で尋ねている。

まず、「今後の人生では、自分の利益と関係なく、自分の身内や仲間のためを考えて行動しようと思う」のは、府中町 59.2%、三次市 64.4%と多数派を占める。20代(府中町 63.5%、三次市 69.4%)が高く、30代(府中町 56.9%、三次市 63.3%)で低めであり、年齢が若いほうがポジティブである。また、家事時間が有意で(.077)、「家事が主」の人の場合、府中町 65.4%、三次市 70.4%と高率になる。職種では「建設作業」の低さが目立つ(-.119)。各種グループ活動の参加については、「政治団体の活動」への参加度を除けば(.090)、「自分の身内や仲間のためを考えて行動しよう」という人が特に多いわけではない。意識調査項目との関係では、「階層意識」とは相関せず、日本社会・政治の満足度も高くないが、生活満足度や仕事満足度、そして自分の現状評価については高い。

一方、「今後の人生では、自分の利益と関係なく、広く社会に役立つ行動しようと思う」という項目については、肯定的回答は半数を下回る(府中町 40.1%、三次市 41.4%)。「自分の身内や仲間のため」とは対照的に少数派となる。だが、やはり年齢による違いに説明力があり、20代(府中町 47.0%、三次市 47.1%)は半数近くになるのに対して、30代(府中町 36.1%、三次市 38.7%)が4割を切って低めになる(.086)。一方、「職場参加の地域活動・社会活動」(.135)や「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」(.095)、「宗教団体の活動」(.091)への参加度が高まると、肯定的な回答傾向は強まる。

両項目とも、「階層意識」とは相関しないが、「広く社会に役立つ行動」への志向性のある人については「金銭的余裕」や「時間的余裕」があると考える人が有意に多く、各種満足度に関する項目についても現状肯定傾向が強い。「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている」など、社会や政治に対する関心も顕著に高い(r=.219)。一方、「自分の身内や仲間」への志向性の高さは経済的要因とは関係しないと見られる。「自分の身内

や仲間」への志向性が強まれば、生活満足度や仕事の満足度は高くなるが、社会や政治の満足度は高くなく、関心も高いとは言えない。「地域定住意向」が強く( $\mathbf{r}=.092$ )、「平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れることが大事」と考える傾向が有意に高い( $\mathbf{r}=.115$ )という点も、「広く社会に役立つ行動」への志向性とは異なる。その一方、社会の変化に対する不安には敏感で、例えば「将来、日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる可能性」について憂慮する傾向が有意に高い( $\mathbf{r}=\cdot.108$ )。

「自分の身内や仲間」を重視する傾向は「広く社会に役立つ」ことを重視している人より多いと言えるが、二つの項目をクロスさせてみると、第一に両項目ともネガティブな人(府中町 34.6%、三次市 31.2%)、第二に両項目ともポジティブな人(府中町 35.5%、三次市 37.1%)、第三に「自分の身内や仲間のため」はポジティブだが「広く社会に役立つ」のはネガティブな人(府中町 24.8%、三次市 26.5%)とおおむね三分される。両方ともネガティブな人は「30代」に多く、両方ともポジティブな人は「20代」に多い。そして、「自分の身内や仲間のため」はポジティブだが「広く社会に役立つ」のはネガティブな人たちは家事時間の長い「主婦」に多い。

「自分の身内や仲間のため」にしろ、「広く社会に役立つ」ためにしろ、20 代のほうが30代より「自分の利益と関係なく」行動することが大事と考える傾向が強い。だが、これが世代的特徴であるのか、あるいは加齢にともなって減退していくのかは、今後検証していく必要がある。

# 第八章 総括

# 8・1 地方暮らしは決して楽ではない

本調査を通して、「広島の 20-30 代」について、いかなる全体像を描けるだろうか。 まず気になるのは、「地方の若者」は「都会の若者」とどのように異なっているのかとい う点であろう。これに関しては、全国調査や大都市の若者調査との詳細な比較検討を踏ま える必要があるが、まず確実に言えることは「地方暮らしは決して楽ではない」というこ とである。

何よりも、社会経済的な不安が総じて大きい。約三分の二は「金銭的余裕がない生活を送っている」と考え、過半数が「給料・報酬に満足」しておらず、「今後、自分の生活が厳しくなる可能性について心配」である人は8割前後もいる。雇用についても、「自分の仕事の将来に希望を持てるという人」は3割台にとどまり、今住んでいる地域の雇用状況についての見方として「20-30 代の若者や子育て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある」と考える人もほとんどいない(府中町では2割台、三次市では一桁台)。景気のいい業種はほとんどなく、「今後の勤務先の将来(経営など)に明るい希望を持てる」という人は3割前後に過ぎない。

収入がそれほど多くなくても、大都市のような競争が乏しく、のんびりとしたライフスタイルを楽しめるのが地方の魅力であるという見方がある。現実はどうか。たしかに、全体的傾向としては長時間労働よりも、余暇を優先したいと考えを持っている人が7割程度と多い。だが、その一方で、府中町・三次市ともに男性の2割以上が週60時間以上働いており、全国平均と比べても長い。人手不足を長時間労働でカバーしている職場も多く、「地方は大都市より仕事が楽」というのは全くの幻想である。三次市のような農山村での暮らしに憧れる人もいるかもしれないが、家族や友人と過ごす時間が「満足にとれている」という人は、都市部の府中町よりも有意に少ない。少なくとも若い世代の暮らしぶりを見る限りは、「のんびりとした田舎暮らし」のイメージは幻想といっていい。

それでは、「女性が子育てしながらキャリアを継続するなら、地方のほうがいい」という考えについてはどうだろうか。この点で注目すべきは、**府中町よりも三次市のほうが、女性の仕事満足度が高いという**ことである。女性正社員のうち、配偶者・子どもがいる比率も比較的高い。府中町は「専業主婦」比率が高いのに対し、三次市は出産・育児を経ても就業を継続する傾向が比較的強い。その背景として、三次市のほうが親ないし配偶者の親と同居・近居している比率が高く(約8割、府中町は6割)、そのサポートを受けやすい状況にあることが考えられる。男性の価値観も、田舎だからといって伝統的な性的役割分業観がとくに強く残っているわけではまったくなく、都市部にある府中町と全く変わらず、大多数は女性が結婚・出産後も就業を継続するべきだと考えている。したがって、「地元に近いところに住んでいるほうが子育てしやすい」という考えには一面の理がある。

ただし、調査結果を見ると、結婚しても親からの援助を必要とし、そうでなくては「今の自分の生活は成り立たない」と考えている「パラサイト・カップル」も少なくない。三次市では30代になっても約半数が「自分の生活は、親から完全に自立」できていないと考えている。就業と子育ての両立が、自分の親への依存によって何とか成り立っている人が多いとみられる。そうだとすると、親が遠くに住んでいて、そのサポートを期待できない者については「地方のほうが子育てしやすい」と言えるだろうか。府中町における女性の仕事の満足度の低さも気になるところである。「人口のブラックホール」と言われる首都圏においても地元率が上昇傾向にあるなか、府中町のような地方の中枢拠点都市圏では、大都市と比べて女性が仕事と子育てを両立するうえでのメリットがあると特に言えるだろうか。少子化対策のため、国策として地方圏への人口還流政策が議論されている昨今、この点について、さらに検討が必要である。

## 8・2 地域満足度の意味するもの

今回の調査の特色は、全国データや大都市との違いを意識するだけではなく、地方の内部格差にも焦点を当てるべく、府中町と三次市の二か所で調査を行った点にある。府中町と三次市の地域特性は、それぞれ全国にある地方の「拠点都市」とその周辺部において典型的なものである。この比較からは、何が見えてきただろうか。

最も目立ったのは、地域の現状評価に関する回答傾向の違いである。多くの項目において、圧倒的に府中町が三次市よりも現状評価が高い。例えば、地域の総合的評価について、府中町は9割近くが満足であるのに、三次市は6割にも満たない。他の満足度に関する項目と同様に「階層意識」とは相関するが、個人や世帯の収入とは全く関係がない。府中町と三次市との間の現状評価の大きな違いは、ほとんど地域間の消費環境格差によって説明される。周辺の農山村も含めて、巨大ショッピングモールを核とするような地方都市の消費秩序のインパクトは大きく、そこへのアクセスが地域の満足度を決定する最大の要因となっていると言っても過言ではない。「若者や子育て世代にとって暮らしやすい生活環境である」と考える人も、府中町が8割近いのに対して、三次市は3割程度と非常に大きな落差がある。「地域の外に行く機会がなければ退屈である」と考える人についても、府中町の5割台であるのに対して、三次市は8割台と圧倒的に多い。そして、今後の定住を希望する人の割合も、府中町が7割台なのに対して三次市は5割台とかなり少ない。

そして、府中町のほうが三次市より地域満足度が高いからといって、若者は単に都市度の高い場所を求めているわけではない。一生暮らす場所として「東京のような大都市」を「いいと思う」人の割合は府中町でも三次市でも1割台と非常に低い。住む場所として大都市を羨ましいと思っている者はほとんどおらず、それどころか大都市を忌避する者が大半である。その一方、一生暮らす場所として「広島のような地方都市」が望ましいと考えている人は府中町では圧倒的多数の8割台を占める。中国山地にある三次市においても「地

方都市志向」は強く、「田舎志向」と拮抗する6割台を占める。そのいっぽう、「田舎のほうが地方都市より良い」と考える明確な「田舎志向」は3割にも満たないのである。**阿部真大は「地方都市はほどほどパラダイス」と評したが、この価値観は平日生活圏にショッピングモールが無いような周辺地域にまで及んでいる**ことが確認される。

また、三次市では地域満足度の低さと関連し、地域社会の変化を積極的に求める人の割合が多い。「現在住んでいる地域の開発が進むことで、安全で安心できる暮らしが失われることが心配だ」と考える人は府中町より有意に少ないし、「現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」人も多い。田舎だからといって、伝統を保守する意識が強いという傾向は全くないのである。「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ」と考える人が府中町より有意に多いことも、地域社会の変化を求める考えの強さをうかがわせる。一見するとそれは、外国人への寛容性の高さを示すリベラルな価値観の強さであるかのようだが、むしろ、人口減少で地域が衰退することへの危機感が強く出た結果と解釈するのが自然であると考えられる。

そして、地域そのものの現状評価について、このように府中町と三次市の間には大きな格差があるのだが、注目すべき点は、それが総合的な「生活満足度」や「幸福度」の格差には繋がっていないという点である。生活や仕事、人生などの各種の満足度評価において、府中町と三次市のあいだに有意差はほとんどない(前述のとおり、女性については三次市のほうが仕事満足度は高い)。

なぜそうなるかというと、三次市の若者の生活圏が、三次市という狭い地域に限られるものではないからだ。地元外の生活のある者の多くは、親しい友人が地域外にいる。三次市の20代はその7割以上が月に数回以上の頻度で、市外の大型商業施設・大型小売店に出かけていると回答しており、その向かう先は、ほとんどの場合は1時間半ほど離れた広島都市圏である。つまり、そのモビリティの大きさが地域満足度の低さを埋め合わせているのである。たとえば、三次市で、全く店舗のない空き家だらけの集落に住んでいたとしても、休日には彼女と2時間をかけて府中町のイオンモールに行って数時間を過ごし、ついでにそこから近いマツダスタジアム(広島市)に移動し、広島市内に住む大学時代の友達も呼んで広島カープの試合を一緒に観戦して帰る、というライフスタイルはごく一般的なものだと言える。狭い地域にとじこめられているという感覚はないので、地理的条件によって生活満足度や幸福度、そして自己の現状評価が下がるということは全くない。同じ地域に住んでいても、モビリティが高くて地域を越境する若者と、過疎化によって地域に閉じ込められる高齢者とでは、生活空間のリアリティが全く異なるからである。

### 8・3 ソーシャル・ネットワーク格差

府中町と三次市の回答傾向の差異としては、地域間の消費環境格差とともに、「地域活

動・社会活動への参加の程度」の違いが大きい。

各種の地域活動・社会活動への参加度を比較してみると、「学校・保育園・幼稚園」関係の活動、そして「ボランティア団体・消費者組織・NPO等」の活動がほぼ同じであるのをのぞけば、**総じて三次市のほうが府中町よりも参加度が高い**。参加の担い手は、府中町では地域活動・社会活動に参加する主力は主婦であるのに対して、三次市では有業者の男性である。三次市では、有業者の男性が地域活動・社会活動を通して人との繋がりを求めるニーズが大きく、それが両自治体の諸活動の参加度の格差となって現れている。「今後、地域活動に積極的に参加したい」と考える人の比率も三次市は4割台であるのに対して、府中町は3割台にとどまり、その差は有意である。

「趣味関係のグループの活動」「職場参加としての地域活動・社会活動」、「学校・保育園・幼稚園の保護者・同窓会関係の活動」そして「地縁組織の活動」への参加度の高さは、地域の満足度や地域の交友関係の現状評価に対し、いずれも説明力を持っている。各種の地域活動・社会活動への参加度が高ければ、地域に対する評価は上がる。特に三次市ではそのような傾向がある。地域活動・社会活動への参加が深まれば、職場と家族以外のソーシャル・ネットワークが広まる。地域の人間関係が豊かであれば、一般的信頼が高まり、社会的機会も広がるため、現状評価に関わる回答がポジティブになるというわけである。

ただし、こうした諸活動への参加度が高ければ、生活や社会などの各種の満足度についても同様に現状評価傾向が強いということは必ずしも言えない。「地縁組織の活動」や「学校・保育園・幼稚園」関係の活動は、参加度が高くても地域以外の現状評価が高くなるわけではない。「地縁組織の活動」の参加度の高さは、特に三次市で「田舎志向」の強さに対して説明力があり、他の活動との関わりとは違う価値観の傾向を示している。例えば、地縁組織の活動への参加度が高ければ、「現在住んでいる地域の外に出かけなくても、退屈だと感じない」や「現在の地域に住み続けたい」と考える傾向が強まる。また、「国を愛する心をしっかり持とうと思っている」人や「日本政府を信頼している」人の強さにおいて際立っているという点から、「地縁組織の活動」と保守政治との結びつきの強さが示唆される。だが、その関心は地域社会の問題には向かうが、社会問題や政治の一般的関心には必ずしも繋がっていない。

これに対して、「職場参加としての地域活動・社会活動」と「趣味関係のグループの活動」 への参加度が高い人たちの「階層意識」は比較的高く、地域だけではなく、生活満足度や 自分の現状評価についても肯定的な傾向が強い。特に友人関係についての充足感の大きさ に関わる諸項目との相関関係が強く、それが有力な原因となって、「幸福度」や「自分の将 来の希望」についてもともにポジティブな傾向が顕著である。

ただし、「職場参加」のグループ活動は同僚などの組織内コミュニケーションに与える効果が主である。その参加度の高さは、仕事の満足度を高める。その意味で、身近な人間関係の一体感を強める傾向が強い一方、そのことがかえって社会の多様性に対する認識を弱めている傾向もみられる。たとえば、「職場参加」のグループ活動への参加度の高さは、「日

本は差別があまりなく、弱い立場とされている人がむしろ手厚く保護されていると思う」 と考える傾向に対し、強い説明力を持っているのである。

これに対して、「趣味関係のグループの活動」への参加にも仲間集団を広げる効果はあるが、それだけではなく、「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することへの興味」と相関するなど、異質な人たちへの関心や付き合いを広げる効果もある。また、「趣味関係のグループの活動」への参加度の高さは、「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心掛けている」傾向の強さに対しても説明力があり、社会・政治への参画のきっかけという点でも注目できる。

このように、活動の種類によって、ソーシャル・ネットワークの広がり方は異なる。「地縁組織」の活動が「地域」に密着したものになりがちであるのに対して、「趣味関係のグループの活動」や「職場関係の地域活動・社会活動」は移動の機会が多く、活動の場が地域外にも広がっている。そうした状況を踏まえるならば、「狭い地域の人間関係が充実していればそれで幸せだと思っている地元志向の若者」が増えているという見方は適切ではない。地元の人間関係を大切にする若者が増えているとしても、地縁的な関係に飽き足らず、地域外にもソーシャル・ネットワークが広がり、視野を広げている者のほうが各種の満足度は高いという傾向があるためである。

### 8-4 居住歴の多様化/流動化する地域社会

地域に対する現状評価や価値観の相違につながる要因として見逃せないのが、居住歴の 差異である。居住歴の差異は、前節で述べたようなソーシャル・ネットワークの広がりの 違いとも関係が深い。

まず、「地元出身者」と「地元外出身者」の違いがある。「地元出身者」は地域に定住する意識が強いが、「地元外出身者」は相対的に弱く、三次市では「地元外出身者」のうち半数は、可能ならば将来は転出したいと考えている。この違いが地域への関わり合いに与える意味は大きいと考えられる。また、「地元出身者」は現在住んでいる地域での人間関係に充足していて、「リラックスして付き合える関係の友人」だけではなく、府中町では「刺激的な人との出会いの機会」も多いと思っている人が多い。これに対して、「地元外出身者」は地域の中の人間関係について物足りないと思う傾向があり、「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」という人が多くなる。

次に、「ずっと地元」にいる人と、「今住んでいる地域外の生活経験がある人」との違い も大きい。府中町では、「ずっと地元」の者は「他地域に買い物や遊びに行く必要がない」 と感じている者が多いが、他地域での生活を経験した U ターン者や転入者については、否 定的な回答が多数を占める。また、三次市において、広島都市圏などの地域外に交友関係 が広がっている「大卒」者(ほぼ全てが「U ターン」もしくは「転入者」)は、「高卒」の 者よりも「交通の不便さ」について不満に思う傾向が強い。そして、「ずっと地元」に住んでいる人は生活満足度が低く、社会・政治に突出して無関心であるのに対して、「他地域で就学後 U ターン」した層はむしろ関心が高い。地域外での生活経験が社会・政治への参画に対する意識の違いを生んでいると考えられる。

そのようななか、三次市に多い「他地域で就学後 U ターン」した層は、その地域活動・社会活動への積極性が際立ち、「趣味関係のグループ活動」にも「地縁組織の活動」にも関わりが最も強い社会的属性として注目できる。大半が高卒の「ずっと地元」層とは違い、大卒比率が高く、人間関係は地域外に広がっており、「友人と過ごす時間」の充足度においても際立っている。「他地域で就学後 U ターン」した層は、転入層と同じく外部の視点を持ち、なおかつ同級生関係などの地元の人間関係をリソースに使うことができるという点でソーシャル・ネットワークに恵まれ、地域活動のハブになっていると見られる。三次市では「他地域で就職後 U ターン」した層を含め、U ターン層が4割を占めるのに対して、府中町では1割台しかおらず、この差が両自治体の間の地域活動・社会活動の参加度の違いにも関係している。

流動化する地域社会は、若い世代における居住歴の多様化をもたらした。調査結果では今生活する地域が「地元」だと認識する者は、府中町4割台、三次市でも約半数にとどまる(ただし、1時間以内の場所に親が居住している割合は、府中町6割台、三次市約7割とこれより多いが、主観的な「地元」概念は実家居住か、隣居を意味する傾向が強い)。そして、「ずっと地元」に住んでいるという者については府中町では2割台、三次市では1割台とさらに少ない。現在住んでいる地域外で生活した経験のある者のほうが圧倒的に多い。かつて社会学者の阿部真大は、筆者との共同調査研究で、地方暮らしの若者たちが地元に「こもりつつ開かれる」ことを志向する「ポスト地元の時代」の兆しについて議論したが(『地方にこもる若者たち』朝日新書、2013年)、こうした多様な居住歴からなる社会構成を考えれば、むしろ地元だけの閉鎖的な人間関係に閉じることがかえって難しいのが「地方暮らし」の現実である。

ただし、居住歴によるソーシャル・ネットワークの格差は大きいものになっていると考えられる。じっさい、三次市では、若い世代で地域活動を中心的に担っている人の多くが「地域外で就学後に U ターン」した層である。中学校や高校などの同級生ネットワークを核としつつ、地縁つながりに転入者も巻き込みつつ、地域外に広がる人間関係も生かして、魅力的な活動が多様に展開されている。地域づくりや地域おこしというと、まずはそうした地域のソーシャル・ネットワークの中心部を活性化することに焦点が当てられやすいが、その一方で、府中町の約四分の三、三次市の約三分の二の人たちはいかなる地域活動・社会活動にも積極的に参加していないという事実もある。地域社会の将来を考えるさいには、このリアリティ・ギャップを踏まえ、サイレント・マジョリティの意識を探ることが重要な意味を持つと考える。

### 8.5 社会経済的格差

府中町と三次市との間では、社会経済的な環境が大きく異なっており、それと関連して 社会的属性の傾向も違いが大きい。府中町はやや高学歴傾向があるが、産業構造や収入面 についてはおおむね全国平均に近いと言ってよい。一方、三次市は高卒を含む低学歴の人 口比率が高く、収入は全国平均より低い。そして、産業構造は「医療・福祉」が全国平均 の二倍ほどと突出して多いのが特徴的である。

興味深いのは、両自治体とのあいだに、収入や学歴など社会経済的格差に繋がるような 属性分布の違いがはっきりとあるにも関わらず、それが回答傾向の違いに直結してはいな いという点である。府中町と三次市との地域差そのものが説明力を持つのは、先にも触れ たように地域に対する評価くらいで、生活や人生についての意識、仕事に対する意識、そ して日本社会・政治に対する意識については、地域差自体が説明力を持つ項目は少ない。t 検定で両地域の平均値に差があるとみなされた項目も、重回帰分析では地域差そのものに 説明力があるとはみなされず、両地域の社会的属性の構成比の違いによるところが大きい 場合もある。両自治体間の社会経済的格差は、両地域のあいだの生活意識や社会意識の差 異として明確なかたちで現れているわけではない。

それでは、両自治体の内部において、社会経済的格差はどのように生活意識や社会意識に現れているのだろうか。その文脈でまず注目すべきなのは、収入が低い「非正規雇用」(「仕事が主」または「家事が主」)あるいは「サービス」職の生活満足度の低さである。これらは、近年「アンダークラス」や「ワーキングプア」として問題化されてきたプロフィールと重なる。世帯年収 400 万円未満、個人年収 200 万円未満の場合、各種の満足度の低さが際立つ。そのなかでも、女性に多い「家事が主の非正規雇用」では、半数程度がその生活水準は「低いほうだ」と答えている。収入の低さがダイレクトに響くという点で、とくに仕事の将来展望が暗い。そして、「家事が主の非正規雇用」の「サービス」職従事者については、日本社会・政治に対する評価がおしなべて低い。「日本政府を信頼しない」傾向がとりわけ強いほか、原発や戦争などのリスクについての不安も突出して強いのだが、「自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がない」と政治的無力感も大きい。全体では過半数が支持している「日本は、こつこつと努力すれば成功する可能性がある国だと思う」という見方についても、否定的な見方が多数派だ。

一般的に言って、低収入・低学歴で「階層意識」も低い人のほうが満足度の高い暮らしをしているという逆転的な現象は存在しない。「世帯年収」が高ければ、生活満足度、そして自分自身に関わる満足度が上がるし、「個人年収」が高ければ、仕事の満足度が上がる。したがって、「地方のヤンキーは上昇志向がないぶん、現在の生活に満足している」というのも俗説に過ぎない。自称「ヤンキー」は男性の10%程度を占め、「建設作業」従事者と「中卒」の男性に多いが、「金銭的余裕がある」と考える人は有意に少なく(府中町25.0%、三

次市 26.9%)、「生活満足度」も低めなのである。

ただし、あらゆる項目について、収入や社会階層によって「満足度の高い者」と「満足度の低い者」にきれいに二分され、それが様々な価値観の分化と対応しているかというと、 必ずしもそういうわけではない。中間層を取り巻く社会経済状況は不安の度合を高めており、階層が比較的高い者であっても将来が読めない、不透明な時代状況があるからだ。

まず、家計の状況や自らの仕事を取り巻く環境、あるいは社会情勢に関する現状評価と将来展望に関する項目については、大半の人が厳しい評価をしている。やはり収入や「階層意識」と満足度に相関関係はあるのだが、多くの人が経済的不安を抱えている状況のなかでは、その影響はゆるやかである。例えば、「20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」人は全体で約3割に過ぎず、「世帯年収400万円以上」でも数ポイント上がる程度であり、「就業状態・雇用形態」による説明力はない。日本社会・政治の現状についての評価については、さらに否定的な全体傾向が強い。「日本の将来には明るい希望がある」とは思わない人は8割に近く、「階層意識」が高いと数ポイント「希望がある」と思う人が増えるものの、世帯年収の説明力もない。多くの項目について、「階層意識」と現状肯定的な傾向にゆるやかな結びつきはあるのだが、社会経済的に「満足せる者」と言えるような人たちの「顔」が具体的に見えてこないのである。強いて言えば、「公務員」だけは経済的に比較的安定しており、なおかつ多くの項目について満足度の高い傾向が強いという点が、地方的な状況だと言えるかもしれない。

若い世代が日々感じている生活不安は、必ずしも低収入層や雇用不安層に特に強いというわけではない。意識調査項目では、30 代よりも 20 代に強い「堅実志向の強さ」にその傾向が強く現れている。具体的には、「人並みに安定した暮らしを手に入れるため、現実的に考えて行動しよう」と「今後の人生では、平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れることが大事」という考え方について、府中町でも三次市でも8割を超える人たちが同意している。これらの項目については、収入の説明力もなければ、「階層意識」とも相関しない。時代情勢に照らして、まずは現実的に生活の足場を築くことが大事と考える傾向は、若い世代の多数派に共有された価値観であり、社会経済格差とは関係がない。

### 8・6 自己充足(コンサマトリー)格差

調査結果を見て、意識調査項目の相関関係を分析してみると、「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだと思う」「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は低いほうだとは思わない」という二つの項目から探った「階層意識」が、多くの現状評価項目と相関しているという点がとても顕著である。

多くの項目について、「階層意識」が高ければ、現状肯定が強くなるという傾向が見られた。「生活満足度」「仕事満足度」「地域満足度」「日本社会・政治の満足度」「自分の現状評

価」のいずれについても「階層意識」と相関し、「階層意識」が高ければ現状肯定的な傾向があることが確認される。もちろん、上記の5つの「満足度」のうち、肯定的回答が7割近くの「生活満足度」と、1割台の「日本社会・政治の満足度」では全体的傾向がかなり異なるし、重回帰分析をすると、それぞれの項目の回答傾向について説明力のある社会的属性も同じではない。だが、「階層意識」に関わる2項目と、各種の満足度に関わる5項目の相関関係は強く、満足度5変数のクロンバックの $\alpha$ 係数は.710、「階層意識」に関わる2項目を加えると.754と上がり、回答傾向が類似していることがわかる。すなわち、「階層意識が高い」人は上記のどの観点についても満足度が高く、「階層意識の低い」人たちはどの点においても満足度が低くなるという傾向については一貫しているのである。

そして、注意すべきなのは、必ずしもこの「階層意識」の格差が、前項で述べたような 社会経済的格差を意味しないという点である。たとえば、満足度に関しても、「階層意識」 との相関は強くても、「地域満足度」や「友人満足度」「親との関係の満足度」など、世帯 年収や個人年収が説明力を持たない変数もある。社会経済の展望が不透明な時代情勢のな かでは、ミドルクラスの社会経済的な不安が強まり、その期待水準も下がる。そのような 状況では、単に個人年収や世帯年収の多寡の重要性は相対的に低下し、人間関係や時間的 余裕などの生活のクオリティの充足感が「生活水準」を意味する程度が強くなる。こうし た傾向は近年の社会学的研究で「コンサマトリー化(=自己充足化、即自化)」と言われる。 ただし、誰もが「自己充足(=コンサマトリー)」になれるわけではない。社会経済的格差 とは区別し、こうした階層意識の格差について、ここでは「自己充足(=コンサマトリー)」 格差と呼ぶことにする。

収入も「階層意識」も比較的高い「公務員」や「大卒・大学院卒」とは違い、収入が高いわけでもないのに「階層意識」が高いプロファイル、あるいは、反対に、収入がとくに低いわけでもないのに「階層意識」が低いプロファイルに着目すると、以下の四つの「自己充足(コンサマトリー)」的格差がみえてくる。

第一に、「20 代」である。**20~39 歳では、年齢は若いほうが低めの「階層意識」の人の** 比率が少なく、人生をポジティブに捉えるような傾向がある。具体的には、「幸福度」や「自分の将来への希望」に関する項目では「年齢」の若さが説明力を持っている。これも経済的要因というよりは、**20 代に見られる「自己充足」的な傾向、そして友人関係の満足度が有意に高いことと関係があると見られる**。

第二に、「就労時間」の違いである。「専業主婦」や「学生」の「階層意識」は、世帯年収が低いわりには低くない。これに対して、長時間労働に従事する者は同程度の収入層と比べて、「階層意識」は低い。就労時間が長いと「時間的余裕」がなくなり、生活のクオリティが下がるからである。「心身ともに健康」ではなく、その仕事に対するモチベーションも高いわけではない。

第三に、父母から独立し、配偶者を持つというライフコース上の達成である。この点、「父母と同居」している人の世帯年収は相対的に高いが、「階層意識」は低めで、「自分の現状」

をはじめ各種の満足度は比較的に低い。ただし、「父または母と同居」している人は、個人 年収が低く、「金銭的余裕がない」と考える傾向が強い。その意味では、その満足度の低さ は「自己充足」的というよりも社会経済的問題であるとも考えることができる。

第四に、「製造作業・機械操作」従事者のネガティブさである。「製造作業・機械操作」 従事者は、特に年収が低いわけでもないが、単身暮らしや父母との同居者が多く、男職場 で出会いに乏しいということもあって、有配偶率が少ない。そのためか、職場をはじめと する人間関係に関する充足度が低く、生活や仕事についても突出して「自己充足的ではな い」プロフィールとなっている。

「自己充足的」な人たちは、社会経済的にはネガティブな状況認識をしつつも、生活や人生に対する見方については楽観的である。この状況については、社会学者の古市憲寿が「絶望の国の幸福な若者たち」と表現して話題を呼んだが、本調査においてもそうした回答傾向が確認された。具体的には、「毎日の生活が「楽しい」と感じられる」「自分は幸せだと思う」「自分の将来に明るい希望を持っている」といった項目では過半数が肯定的であり、「階層意識」とも強く相関する。だが、これらの項目に対して、説明変数として「世帯年収」や「個人年収」、そして「就業状態・雇用形態」に関わる諸変数の説明力はすべて有意ではないのである。すなわち、非経済的要因の説明力のほうが重要なのである。

たとえば、「自分の将来に明るい希望を持っている」かについて、回答傾向を分けるのは「配偶者の有無」、「年齢」(の若さ)、「学歴」(高卒、専門学校卒で低い)、そして「趣味関係のグループ活動」または「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加である。このうち、「学歴」の違いは収入の違いと関連するが、「年齢」は若いほうが低いし、「配偶者」がいても世帯収入が上がるわけではない。ポジティブに作用するのは、必ずしも収入が高い社会的属性というわけではない。

また、「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」と考える人は約4割程度で、「世帯年収」や「個人年収」に説明力はない。説明力があるのは就労時間の少なさで、就労時間が長くなると否定的な考えの人が増える。そして、就労時間の少な目の人は、その「世帯年収」や「個人年収」が高くないわりには「階層意識」が高めである。

つまり、この場合、「階層意識」の高さは、他者よりも収入があり、豊かな生活レベルに 所属していることから得られる卓越的な感覚というよりは、経済的な意味での満足水準を 切り下げ、現在の生活のクオリティで「足るを知る」感覚であると考えられる。それは富 める者の既得権益の感覚というより、ゼロ成長経済、もしくは階層固定化状況を受け入れ る現実的な意識のあり方である。こうした意識が経済格差に関係なく見られるとしたら、 それは新しいタイプのミドルクラス意識であると言える。

「自己充足」的な人たちの特徴は、自分自身について楽観的であるところだ。必ずしも 金銭的余裕があるわけではなく、経済状況についての見方もシビアだ。だが、そうした状 況はデフォルトとして認識しているため、特に悲観材料にはならないのだ。例えば、「20代」 は人生展望においても萎縮することなく、相対的に強い自己実現願望を示す。「今後の人生 では、無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」という項目について、「30代」では3分の1ほどしか肯定していないが、「20代」では半数近くがポジティブな回答をしている。また、利他的なソーシャル志向があり、「広く社会に役立つ行動をしようと思う」傾向も「30代」より強い。そして、その一方で、これらの項目は、経済格差は回答傾向を分かつ要因になっていないのである。

「20代」のほうが「生活水準が低いほう」だと思う人が少なく、楽観的であることについては、「親よりも高い水準の暮らしができると思う」人が「30代」より多いことなどを考えると、たんに社会経済的な現実性にまだ覚醒していないだけではないかという解釈も許す。ただし、先に見た堅実志向の強さなども合わせて考えると、若い世代のほうが現実的であって、階層固定化社会に適応すべく満足水準を切り下げ、積極的に「自己充足化」する傾向が強いとも言える。この論点については、さらに検討を必要とする。

いずれにせよ、「階層固定化が進む社会のなかで、若者は萎縮している」という一般化には問題がある。20~30代について言うと、若いほうが楽観的であり、それなりに「チャレンジ」「個性志向」「脱組織」といったキーワードに示されるような自己実現志向があるからである。問題化されるべきなのは、それを受け止めるべき社会のほうが萎縮しているという状況である。

# 8・7 ダウンシフターの限界―さとりきれない若者たち

「余暇の時間を大切にしたいので、仕事で長時間働きたくない」と思っている人は7割前後いる。そして、この考えについては、仕事を主にしている非正規雇用の人たちはネガティブに考える傾向があるが、収入・年齢・学歴・性別も問わず、幅広く支持を集めている。「ブラック企業」に対する批判も高まるなか、時間的にゆとりのある「減速生活」を理想と考える人は多いと見られる。一般に、多少生活水準が下がっても、労働時間を減らし、余暇や消費生活のクオリティの高い生活を志向する人を「ダウンシフター」というが、こうした志向性を持つ人にとって「地方暮らし」の魅力が語られることも多い。筆者が取材対象を紹介し、コメントを寄せた読売新聞(西日本版)の記事でも、毎月のように全国各地に転勤させられる不動産会社を辞めて、給料は半分以下になったが、山間地の地元の街に U ターンすることを望んだ岡山県新見市の若者が紹介されている(「都会より地元ラブ」2014年5月4日付)。

ただし、先にも述べたように、確実に理想と現実とのあいだには乖離があると言える。 じっさいには生活のために長時間働かなければならない事情があって、多くの人は「減速 生活」を意に反して実現できない。たとえば、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方 法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」という考えは「自己充足的 (コンサマトリー)」的な生活観と親和性があるが、支持している人は全体で2割程度しか いない。とくに時間貧乏である「就労時間の長い者」そして「子どもがいる者」の拒否感が大きい。ミドルクラスの大半は大きな経済的不安を抱えており、「足るを知るべき」とするメッセージが、決して主流の考え方になっているわけではない。将来設計において「堅実」であることと、生活レベルを落として「清貧」であることは同じではない。

また、「満足な収入が得られるのであれば、長時間労働もかまわないと思う」とか「やりがいがあれば、長時間労働でもかまわないと思う」という項目については、「階層意識」との相関はなく、自己充足(コンサマトリー)格差よりも社会経済的格差のほうが重要である。「余暇を優先したいので長時間労働をしたくない」人は、世帯年収 400 万円未満でも多数派を占めるが、なおかつ「満足な収入が得られるのであれば、長時間労働もかまわない」という考えに否定的な人となると、世帯年収 400 万円以上では全体の半数近いが(府中町46.0%、三次市46.3%)、世帯年収 400 万円未満では少ない(府中町38.6%、三次市34.7%)。

つまり、余暇重視のダウンシフターになりたいか、仕事人間(最近の言葉でいうと「バリキャリ」)でいいのかというライフスタイルの価値観の違いというよりも、長時間働いて収入を得なくては生活を支えられない人と、そこまで生活が切迫していない人との感じ方の違いが回答傾向を分けているとみられる。年収が低いばあい、その現実に合わせて満足水準を下げて「ダウンシフター」を志向するわけではなく、むしろ「長時間労働をし、無理をしてでも生活水準を保った方がいい」という考えになる傾向が強いのである。この点、教育の影響があるのか、「高卒」にそうした傾向が強い。「さとり世代」というが、多数派は現在の生活水準に甘んじておらず、社会経済的には「さとり」きれていない。ある意味「地方暮らし」の理想である「ダウンシフター」にはなりたくてもなれない人が多数派だ。

長時間労働を肯定するメンタリティとして、日本的な勤勉の倫理は根強い。だが、それはモチベーションの高さを意味するわけではない。そのことは、就労時間の長さは仕事の満足度を下げる最大の要因であり、長時間労働でも収入が増えるわけではない、という調査結果を見ても明らかである。モチベーションに関しては、職種による格差が大きく、男女ともに「今の職業は自分の「天職」であると思っている」人は4割程度しかいない。仕事満足度は他の満足度に比べると低調であるということを考えても、雇用と労働の状況を改善してモチベーションを高めることは、地方の若者にとって最も優先的な課題である。

### 8・8 終わりに/問題提起

三次市で若者調査をするにあたって、三次市在住の70代の知人の方に相談したら、開口一番こう言われた。「でも、三次に若者はいませんよ」。府中町でも不安なことを言われた。「イオンモール以外で、若者はあまり見かけませんよ。でも、イオンモールにいるのは府中町に住んでいる人とは限らないし」。

しかし、実際には 20-30 代の若者はそれぞれ1万人以上もいる。人口の約5分の1を占

めている。若者自身が、そのことに驚いていた。確かに、日中の「街」を歩いても、お年 寄りばかり。それだけ「街」では若者を見かけないし、若者が集まることもないからだ。 地域活動に積極的な若者もいるが、全体からするとごく少数だ。

そんななか、本調査では 867 ケースの質問紙を集めることができた。そして、その貴重なデータに統計的処理を行い、三次市と府中町の 20-30 代の実態、生活意識・社会意識の全体傾向とその分岐について記述してきた。

社会調査データからは様々な「格差」の問題が見えた。拠点都市と周辺部の間にある消費環境格差の問題、ソーシャル・ネットワークの格差、居住歴の格差、社会経済的格差、自己充足(コンサマトリー)格差など。さらには、地方を生きる上での様々な「困難」の問題も見えた。雇用に関わる不安、先行きの怪しい話しか聞こえてこない職場、明るい将来が見通せない人生。大都市と変わらない長時間労働。親に頼って、何とか成り立っている生活。こうしたなか、まずは格差を解消するために、満足度が低い属性の人たちの社会的ニーズを捉えていくのは大事なことだ。若者の問題は地域行政のなかでは後回しにされがちで、問題は不可視化されやすく、困難を抱えた人が孤立しがちだ。調査活動を活性化することを通して、そのニーズを公共化していく必要がある。

その一方、その経済状況や社会的地位は必ずしも安定したものではないのに、それで事 足れりとする人たちもいる。だが、**自分自身が「幸福」であり、現状に「満足」だと答え ているのであれば、それでいいのだろうか**。自治体が行う住民意識調査などであれば、そ れでいいということになるだろうが、その回答動機を考えてみると、むしろ現状に疑問を 持つほうが自然であるとも考えられるからである。

例えば、「日本は差別がなく、弱い立場とされる人々がむしろ手厚く保護されている国だと思う」という項目について、「そう思う」と回答したAさんにインタビューしたときのこと。Aさんは、その回答理由として「中国とかと違って格差は少ないし、生活保護とかも外国人にも出るんでしょ。」と述べた。確かに、とっさに尋ねられたときに、ヘイトスピーチのような露骨な差別問題や、日本の国内にもいる貧困層の問題に思いをはせるのは多くの人にとって難しいことかもしれない。しかし、差別される当事者、弱い立場とされる人々に近いところで考えている人であれば、なかなか「そう思う」とは答えにくいはずだ。例えば、この項目について、「そう思う」傾向が強いのは、職場参加のグループ活動への参加度の高い人、「世帯年収」が高い人、あるいは「国を愛する気持ちをしっかり持とうとしている」人である。差別やマイノリティなどの社会問題について感度の鈍い者と意識的である者との間に、深いリアリティ・ギャップがあるということに注意が必要である。

**筆者が必要だと考えるのは、こうした様々な生活感覚・社会感覚の分断線について、お 互いに理解を深め合う「対話の場」**を作ることである。「対話」は、さまざまな困難を抱えた「他者」のニーズを理解するきっかけを与えるが、それだけではない。それは、日常生活のなかでは「たいしたことのない」「誰もが我慢している」事柄として処理することを要求されている、自分自身の抱えている「個人的な問題」を公共化するきっかけも与える。

例えば、筆者がインタビューした、ある過疎の山村のスーパーの副店長を夫に持つ B さん(飲食店アルバイト)の事例。B さんは、インタビュー時間のかなりの部分を使って、自分自身のことよりも、いかに夫がクレイジーに仕事をしていて、自分の理解を超えるかについて語った。過疎地のスーパーは人手不足が深刻。B さんの夫以外はパートやアルバイトばかり。責任感のある B さんの夫は、毎日 16 時間ほどの仕事をへとへとになりながらこなしている。夜中の 12 時に帰ってきて、朝 4 時には出なくてはいけない日には、家に入るのは面倒くさいので、車中で一夜を過ごすこともあるという。実は、偶然にして、この副店長にも郵送で我々の質問紙が届いたのだが、書こうとすると目が泳いできちんと回答できない。一向に記入が進まない様子を見かねて、妻である B さんはやらなくていいよ、と言ったという。「人生、何が楽しいんでしょうねえ」と B さんは嘆く。専門学校を出てすぐ結婚して 10 年。夫との価値観のギャップは今となっては大きいと気づくが、自分も 3 人の子の世話で精一杯の日常生活のなかでは、お互いの考えをぶつけあうようなシーンもないという。つまり、自分が大変だと言い合うと収拾がつかなくなり、日常的な関係性に支障をきたすので、相手を慮って、たとえ夫婦間であっても「対話しない」のである。

**私たちの日常は、このようにして近しい人との間でさえ「対話」を避けている**。どこに問題があるのか、どうやったらもう少しよい関係性を築けるのかについて、それぞれの困難を共有しようとはしていない。ただ、それぞれが個人化された日常をサバイバルしている現状のなかでは、世代の共通課題を考えるなんてことはとても難しい。

この府中町と三次市の 20-30 代を対象とする調査報告書の統計分析は、その意味で、地域社会の分断線について気づくきっかけとなり、そのリアリティ・ギャップをめぐる「対話の場」を触発するたたき台として受け止めていただければと思う。質問紙調査と並行し、2014年度より筆者が府中町と三次市の数十人の 20-30 代に対して行っているインタビュー調査も、まさにそうした「対話」の糸口を探ることを狙いとしている。上に挙げた A さんと B さんの事例も、その一端である。自治体や地域活動において行われる「タウンミーティング」のような対話が地域活動に関わる一部の人たちに偏りがちであるのに対し、社会調査・世論調査の客観的データを活用した対話は、さまざまなサイレント・マジョリティやマイノリティを公共の議論に呼び込み、新しい問題認識を生み出す効果がある。その意味で、本調査に関する活動が「対話」の導火線となり、新しい時代/世代の共通課題についての議論が活性化するきっかけとなることを願っている。

# 謝辞

この質問紙調査は、府中町役場、三次市役所の方々の多大なる尽力のもとで実施が可能 となりました。また、お忙しいなか調査に協力していただいた府中町と三次市の皆様、そ の他、調査のゆくえを温かく見守っていただいた多くの方々に対しまして、深く御礼申し 上げます。

# 資 料

質問紙サンプルおよび単純集計結果

# 「府中町 20~30 代住民意識調査」

#### 2014年7月

#### ご記入にあたってのお願い

- ○この調査は、次代を担う若い世代である 20~30 代の皆さんの生活の実態、現状評価、それに 関する価値観についてお尋ねするものです。
- ○皆さんひとりひとりからいただいたデータは、統計として取り扱い、それをもとに<u>全体的傾向を知ることが目的</u>です。匿名の調査であり、封筒やアンケート用紙から<u>回答者個人を特定すること</u>は不可能です。安心してありのままの状況を正直に、できるだけ正確にお答えください。
- ○私たちは、調査結果をとりまとめ、若い世代を取り巻く地域や社会の状況の改善を目的とする、 各方面での議論に役立てたいと思っています。質問文のなかには答えたくない項目があるか もしれませんが、調査目的に理解をくださり、ご協力いただければ幸いです。
- **2014年7月31日(木)までに**返信用封筒に入れ、ご投函ください。(返信用封筒 に差出有効期間が書かれていますが、それは締め切りではありません。)
- ○調査結果は、まとまり次第、公益財団法人マツダ財団のホームページ等で紹介されます。 是非 ご覧ください。
- (1)ご記入は、あて名のご本人にご回答をお願いします。
- (2)ご記入は、鉛筆または黒・青のボールペンなどでお願いします。
- (3)お答えは、質問文の説明をお読みのうえ、番号の順に沿ってお答えください。
- (4)回答に必要な時間は約20分です。長くて申し訳ございませんが、宜しくお願いします。
- (5)ご記入が終わりましたら、回答漏れがないかどうかご確認願います。
- (6) 可能な限り、すべての質問にお答えください。正確にあてはまる選択肢がない場合でも、ご自分で最も近いと思うものをお選びください。ただし、どうしても答えたくない/答えられない質問がある場合は、飛ばして次の質問にお進みください。
- (7)なお、この調査に関する質問・ご意見等がございましたら、下記の電子メールへお問い合わせください。可能な限りすみやかに返信させていただきます。

#### 〔お問い合わせ先〕

広島若者調查事務局(担当:吉備国際大学社会科学部准教授 轡田竜蔵)

電子メール; kutuwada@mve.biglobe.ne.jp

# 「三次市 20~30 代住民意識調査」

#### 2014年7月

#### ご記入にあたってのお願い

- ○この調査は、次代を担う若い世代である 20~30 代の皆さんの生活の実態、現状評価、それに 関する価値観についてお尋ねするものです。
- ○皆さんひとりひとりからいただいたデータは、統計として取り扱い、それをもとに<u>全体的傾向を知ることが目的</u>です。匿名の調査であり、封筒やアンケート用紙から<u>回答者個人を特定すること</u>は不可能です。安心してありのままの状況を正直に、できるだけ正確にお答えください。
- ○私たちは、調査結果をとりまとめ、若い世代を取り巻く地域や社会の状況の改善を目的とする、 各方面での議論に役立てたいと思っています。質問文のなかには答えたくない項目があるか もしれませんが、調査目的に理解をくださり、ご協力いただければ幸いです。
- **2014年7月31日(木)までに**返信用封筒に入れ、ご投函ください。(返信用封筒 に差出有効期間が書かれていますが、それは締め切りではありません。)
- ○調査結果は、まとまり次第、公益財団法人マツダ財団のホームページ等で紹介されます。 是非 ご覧ください。
- (1)ご記入は、あて名のご本人にご回答をお願いします。
- (2)ご記入は、鉛筆または黒・青のボールペンなどでお願いします。
- (3)お答えは、質問文の説明をお読みのうえ、番号の順に沿ってお答えください。
- (4)回答に必要な時間は約20分です。長くて申し訳ございませんが、宜しくお願いします。
- (5)ご記入が終わりましたら、回答漏れがないかどうかご確認願います。
- (6) 可能な限り、すべての質問にお答えください。正確にあてはまる選択肢がない場合でも、ご自分で最も近いと思うものをお選びください。ただし、どうしても答えたくない/答えられない質問がある場合は、飛ばして次の質問にお進みください。
- (7)なお、この調査に関する質問・ご意見等がございましたら、下記の電子メールへお問い合わせください。可能な限りすみやかに返信させていただきます。

#### 〔お問い合わせ先〕

広島若者調查事務局(担当:吉備国際大学社会科学部准教授 轡田竜蔵)

電子メール; kutuwada@mve.biglobe.ne.jp

I 最初に、あなた自身の**現状に対する評価とその価値観**について、お伺いいたします。 I-1~10のそれぞれの考え方について、**あなたの考えに一番近い番号に○印を**付けてください。

#### I-1 生活の現状評価

	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うと言えば	そうではないと思うどちらかと言えば	思う	
A 総合的に見て、今の生活に満足している。	15.4%	·····53.0%·	24.1%	····7.5%	
B 一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほう だ。	6.5%	35.5%	····45.0%··	13.0%	
C 一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は低いほうではない。	11.5%…	····60.9%··	19.8%	7.8%	
D 自分の生活は、親から完全に自立した状態である。	23.7%·····28.2%·····23.9%·····24.				
E 親の援助が全くなくても、今の自分の生活は成り立つ と思う。	<b>29.0%·····29.3%</b> ·····20.3%·····21.5				
F 毎日の生活が「楽しい」と感じられる。	<b>20.0%······50.4%</b> ·····22.7%·····7.09				
G 金銭的余裕のある生活を送っている。	5.0%·····38.3%·····32.8%·····23.85				
H 時間的余裕のある生活を送っている。	9.5%	38.9%	32.4%	19.2%	
I 家族と過ごす時間は満足にとれている。			····26.2%… リポジティブ)		
J 友人と過ごす時間は満足にとれている。			···· <b>36.2%··</b> ブ;重回帰タ		
K 自分の自由な時間は満足にとれている。	15.7%	36.8%	31.3%	16.2%	
L 家事(育児・介護を含む)の負担に関する不満はない。	26.8%…	···41.4%···	21.8%	10.0%	
M 親との関係に満足している。	42.3%…	····43.0%··	12.2%	2.5%	
N 血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人(配偶者・恋人等)がいて、その関係に満足している。		•	····10.7%··· .7% <b>21.0</b> %		
O 友人関係に満足している。	34.3%…	····45.8%··	12.8%	7.2%	
P 現在の住居に満足している。		•	····21.6%·· ポジティブ)		
Q 心身ともに健康に過ごせている。	<b>23.6%······49.0%····</b> ··21.9%·····5.5%				
R 今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくていいと思う。	3.0%·····20.8%····· <b>35.1%·····41.0</b> %				
S 今後、(配偶者がいない場合)結婚できないのではないかとか、(既婚の場合)結婚生活を続けられないのではないかと、心配しなくていいと思う。	(三次	市よりポジラ	····21.0%··· ティブ;t検定 .1% <b>28.7</b> %	のみ)	

I 最初に、あなた自身の**現状に対する評価とその価値観**について、お伺いいたします。 I-1~10 のそれぞれの考え方について、**あなたの考えに一番近い番号に○印を**付けてください。

#### I-1 生活の現状評価

生石の死人計画	4 全くそう思う	3 どちらかと言えばそ	2 どちらかと言えばそ	1 全くそうではないと	
A 総合的に見て、今の生活に満足している。	14.1%	56.1%	21.7%	8.0%	
B 一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほう だ。	2.8%·	35.4%	46.1%	15.7%	
C 一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は低いほうではない。	9.2%······58.9%······24.3%······7.79				
D 自分の生活は、親から完全に自立した状態である。	20.9%·····23.5%·····32.6%·····23.0%				
E 親の援助が全くなくても、今の自分の生活は成り立つ と思う。	23.5%·····26.7%·····28.0%·····21.7%				
F 毎日の生活が「楽しい」と感じられる。	<b>16.3%······51.6%·····</b> 24.6%·····7.4%				
G 金銭的余裕のある生活を送っている。	4.6%·····29.8%·····41.5%·····24.19				
H 時間的余裕のある生活を送っている。	10.4%…	39.3%	30.2%	20.2%	
I 家族と過ごす時間は満足にとれている。	16.7%…		·····31.9%· こりネガティフ		
J 友人と過ごす時間は満足にとれている。			······ <b>38.4%</b> ィブ ; 重回帰		
K 自分の自由な時間は満足にとれている。	15.6%…	37.7%	27.5%	19.1%	
L 家事(育児・介護を含む)の負担に関する不満はない。	22.6%	44.3%	24.6%	8.6%	
M 親との関係に満足している。	35.0%	····49.6%	10.7%	4.8%	
N 血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人(配偶者・恋人等)がいて、その関係に満足している。				% 32.0%)	
O 友人関係に満足している。	28.8%	····48.4%	16.1%	6.8%	
P 現在の住居に満足している。	<b>23.5%43.6%</b> 24.2%8.7% (府中町よりネガティブ)				
Q 心身ともに健康に過ごせている。	20.2%·····48.4%·····24.7%·····6.7%				
R 今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくていいと思う。	3.0%	15.4%	36.9%	44.7%	
S 今後、(配偶者がいない場合)結婚できないのではないかとか、(既婚の場合)結婚生活を続けられないのではないかと、心配しなくていいと思う。	(府中	コ町よりネス	······26.2%· ブティブ ;t検 19.1% <b>35.</b> 4		

(前ページからの続き)	4 全くそう思う	3 どちらかと言えば	2 そうではないと思	1 全くそうではない	
T 20年後、子育てを経験し、自分を必要とし大切に思ってくれる人(配偶者・恋人等)と暮らしていると思う。	<b>36.7%39.4%</b> 13.8%10.1% (配偶者無 16.9% 35.2% 24.6% 23.2%				
U 20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う。	6.3%	27.6%	···46.1%···	20.1%	

#### Ⅰ-2 生活についての価値観

	4	3	2	1
	全くそう思う	そう思うと言えば	うではないと思どちらかと言えば	全くそうではない
A 余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない。	23.3%…	····47.5%··	23.8%	5.5%
B 将来の生活のことを計画的に考えて、お金をなるべく 使わないようにしている。	10.4%…	····52.5%··	32.1%	5.0%
C 環境や健康の問題に関心があり、そのために良いことならお金をかけてもかまわないと思う。	7.5%…	46.3%	40.0%	6.2%
D 社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなく ても仕方ないと思う。	7.0%······33.2%······ <b>40.6%······1</b>			
E 自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない。	2.2%·····19.2%····· <b>45.6%·····32.</b> 9			
F 自分の趣味には「おたく」的な要素があると思う。	12.0%···	···23.8%···	23.3%	…40.9%
G 自分の趣味には「ヤンキー」的な要素があると思う。	0.2%	5.7%	····20.9%···	73.1%
H 自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと 思う。	15.2%…	30.7%	29.4%	24.7%
I 余暇の時間は、友人仲間とともに楽しみたいと思う。	18.2%…	····44.4%··	28.9%	8.5%
J 余暇の時間は、家族とともに楽しみたいと思う。	31.6%…	····52.0%··	12.9%	3.5%
K 余暇の時間は、一人で楽しみたいと思う。	12.2%…	···50.0%···	27.1%	10.7%
L 親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然だと思う。	15.9%…	····46.5%··	29.4%	8.2%
M 男性も女性と平等に家事(育児・介護を含む)を分担 するのが当然だと思う。	30.2%…	····44.9%··	21.4%	3.5%

(前ページからの続き)	4 全くそう思う	3 どちらかと言えば	2 どちらかと言えば	1 全くそうではないと	
T 20 年後、子育てを経験し、自分を必要とし大切に思ってくれる人(配偶者・恋人等)と暮らしていると思う。	33.0%······42.1%······15.5%······9.4% (配偶者無 17.6% 38.6% 26.7% 17.0%				
U 20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う。	6.8%	22.6%	48.5%	22.1%	

#### Ⅰ-2 生活についての価値観

	4	3	2	1	
	全くそう思う	ばそう思うどちらかと言え	思う ばそうではないと どちらかと言え	と思うではない	
A 余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働き たくない。	20.5%	·····47.8%·	26.2%	5.5%	
B 将来の生活のことを計画的に考えて、お金をなるべく 使わないようにしている。	11.6%······46.3%······34.3%······7				
C 環境や健康の問題に関心があり、そのために良いことならお金をかけてもかまわないと思う。	7.4%45.2%39.1%8				
D 社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなく ても仕方ないと思う。	5.0%·····36.1%····· <b>37.0%·····21</b>				
E 自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない。	2.4%·····17.7%····· <b>44.1%······35.</b>				
F 自分の趣味には「おたく」的な要素があると思う。	14.0%…	····22.7%··	····22.7%··	····40.6%	
G 自分の趣味には「ヤンキー」的な要素があると思う。	0.2%…	··· 5.5%·	····24.9%··	69.4%	
H 自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと 思う。	20.5%…	28.3%	28.5%	22.7%	
I 余暇の時間は、友人仲間とともに楽しみたいと思う。	17.4%	·····49.5%	27.2%	5.9%	
J 余暇の時間は、家族とともに楽しみたいと思う。	32.0%	·····51.9%·	11.8%	4%	
K 余暇の時間は、一人で楽しみたいと思う。	15.3%	·····43.1%	32.0%	9.6%	
L 親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるの は当然だと思う。	17.2%	····40.8%	33.4%·	8.5%	
M 男性も女性と平等に家事(育児・介護を含む)を分担 するのが当然だと思う。	30.7%	·····49.7%	16.6%	3.1%	

#### Ⅰ-3 今の仕事についての現状評価

【現在、収入のある仕事をしていない人、あるいはアルバイトをしている学生の方については、回答せずに I -4に進んでください。】

	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うと言えば	うってはないと思どちらかと言えば	と思うとはない	
A 総合的に見て、自分の仕事の現状に満足している。			…33.1%… およりネガテ		
B 給料や報酬に満足している。	6.8%······33.5%······37.8%·····21.9				
C 毎日の仕事が「楽しい」と感じられる。	7.9%39.4%36.6%16.1				
D 自分は「やりがい」がある仕事をしていると思う。	<b>17.2%······45.2%</b> ······24.7%·····12.9				
E 今の職業は自分の「天職」だと思っている。	6.5%·····32.6%·····36.9%·····24.0				
F 勤務時間(長さ、時間帯)に関する不満はない。	16.1%···	37.6%	26.9%	19.4%	
G 自分の仕事ぶりは、仕事で関わる社会の人々に認められていると思う。	9.0%…	····48.6%··	34.2%	8.3%	
H 自分の仕事ぶりは、職場の同僚に認められていると 思う。	9.0%…	····57.3%··	25.4%	8.2%	
I 現在の職場の人間関係に満足している。	16.8%…	····55.2%··	19.2%	9.0%	
J 家庭や個人の事情に配慮してくれる、働きやすい職場で働いていると思う。	20.8%…	····51.3%··	18.3%	9.7%	
K 今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンスを求めて転職しようという考えは持っていない。	20.1%…	25.8%	31.5%	22.6%	
L 今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている。	6.5%…	29.4%	45.5%	18.6%	
M 今後の勤務先の将来(経営など)について、明るい 希望を持てると思う。	4.3%…	29.7%	····43.7%··	22.2%	
N 20年後も現在の延長線上にある内容の仕事をしていると思う。	13.3%…	···47.0%···	22.2%	17.6%	
O 20 年後も勤務先を変えずに働いていると思う。【配置 転換は、同じ勤務先とみなします。】	13.3%···	32.6%	25.1%	29.0%	
P 20 年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事を していると思う。	15.1%···	···35.8%···	···28.7%···	20.4%	

#### I-3 今の仕事についての現状評価

【現在、収入のある仕事をしていない人、あるいはアルバイトをしている学生の方については、回答せずに I-4に進んでください。】

北に進んでください。					
	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うと言えば	うではないと思どちらかと言えば	と思う	
A 総合的に見て、自分の仕事の現状に満足している。		····48.8%·	·····28.4%·· 町よりポジテ		
B 給料や報酬に満足している。	5.8%	28.9%	····39 <b>.</b> 7%···	···25.6%	
C 毎日の仕事が「楽しい」と感じられる。	10.2%·····40.9%·····36.5%·····12.4				
D 自分は「やりがい」がある仕事をしていると思う。	<b>21.3%·····45.9%</b> ·····22.4%·····10.5				
E 今の職業は自分の「天職」だと思っている。	10.7%·····30.9%·····36.6%·····21.8				
F 勤務時間(長さ、時間帯)に関する不満はない。	21.8%…	····34.4%·	25.3%	18.5%	
G 自分の仕事ぶりは、仕事で関わる社会の人々に認められていると思う。	7.5%	54.3%	31.6%	6.%	
H 自分の仕事ぶりは、職場の同僚に認められていると 思う。	7.2%	58.6%	28.9%	5.3%	
I 現在の職場の人間関係に満足している。	16.3%	55.8%	19.6%	8.3%	
J 家庭や個人の事情に配慮してくれる、働きやすい職場で働いていると思う。	24.1%	51.0%	16.9%	9.0%	
K 今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンスを求めて転職しようという考えは持っていない。	17.6%	28.4%	32.5%	21.5%	
L 今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている。	6.3%	30.6%	·····43.8%·	19.3%	
M 今後の勤務先の将来(経営など)について、明るい 希望を持てると思う。	5.5%	23.8%	·····47.5%·	23.2%	
N 20年後も現在の延長線上にある内容の仕事をしていると思う。	14.1%	47.2%	24.6%	14.1%	
O 20 年後も勤務先を変えずに働いていると思う。【配置 転換は、同じ勤務先とみなします。】	13.0%	34.3%	·····29 <b>.</b> 0%·	23.8%	
P 20 年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって仕事を していると思う。	14.3%	36.4%	34.4%	14.9%	

Ⅰ-4 仕事についての価値観(現在仕事で収入を得ていない人も、回答してください)

	4	3	2	1
	全くそう思う	ばそう思うどちらかと言え	と思う ばそうではない どちらかと言え	いと思う なはな
A 満足な収入が得られるのであれば、長時間働いても かまわないと思う。	14.0%·····33.7%·····40.6%·····11.			
B やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわないと思う。	5.7%·····24.7%····· <b>50.9%·····18.7</b> %			
C やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかま わないと思う。	11.5%	···35.6%···	39.8%	13.0%
D お互いに協調性があり、同じ目標に向かって全員の 一体感のある職場が理想だと思う。	33.0%…	····54.0%··	11.0%	2.0%
E お互いに個人の自由な考えを言い合い、正直な気持ちで付き合える職場が理想だと思う。	23.0%…	····58.0%··	17.0%	2.0%
F 女性は子どもができても、ずっと職業を続けるほうがいいと思う。	18.0%…	····43.3%··	34.0%	4.8%

#### Ⅰ-5 現在住んでいる地域についての現状評価

	4	3	2	1
	全くそう思う	えばそう思うどちらかと言	いと思う とばそうではな どちらかと言	いと思う なくそうではな
A 総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している。			·····8.2%… )ポジティブ)	
B 現在住んでいる地域での生活で、交通の不便を感じることはない。		•	····24.9%·· )ポジティブ)	
C 現在住んでいる地域の外に、買い物や遊びに行く必要を感じない。	11.0%······36.2%······36.7%·····16.2 (三次市よりポジティブ)			
D 仮に現在住んでいる地域の外に行く機会がなくて も、退屈だと感じないと思う。	10.9%34.8%36.1%18.2% (三次市よりポジティブ)			
E 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代が暮らしやすい生活環境が整っている。		•	····17.5%·· )ポジティブ)	
F 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある。			···· <b>59.1%··</b> )ポジティブ)	•
G 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代にとって魅力的な地域活動の選択肢がある。			·····45.3%·· )ポジティブ)	
H 現在住んでいる地域には、リラックスして付き合える 関係の友人が多くいる。	10.0%···	29.9%	33.2%	···26.9%
I 現在住んでいる地域には、刺激的な人との出会いの 機会が多い。	2.0%13.7% <b>46.5%37.8%</b> (三次市よりポジティブ)			
J 今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続け たいと思っている。	<b>32.6%42.5%</b> 18.4%6.5% (三次市よりポジティブ)			
K 20 年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う。	26.6%…	···39.8%···	21.4%	12.2%

I-4 仕事についての価値観(現在仕事で収入を得ていない人も、回答してください)
4 3 2 1

	4	3	2	1
	全くそう思う	ばそう思うどちらかと言え	と思う ばそうではない どちらかと言え	いと思う
A 満足な収入が得られるのであれば、長時間働いても かまわないと思う。	15.5%34.2%39.7%1			
B やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわないと思う。	5.5%·····25.3%····· <b>52.8%·····16.4</b>			
C やりがいのある仕事であれば、長時間働いてもかま わないと思う。	11.1%…	33.6%	····41.7%··	13.5%
D お互いに協調性があり、同じ目標に向かって全員の 一体感のある職場が理想だと思う。	37.7%…	·····52.7%·	6.8%	2.8%
E お互いに個人の自由な考えを言い合い、正直な気持ちで付き合える職場が理想だと思う。	25.5%	·····51.4%	19.8%	3.%
F 女性は子どもができても、ずっと職業を続けるほうがいと思う。	17.7%	·····51.7%·	26.4%	4.1%

#### I-5 現在住んでいる地域についての現状評価

	4	3	2	1
	全くそう思う	ばそう思うどちらかと言え	と思う ばそうではない どちらかと言え	いと思う
A 総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している。	11.1%…		·····29.4%… りネガティブ	
B 現在住んでいる地域での生活で、交通の不便を感じることはない。	10.9%…		···· <b>32.0%··</b> のネガティブ	· ·
C 現在住んでいる地域の外に、買い物や遊びに行く必要を感じない。	2.0%…		····· <b>31.0%・</b> りネガティブ	
D 仮に現在住んでいる地域の外に行く機会がなくて も、退屈だと感じないと思う。	5.0%…		····· <b>31.9%·</b> · りネガティブ	•
E 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代が暮らしやすい生活環境が整っている。	3.5%…		···· <b>40.8%··</b> のネガティブ	
F 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある。	1.7%…		····· <b>46.1%・</b> のネガティブ	
G 現在住んでいる地域には、20~30 代の若者や子育 て世代にとって魅力的な地域活動の選択肢がある。	1.5%…		···· <b>50.4%··</b> りネガティブ	
H 現在住んでいる地域には、リラックスして付き合える 関係の友人が多くいる。	10.2%…	33.3%	····29.0%··	27.5%
I 現在住んでいる地域には、刺激的な人との出会いの機会が多い。	2.8%…		····· <b>37.8%··</b> りネガティブ	•
J 今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続け たいと思っている。	16.8%…	•	·····27.4%·· りネガティブ	
K 20 年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う。	22.2%…	····42.5%··	17.2%	18.1%

# 府 中 町

#### I-6 地域に関する価値観

	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思う	ううでは	と思う	
	思う	と言え	な と 言 え	っではな	
		ば	思ば	V	
A 自分が一生暮らす場所として、中国山地のような「田舎」はいいと思う。			··· <b>40.0%···</b> シネガティブ)		
B 自分が一生暮らす場所として、広島のような「地方都市」はいいと思う。			····10.4%·· )ポジティブ)		
C 自分が一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいいと思う。	3.5%·····12.7%····· <b>33.8%······50.0</b>				
D 今後、地域活動に積極的に参加したいと思っている。	4.7%33.4% <b>45.6%16</b> (三次市よりネガティブ)				
E 現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流する ことに興味がある。	7.7%···	33.1%	····42.5%···	16.7%	
F 隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい。	7.2%	39.6%	40.3%	12.9%	
G 自分や家族のことが優先で、地域社会の問題について考える気にならない。	8.0%	40.3%	45.0%	6.7%	
H 休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所 に出かけたいと思う。		•	····41.3%·· )ネガティブ)		
I 長い休みがとれたとしたら、海外に行くなど遠出をして、見聞を広めることに興味がある。			····20.4%·· )ポジティブ)		
J 近所の商店街には、大型商業施設や大型小売店に はない魅力があるので、行ってみたいと思う。		-	····38.9%… )ポジティブ)		
K 現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う。		•	····27.4%·· )ネガティブ)		
L 現在住んでいる地域の開発が進むことで、安全で安 心できる暮らしが失われることが心配だ。	8.5%	35.3%	45.3%	10.9%	
M 現在住んでいる地域での生活には、自家用車は欠かせないと思う。		•	····27.4%·· )ネガティブ)		
N 現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が 増えるのは良いことだ。			··· <b>40.3%···</b> )ネガティブ)		

#### I-6 地域に関する価値観

	4 全くそう思う	3 どちらかと言え	2 そうではないと	1 全くそうではな	
A 自分が一生暮らす場所として、中国山地のような「田舎」はいいと思う。	22.7%·		思ば 24.8%・ のポジティブ	····9.2%	
B 自分が一生暮らす場所として、広島のような「地方都市」はいいと思う。	19.3%		·····28.9%· りネガティブ		
C 自分が一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいいと思う。	3.3%…	8.7%.	36.1%.	52.0%	
D 今後、地域活動に積極的に参加したいと思っている。	8.0%37.6% <b>42.2%12.2</b> (府中町よりポジティブ)				
E 現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流する ことに興味がある。	10.2%·····32.0%····· <b>40.9%·····17.0%</b>				
F 隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい。	9.8%…	39.3%	38.5%	12.4%	
G 自分や家族のことが優先で、地域社会の問題について考える気にならない。	8.3%·	38.3%	46.8%	6.5%	
H 休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所 に出かけたいと思う。	26.2%		·····27.1%・ りポジティブ		
I 長い休みがとれたとしたら、海外に行くなど遠出をして、見聞を広めることに興味がある。	33.3%…		·····21.7%・・ りネガティブ		
J 近所の商店街には、大型商業施設や大型小売店に はない魅力があるので、行ってみたいと思う。	7.8%…		····· <b>43.0%・・</b> のネガティブ		
K 現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売 店が増えれば嬉しく思う。	40.6%		·····15.5%・ りポジティブ		
L 現在住んでいる地域の開発が進むことで、安全で安 心できる暮らしが失われることが心配だ。	7.8%·····30.9%·····45.1%·····16.1%				
M 現在住んでいる地域での生活には、自家用車は欠かせないと思う。	<b>86.3%10.2%</b> 2.6%0.9% (府中町よりポジティブ)				
N 現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が 増えるのは良いことだ。	16.7%…		・・・・・34.6%・・ りポジティブ		

#### I-7 日本社会や政治についての現状評価

	4	3	2	1	
	うくそう思	うばそう思	ないと思うどちらかと言	ないと思う	
A 総合的に見て、日本社会や政治の現状について満足している。	1.0%…	15.6%	····49.1%··	34.2%	
B 日本は、安全で安心して暮らせる国だと思う。			····14.1%·· ディブ;t検定		
C 日本は、こつこつと努力すれば成功するチャンスのある国だと思う。	9.5%···	····48.8%···	33.3%	8.5%	
D 日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人々がむ しろ手厚く保護されている国だと思う。	9.0%	33.6%	···40.8%····	16.7%	
E 今の日本政府を信頼している。	1.5%	17.6%	···45.7%····	35.2%	
F 日本の将来には明るい希望があると思う。	2.5%	20.9%	51.0%	25.6%	
G 将来、日本が他国に攻撃されて、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていいと思う。			… <b>46.9%…</b> ポジティブ)	· ·	
H 将来、日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる 可能性について、心配しなくていいと思う。			·· <b>41.7%····</b> ティブ ;t検定	-	
I 将来、原発事故の影響で、自分が被害者となる可能 性について、心配しなくていいと思う。	3.5%14.4% <b>47.4%34.7%</b> (三次市よりポジティブ;t検定のみ)				
J 将来、日本の伝統や慣習が失われ、社会の雰囲気が 悪くなる可能性について、心配しなくていいと思う。	2.7%······14.1%······ <b>46.2%······37.0%</b> (三次市よりポジティブ)				
K 今後、日本国内に外国人が増加することは、総合的 に見ると良いことだ。			··· <b>39.2%····</b> · ブ;重回帰分	· ·	

#### I-8 日本社会や政治に関わる価値観

	4	3	2	1
	全くそう思	えばそう思う	ないと思う と ないと思う と も と も る で は	ないと思う
A 対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり 方にしたがえば、間違いはないと思う。	6.5%	43.0%	41.0%	9.5%
B 日本は「内向き」過ぎるところがあるので、もっと外に 目を向けたほうがいい。	<b>13.5%······</b> 58.0%······26.0%······2.5%			
C 国を愛する心をしっかり持とうと心がけている。	12.2%…	····50.0%··	31.1%	6.7%
D 社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている。	10.0%…	42.4%	38.4%	9.2%
E 自分や家族のことが優先で、社会問題や政治について考える気にならない。	7.0%	34.3%	···48.3%····	10.4%
F 自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がないと思う。	12.4%···	···40.5%···	36.1%	10.9%

#### I-7 日本社会や政治についての現状評価

	4	3	2	1	
	うくそう 思	うばそう思	ないと思うないと思うというと言	ないと思う	
A 総合的に見て、日本社会や政治の現状について満足している。	1.1%…	16.1%	····45.1%··	37.7%	
B 日本は、安全で安心して暮らせる国だと思う。		•	·····19.7%· ティブ ;t検気		
C 日本は、こつこつと努力すれば成功するチャンスのある国だと思う。	<b>11.5%······44.9%</b> ······34.2%······9				
D 日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人々がむ しろ手厚く保護されている国だと思う。	8.5%·····34.9%····· <b>42.5%·····14.</b>				
E 今の日本政府を信頼している。	1.7%…	15.9%	····44.6%··	37.8%	
F 日本の将来には明るい希望があると思う。	2.4%…	21.1%	····49.6%··	27.0%	
G 将来、日本が他国に攻撃されて、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていいと思う。	2.4%…		・・・・・ <b>41.0%・・</b> クネガティブ	,	
H 将来、日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる 可能性について、心配しなくていいと思う。		, -	····· <b>37.4%・</b> · ティブ ;t検気		
I 将来、原発事故の影響で、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていいと思う。			····· <b>39.6%·</b> · ティブ ;t検気	,	
J 将来、日本の伝統や慣習が失われ、社会の雰囲気が 悪くなる可能性について、心配しなくていいと思う。	1.1%…	, -	・・・・・ <b>47.8%・・</b> クネガティブ		
K 今後、日本国内に外国人が増加することは、総合的 に見ると良いことだ。		•	·····37.7%· ブ;重回帰		

#### I-8 日本社会や政治に関わる価値観

	4	3	2	1	
	全くそう思う	えばそう思うどちらかと言	ないと思う とばそうでは とちらかと言	ないと思う	
A 対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり 方にしたがえば、間違いはないと思う。	5.0%	41.0%	·····44.4%·	9.6%	
B 日本は「内向き」過ぎるところがあるので、もっと外に 目を向けたほうがいい。	15.3%52.8%28.8%3.1%				
C 国を愛する心をしっかり持とうと心がけている。	12.7%…	····49.3%·	31.2%	12.4%	
D 社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている。	10.2%	41.5%	41.5%	6.7%	
E 自分や家族のことが優先で、社会問題や政治について考える気にならない。	4.8%	36.8%	····46.0%···	12.4%	
F 自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がないと思う。	13.3%…	38.3%	34.2%	14.2%	

#### Ⅰ-9 自分自身の人生に対する現状評価

百万百分·万人工(CA),3元代前 lill					
	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うと言えば	うではないと思どちらかと言えば	全くそうではない	
A 総合的に見て、自分の現状に満足している。	<b>10.7%······51.4%</b> ······25.3%······12.7%				
B 今までの人生を振り返って、達成感がある。	6.9%·····38.0%·····40.9%·····14.1%				
C 自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い 絆を築けていると思う。	13.4%46.4%30.0%10.2% (三次市よりポジティブ;重回帰分析のみ)				
D 自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う。	5.7%30.0% <b>43.2%21.0%</b> (三次市よりポジティブ;重回帰分析のみ)				
E 自分は人の役に立っていると思う。	4.0%…	42.7%	40.7%	12.7%	
F 自分は幸せだと思う。	26.1%…	····54.8%··	13.9%	5.2%	
G 自分の将来に明るい希望を持っている。	12.7%…	···43.2%···	31.5%	12.7%	

#### I-10 自分自身の人生に関わる価値観

	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うど言えば	うではないと思どちらかと言えば	と思う	
A 今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立てて チャレンジしようと思っている。			····· <b>47.1%・</b> ィブ ; 重回帰		
B 今後の人生では、人並みに安定した暮らしを手に入れるために、現実的に考えて行動しようと思っている。	19.9%	<b>19.9%······62.7%</b> ······15.7%······1.7%			
C 今後の人生では、平凡でもいいから、人並みの幸せを 手に入れることが大事だと思っている。	24.3%	61.0%	12.7%	2.0%	
D 今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を 追求することが大事だと思っている。	8.7%	35.2%	51.6%	4.5%	
E 今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くこと が大事だと思っている。	10.4%	42.7%	42.9%	4.0%	
F 今後の人生では、自分の利益と関係なく、自分の身内 や仲間のためを考えて行動しようと思う。	9.0%	50.2%	·····36.8%	4.0%	
G 今後の人生では、自分の利益と関係なく、広く社会に 役立つことを考えて行動しようと思う。	4.5%	35.6%	50.5%	9.5%	

#### Ⅰ-9 自分自身の人生に対する現状評価

	4 全くそう思う	3 どちらかと言えば	2 そうではないと思 どちらかと言えば	1 全くそうではない	
A 総合的に見て、自分の現状に満足している。	10.6%	48.4%	12.6%	13.9%	
B 今までの人生を振り返って、達成感がある。	7.8%·····34.1%·····41.2%·····13.9%				
C 自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い 絆を築けていると思う。		-	·····29.9%·· ゚ブ;重回帰タ		
D 自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う。			····· <b>45.6%··</b> ·ブ;重回帰タ		
E 自分は人の役に立っていると思う。	5.4%…	42.2%	41.5%	10.9%	
F 自分は幸せだと思う。	24.7%	·····56.8%·	12.4%	6.1%	
G 自分の将来に明るい希望を持っている。	12.4%…	40.7%	34.3%	12.6%	

#### I-10 自分自身の人生に関わる価値観

	4	3	2	1	
	全くそう思う	そう思うど言えば	うではないと思どちらかと言えば	と思う	
A 今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立てて チャレンジしようと思っている。	6.1%32.3% <b>49.9%11.7</b> 9 (府中町よりネガティブ;重回帰分析のみ				
B 今後の人生では、人並みに安定した暮らしを手に入れるために、現実的に考えて行動しようと思っている。	18.9%	<b>18.9%······65.3%</b> ······13.2%······2.6%			
C 今後の人生では、平凡でもいいから、人並みの幸せを 手に入れることが大事だと思っている。	25.8%	61.8%	<b>6</b> ·····9.8%·	2.6%	
D 今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を 追求することが大事だと思っている。	8.9%	40.7%	44.1%	6.3%	
E 今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くこと が大事だと思っている。	10.8%	44.5%	39.3%	3.4%	
F 今後の人生では、自分の利益と関係なく、自分の身内 や仲間のためを考えて行動しようと思う。	9.1%	55.3%	30.8%	4.8%	
G 今後の人生では、自分の利益と関係なく、広く社会に 役立つことを考えて行動しようと思う。	5.0%	36.4%	49.7%	8.9%	

- Ⅱ 次に、あなた自身の基本的な事柄についてお尋ねいたします。
- Ⅱ-1 生まれた年・月 / 性別

A 生まれた年月(空相	闌に記入して	B 性別(記号に○を付けてください)	
1 9	年	月	O 男性 36.7%
平均年齢 31.0 歳			1 女性 63.3%

Ⅱ-2 現在あなたは何人暮らしですか。数字でお答えください。(同じ世帯を構成する人数)

平均 3.2 人暮らし (<三次市)

Ⅱ-3 以下に挙げる**あなたの家族・親族**がそれぞれ**現在どこに住んでいるのか**について、**あてはまる番号にひとつずつ**〇印を付けてください。存在しない場合は、6を選択してください。

THE CALLY STATES OF BUILDING CALLY STATES								
	1	2	3	4	5	6		
	同居している	る場所に住んでい1時間以内に行け	に住んでいる日帰りできる場所	所に住んでいる日帰りできない場	わからない	存在しない		
A 自分の父親	20.4%·····	32.7%	···20 <b>.</b> 7%·····	12.0%	2.5%	11.7%		
B 自分の母親	27.3%·····	34.3%	23.8%	11.8%	0.3%	2.8%		
C 配偶者(事実婚、 婚約者を含む)	60.4%·····	1.0%	1.5%	0.7%	0.5%	35.8%		
D 配偶者の父親	0.5%	32.2%	15.2%	6.0%	1.7%	44.4%		
E 配偶者の母親	0.7%····	34.6%	17.9%	6.7%	0.7%	39.3%		
F 自分の子ども	46.8%·····	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	52.7%		

- II-4 あなたにとって「地元」と感じられる地域の範囲について、以下から最も近い選択肢ひとつに○印をつけてください。
  - A 出身(あるいは現住所)の小学校区 15.1%
  - B 出身(あるいは現住所)の中学校区 17.3%
  - C 出身(あるいは現住所)の市町村全体 45.8%
  - D 広島市を含む生活圏 16.3%
  - E 広島県全体 2.5%

F その他( ) 2.5%

- II 次に、あなた自身の基本的な事柄についてお尋ねいたします。
- Ⅱ-1 生まれた年・月 / 性別

A 生まれた年月(空欄に記入してください)	B 性別(記号に○を付けてください)
1 9 年 月	O 男性 40.7%
平均年齢 31.5 歳	1 女性 59.3%

Ⅱ-2 現在あなたは何人暮らしですか。数字でお答えください。(同じ世帯を構成する人数)

平均 3.5 人暮らし (>府中町)

Ⅱ-3 以下に挙げる**あなたの家族・親族**がそれぞれ**現在どこに住んでいるのか**について、**あてはまる番号にひとつずつ**〇印を付けてください。存在しない場合は、6を選択してください。

	1	2	3	4	5	6
	同居している	る場所に住んでいる 1時間 以内に行け	に住んでいる日帰りできる場所	所に住んでいる日帰りできない場	わからない	存在しない
A 自分の父親	24.3%…	32.4%	19.9%	7.0%	2.2%	14.2%
B 自分の母親	<b>32.3%</b> ······35.4%·····21.8%······6.6%······0.4%······3.5%					
C 配偶者(事実婚、 婚約者を含む)	56.0%…	2.6%	1.7%	0.7%	0.2%	38.8%
D 配偶者の父親	5.2%…	30.1%	12.9%	3.5%	0.7%	·····47.6%
E 配偶者の母親	6.3%	30.6%	15.5%	4.2%	0.4%	42.9%
F 自分の子ども	49.5%…	0.4%	0.2%	0.4%	0.0%	49.5%

- II-4 あなたにとって「地元」と感じられる地域の範囲について、以下から最も近い選択肢ひとつに〇印をつけてください。
  - A 出身(あるいは現住所)の小学校区 17.9%
  - B 出身(あるいは現住所)の中学校区 17.3%
  - C 出身(あるいは現住所)の市町村全体 54.0%
  - D 広島市を含む生活圏 3.7%
  - E 広島県全体 3.7%
  - F その他( ) 3.0%

- Ⅱ-5 あなたの居住歴について、以下から最も近い選択肢ひとつに〇印を付けてください。
  - A 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で暮らしたことがない。 25.7%(>三次市)
  - B 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域の学校を卒業(または中退)後、戻ってきた。 10.6%(<三次市)
  - C 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で就職後、戻ってきた。 4.7%(<三次市)
  - D 結婚のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 23.8%
  - E 仕事のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 16.6%
  - F 就学のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 2.7%
  - G 住み替えのため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 5.4%
  - H 家族の都合で今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 5.9%
  - I その他( ) 3.7%(うち「地元」在住者 2.7%)
- II-6 あなたが**これまでに参加してきた地域活動・社会活動の関わりの程度**について、以下に挙げた活動の種類ごとに、**最も近いと考えられる番号にひとつずつ○印**をつけてください。あなたの参加した活動の分類が難しい場合は、「その他」に具体的に書いてください。

 $3 \mid 2 \mid 1$ 

	4	3		T
	積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない
A 趣味関係(スポーツを含む)のグループの活動	/ -	…26.3%… (三次市より		/-
B 職場参加としての地域活動・社会活動	5.8%25.3%19.0%49.9% (三次市よりネガティブ)		, -	
C 地縁組織の活動(町内会・自治会・青年団・消防団、 祭の運営等)	2.0%25.6%18.0%54.4% (三次市よりネガティブ)		, -	
D 学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動	/ -	····31.3%·· (三次市より	, -	
E 業界団体・同業者団体・労働組合の活動	/-	···· 8.3%・ (三次市より	, _	, -
F 政治団体の活動	0.070	···· 1.8%·· (三次市より	0.0,0	00.070
G 宗教団体の活動	1.5%…	3.0%	4.0%	91.5%
H 上記以外のボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動	1.8%…	···· 7.8%··	···· 5.5%·	84.9%
I その他( 0.2%				)

- Ⅱ-5 あなたの居住歴について、以下から最も近い選択肢ひとつに〇印を付けてください。
  - A 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で暮らしたことがない。 11.2%(<府中町)
  - B 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域の学校を卒業(または中退)後、戻ってきた。 **25.3%**(>府中町)
  - C 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で就職後、戻ってきた。 14.9%(>府中町)
  - D 結婚のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 19.9%
  - E 仕事のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 12.1%
  - F 就学のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 3.7%
  - G 住み替えのため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 4.1%
  - H 家族の都合で今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である。 6.3%
  - I その他( ) 2.2%(うち「地元」在住者 0.9%)
- II-6 あなたが**これまでに参加してきた地域活動・社会活動の関わりの程度**について、以下に挙げた活動の種類ごとに、**最も近いと考えられる番号にひとつずつ〇印**をつけてください。あなたの参加した活動の分類が難しい場合は、「その他」に具体的に書いてください。

	4	3	2	1
	積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない
A 趣味関係(スポーツを含む)のグループの活動	19.5%…		····13.8%·· よりポジティ	
B 職場参加としての地域活動・社会活動	8.3%…	•	·····20.1%・ よりポジティ	
C 地縁組織の活動(町内会・自治会・青年団・消防団、 祭の運営等)	8.3%…	, -	·····24.3%・ よりポジティ	, -
D 学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動	12.6%28.1%18.7%40.5% (府中町よりポジティブ)			
E 業界団体・同業者団体・労働組合の活動	5.0%…	•	····17.7%・ よりポジティ	
F 政治団体の活動	1.3%…	, -	・・・・・ 7.8%・ よりポジティン	, -
G 宗教団体の活動	1.5%	2.6%	5.4%	90.4%
H 上記以外のボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動	3.3%	6.6%	···· 9.7%·	80.4%
I その他( 0.0%				)

II-7 ここ一年の間、あなたは**以下の場所に出かけた頻度**を教えてください。それぞれの場所について、 **最も近いと考えられる番号にひとつずつ○印**を付けてください。

	4	3	2	1
	週に数日程度	月に数日程度	年に数日程度	出かけていない
A 現住所の自治体の中にある大型商業施設・大型小 売店		·····42.5%· (三次市より	,-	,-
B 現住所の自治体の外にある県内の大型商業施設・ 大型小売店	/ -	···· <b>53.6%</b> ·· (三次市より		,
C 国内の県外地域	1.3%	8.0%	69.8%	21.0%
D (C のうち)首都圏・関西圏などの国内の大都市	0.8%	2.0%	44.6%	52.6%
E 日本国外		··· 0.2%··· (三次市より		- 1

- II-8 あなたの**最終学歴**について、**ひとつ選んで○印**をつけてください。(高卒で大学中退の場合は、高卒とみなします)
  - A 在学中(大学または大学院) 6.2%
  - B 在学中(短大または高専) 0.5%
  - C 在学中(専門学校) 0.5%
  - D 大学卒または大学院卒 41.1%(>三次市)
  - E 短大卒または高専卒 14.6%
  - F 専門学校卒 15.1%(<三次市)
  - G 高卒 18.8%(<三次市)
  - H 中卒 1.7%

I その他( ) 1.0%

II-7 ここ一年の間、あなたは**以下の場所に出かけた頻度**を教えてください。それぞれの場所について、 **最も近いと考えられる番号にひとつずつ○印**を付けてください。

	WOST, C AND B ALLOCAL A LOCAL AND CAREET AND				
	4	3	2	1	
	週に数日程度	月に数日程度	年に数日程度	出かけていない	
A 現住所の自治体の中にある大型商業施設・大型小 売店	34.1%…		 … 8.8%… )ネガティブ		
B 現住所の自治体の外にある県内の大型商業施設・ 大型小売店	5.7%·	-	·····42.1%· 0ネガティブ		
C 国内の県外地域	1.1%	10.4%	65.0%	23.4%	
D (C のうち)首都圏・関西圏などの国内の大都市	0.4%	2.2%	38.0%	59.3%	
E 日本国外	0.0%…		···· 6.8% 0ネガティブ		

- II-8 あなたの**最終学歴**について、**ひとつ選んで○印**をつけてください。(高卒で大学中退の場合は、高卒とみなします)
  - A 在学中(大学または大学院) 4.3%
  - B 在学中(短大または高専) 0.2%
  - C 在学中(専門学校) 1.3%
  - D 大学卒または大学院卒 28.1% (<府中町)
  - E 短大卒または高専卒 13.0%
  - F 専門学校卒 22.7%(>府中町)
  - G 高卒 26.8%(>府中町)
  - H 中卒 2.8%

I その他( ) 0.0%

- II-9 ここ1か月の間のあなたの**就業状態と雇用形態**について、以下から**最も近い選択肢ひとつに〇印を**付けてください。(ただし、在籍しながら休職中の人は休職直前の状態について、兼職されている方は主な仕事ひとつについてお答えください)
  - A 仕事を主にしていて、正規雇用(フルタイム)の仕事で収入を得た。48.5%
  - B 仕事を主にしていて、自営業主またはその家族従業員として収入を得た。1.5%(<三次市)
  - C 仕事を主にしていて、会社経営者または役員として収入を得た。 0.7%
  - D 仕事を主にしていて、パート・アルバイト・派遣・有期契約の非正規雇用の仕事で収入を得た。 12.6%
  - E 家事を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしていて収入を得た。 7.9%
  - F 通学を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしていて収入を得た。 3.2%
  - G 家事を主にしていて、仕事で収入を得ていない。 21.0%(>三次市)
  - H 通学を主にしていて、仕事で収入を得ていない。 2.5%
  - I 家事も通学もしておらず、仕事で収入も得ていない。 1.7% (無回答 0.2%)
- II-10 【II-9で「仕事で収入を得た」と答えた人だけお答えください】あなたの主な仕事の**職業の種類** に関して、以下から**最も近い選択肢ひとつに〇印を**つけてください。分類が難しい場合は、「その 他」の回答欄に仕事内容を書いてください。
  - A 専門·技術(研究者、教員、技術者、看護師、保育士等) 19.3%
  - B 管理(会社・団体などの課長以上) 0.5%
  - C 事務(係長以下の一般事務) 16.1%
  - D 販売(販売員、セールス、不動産仲介等) 8.4%
  - E サービス(理容師・美容師、介護職員、調理人、接客等) 11.4%(<三次市)
  - F 製造作業・機械操作(製品の製造・検査、機械の組立・整備・製造等) 7.4%
  - G 輸送・機械運転(トラック運転手、バス運転手、建設機械運転手等) 1.2%
  - H 運搬·清掃·包装(郵便配達、荷物運搬、清掃員、包装作業等) 4.0%(>三次市)
  - I 建設作業(とび職、左官、土木工事、採掘等) 2.2%
  - J 保安(警察官、消防士、警備員等) 0.5%
  - K 農林漁業 0.0%(<三次市)
  - L その他(アフターコーディングで A~K に分類できなかったもの ) 1.7%

- Ⅱ-9 ここ1か月の間のあなたの**就業状態と雇用形態**について、以下から**最も近い選択肢ひとつに〇印を**付けてください。(ただし、在籍しながら休職中の人は休職直前の状態について、兼職されている方は主な仕事ひとつについてお答えください)
  - A 仕事を主にしていて、正規雇用(フルタイム)の仕事で収入を得た。 51.6%
  - B 仕事を主にしていて、自営業主またはその家族従業員として収入を得た。 5.8%(>府中町)
  - C 仕事を主にしていて、会社経営者または役員として収入を得た。 1.5%
  - D 仕事を主にしていて、パート・アルバイト・派遣・有期契約の非正規雇用の仕事で収入を得た。 12.7%
  - E 家事を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしていて収入を得た。 7.8%
  - F 通学を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしていて収入を得た。 1.5%
  - G 家事を主にしていて、仕事で収入を得ていない。 13.4%(<府中町)
  - H 通学を主にしていて、仕事で収入を得ていない。 3.2%
  - I 家事も通学もしておらず、仕事で収入も得ていない。 1.7% (無回答 0.6%)
- II-10 【II-9で「仕事で収入を得た」と答えた人だけお答えください】あなたの主な仕事の**職業の種類** に関して、以下から**最も近い選択肢ひとつに〇印を**つけてください。分類が難しい場合は、「その 他」の回答欄に仕事内容を書いてください。
  - A 専門·技術(研究者、教員、技術者、看護師、保育士等) 18.8%
  - B 管理(会社・団体などの課長以上) 1.3%
  - C 事務(係長以下の一般事務) 14.5%
  - D 販売(販売員、セールス、不動産仲介等) 8.0%
  - E サービス(理容師・美容師、介護職員、調理人、接客等) 17.3%(>府中町)
  - F 製造作業・機械操作(製品の製造・検査、機械の組立・整備・製造等) 9.1%
  - G 輸送・機械運転(トラック運転手、バス運転手、建設機械運転手等) 1.7%
  - H 運搬·清掃·包装(郵便配達、荷物運搬、清掃員、包装作業等) 1.5%(<府中町)
  - I 建設作業(とび職、左官、土木工事、採掘等) 1.9%
  - J 保安(警察官、消防士、警備員等) 1.5%
  - K 農林漁業 2.6%(>府中町)
  - L その他 (アフターコーディングで A~K に分類できなかったもの ) 1.1%

П-11	【Ⅱ-9で「仕事で収入を得た」と答えた人だけお答えください】あなたの主な仕事の <b>勤務先の業</b>
	<b>種または業務内容</b> に関して、以下から <b>最も近い選択肢ひとつに〇印</b> をつけてください。 分類が難
	しい場合は、「その他」の解答欄に、勤務先の業種または業務内容を書いてください。
	A 農林漁業·鉱業 0.2%(<三次市)
	B 建設業 4.7%
	C 製造業 17.1%(>三次市)

- E 情報通信 2.0%
- F 運輸·郵便(旅客運送、貨物運送、郵便配達等) 3.7%(>三次市)
- G 卸売・小売(物品の販売を行っている店舗、事業所等) 10.4%
- H 金融·保険 2.5%
- I 不動產·金品売買 1.0%
- J 飲食店・宿泊サービス 5.9%

D 電気・ガス・熱供給・水道 1.7%

- K 生活関連サービス(美容院、クリーニング店、スポーツ施設、娯楽施設等) 1.2%
- L 専門技術サービス(研究所、デザイン事務所、法律事務所、経営コンサルタント等) 1.0%
- M その他のサービス(農業協同組合、自動車整備、各種の修理業等) 2.7%
- N 教育・学習支援(学校、幼稚園、図書館などの社会教育機関、学習塾等) 2.7%
- O 医療·福祉(病院·医療施設、保育所、介護事業、社会福祉事務所等) 13.1%(<三次市)
- P 上記に分類されない公務員 2.2%(<三次市)

Q その他( )0.7%

II-12 あなたが**収入のある仕事のために費やしている時間**は、一週間合計でほぼどれほどですか。最近の一般的な状況について**数字で**お答えください。(残業時間を含む。休憩時間は除く。)



中央值 40 時間(男性50 時間、女性25 時間)

II-13 あなたが**家事をしている時間**(日常生活に必要な炊事、洗濯、買い物、掃除等。育児、介護も含む)は、一週間でほぼどれほどですか。最近の一般的な状況について**数字で**お答えください。



中央值 14 時間(男性7時間、女性 28 時間)

二 次 市
Ⅱ-11【Ⅱ-9で「仕事で収入を得た」と答えた人だけお答えください】あなたの主な仕事の勤務先の業
<b>種または業務内容</b> に関して、以下から <b>最も近い選択肢ひとつに〇印</b> をつけてください。分類が難
しい場合は、「その他」の解答欄に、勤務先の業種または業務内容を書いてください。
A 農林漁業·鉱業 3.7%(>府中町)
B 建設業 4.1%
C 製造業 11.0%(<府中町)
D 電気・ガス・熱供給・水道 1.9%
E 情報通信 0.9%
F 運輸·郵便(旅客運送、貨物運送、郵便配達等) 1.3%(<府中町)
G 卸売・小売(物品の販売を行っている店舗、事業所等) 9.7%
H 金融·保険 2.2%
I 不動産·金品売買 0.2%
J 飲食店・宿泊サービス 3.5%
K 生活関連サービス(美容院、クリーニング店、スポーツ施設、娯楽施設等) 2.8%
L 専門技術サービス(研究所、デザイン事務所、法律事務所、経営コンサルタント等) 0.6%
M その他のサービス(農業協同組合、自動車整備、各種の修理業等) 2.8%
N 教育・学習支援(学校、幼稚園、図書館などの社会教育機関、学習塾等) 3.9%
O 医療·福祉(病院·医療施設、保育所、介護事業、社会福祉事務所等) 23.5%(>府中町)
P 上記に分類されない公務員 5.6%(>府中町)
Q その他( ) 1.3%
II-12 あなたが <b>収入のある仕事のために費やしている時間</b> は、一週間合計でほぼどれほどですか。最
近の一般的な状況について <b>数字で</b> お答えください。(残業時間を含む。休憩時間は除く。) —————
時間(一週間合計)
中央値 40 時間(男性 48 時間、女性 35 時間)
中光框 40 時间(方任 40 時间、女任 55 時间)
Ⅱ-13 あなたが <b>家事をしている時間</b> (日常生活に必要な炊事、洗濯、買い物、掃除等。 育児、介護も含
む)は、一週間でほぼどれほどですか。最近の一般的な状況について <b>数字で</b> お答えください。

中央値 10 時間(男性 5 時間、女性 28 時間)

時間(一週間合計)

Ⅱ-14 あなたの個人年収(税込。本年度見通し。)と世帯年収(税込。同じ住居に住み、生計を同じくする人たち全員の個人年収を合わせた額。一人暮らしの方は個人年収と同額になります。)のそれぞれについて、以下から最も近い選択肢の記号 A~Hをひとつずつ回答欄に書いてください。

A 100 万円未満 個人(無収入 24.8% 収入あり 12.9%) 世帯(2.3%) B 100 万円台 個人(10.1%) 世帯(4.4%) C 200 万円台 個人(14.4%) 世帯(8.5%) D 300 万円台 個人(13.7%) 世帯(14.0%) E 400~500 万円台 個人(19.5%) 世帯(34.7%) F 600~700 万円台 個人(4.6%) 世帯(21.3%) G 800~900 万円台 個人(0.0%) 世帯(10.5%) H 1000 万円以上 個人(0.0%) 世帯(4.4%)

	グループ化中央値		グループ化中央値
個人年収	208 万円 (男性 411 万	世帯年収	525 万円
	円、女性 102 万円)		323 /J []

Ⅱ-15 あなたの居住地区を以下の選択肢からひとつ選び、A~Eのいずれかに〇印を付けてください。

A 府中小学校区	(本町一~二丁目、本町四~五丁目/鶴江一~二丁目/大須一~四
29.5%	丁目/宮の町一丁目・三丁目/大通二丁目6街区/大通三丁目)
B 府中南小学校区	(鹿籠一~二丁目/柳ヶ丘/桃山一~二丁目/青崎南・青崎中・青崎
21.0%	東/千代/新地)
C 府中中央小学校区	(宮の町二丁目/茂陰一~二丁目/八幡一丁目・三~四丁目/緑ケ
25.0%	丘/大通一~二丁目(6街区を除く)/浜田一~四丁目/浜田本町)
D 府中東小学校区	(宮の町四~五丁目/瀬戸ハイムー~四丁目/八幡二丁目/山田一
11.9%	~五丁目)
E 府中北小学校区	(桜ヶ丘/清水ヶ丘/城ヶ丘/みくまり一~三丁目/石井城一~二丁
11.4%	目/本町三丁目)

地区不明 1.2%

質問は以上です。長時間にわたり、ご協力を誠にありがとうございました。

Ⅱ-14 あなたの個人年収(税込。本年度見通し。)と世帯年収(税込。同じ住居に住み、生計を同じくする人たち全員の個人年収を合わせた額。一人暮らしの方は個人年収と同額になります。)のそれぞれについて、以下から最も近い選択肢の記号 A~H をひとつずつ回答欄に書いてください。

A 100 万円未満 個人(無収入 16.1% 収入あり 14.1%) 世帯(3.2%) B 100 万円台 個人(18.1%) 世帯(4.0%) C 200 万円台 個人(15.4%) 世帯(12.4%) D 300 万円台 個人(20.9%) 世帯(21.4%)

E 400~500 万円台 個人(14.1%) 世帯(28.4%)

F 600~700 万円台 個人(0.7%) 世帯(16.9%)

G 800~900 万円台 個人(0.2%) 世帯(9.2%)

H 1000 万円以上 個人(0.4%) 世帯(4.5%)

グループ化中央値グループ化中央値個人年収214 万円 (男性 332 万円)世帯年収<br/>469 万円

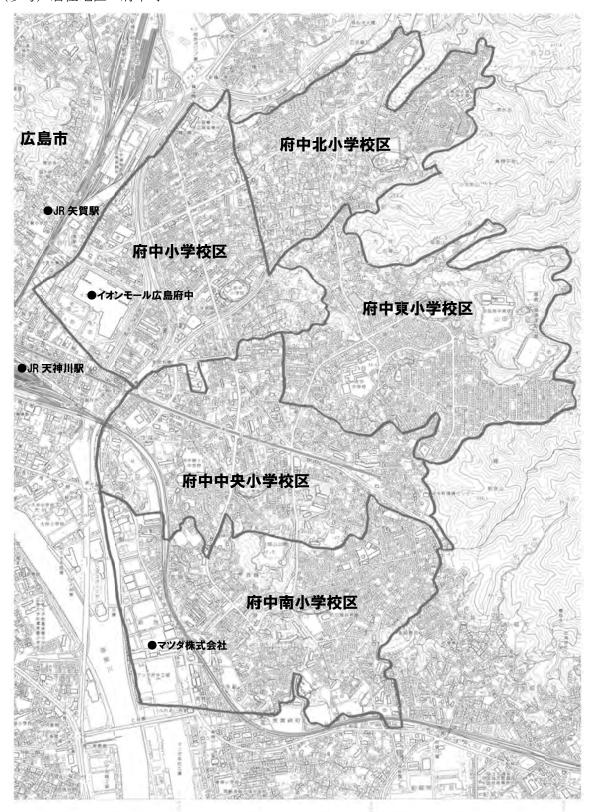
II-15 あなたの居住地区を以下の選択肢のなかから一つ選び、 $\bigcirc$ 印を付けてください。

A 三次地区 14.9%	(日下町·三原町·三次町)
B 河内地区 1.5%	(穴笠町・東河内町・西河内町・小文町・山家町)
C 和田地区 2.4%	(向江田町・和知町)
D 川西地区 1.5%	(上田町・有原町・三若町・石原町・海渡町)
E 田幸地区 1.9%	(糸井町・大田幸町・小田幸町・木乗町・志幸町・塩町)
F 神杉地区 1.5%	(江田川之内町・高杉町・廻神町)
G 酒屋地区 4.5%	(東酒屋町・西酒屋町)
H 青河地区 0.9%	
I 川地地区 1.7%	(上川立町・下川立町・上志和地町・下志和地町・秋町)
J 粟屋地区 1.7%	
K 十日市地区 23.8%	
L 八次地区 18.1%	(南畑敷町・畠敷町・四拾貫町・後山町)
M 君田町 1.9%	
N 布野町 1.7%	
O 作木町 2.2%	
P 吉舎町 4.5%	
Q 三良坂町 4.8%	
R 三和町 2.2%	
S 甲奴町 3.2%	
UL T TIT = 00/	

地区不明 5.0%

質問は以上です。長時間にわたり、ご協力を誠にありがとうございました。

(参考) 居住地区 府中町



出所: 府中町提供

(参考) 居住地区 三次市



出所: 三次市提供

# 参考図表

# 「広島20-30代調査」報告書 (統計分析篇)

吉備国際大学社会科学部准教授 轡田竜蔵(くつわだ・りゅうぞう)

# 調査の概要

質問紙調査・・・2014年7月実施。住民基本台帳からのサンプリング。 郵送調査で867票を回収。

⇒ 本報告書 < 統計分析篇 > は、その分析に基づくものである。

インタビュー調査・・・2014年8月~現在。約60名に実施済み。質問紙調査と同様の調査を実施後、その回答理由を2時間程度インタビュー。

⇒ 別途、調査結果を公表予定。

# 問題意識

●大規模な総合調査を通して「地方の若者」に焦点を当てる。質問紙の内容は、生活、仕事、地域、社会、人生の5テーマについての112の意識調査項目、居住や生活の実態に関わる34の実態調査項目からなる。

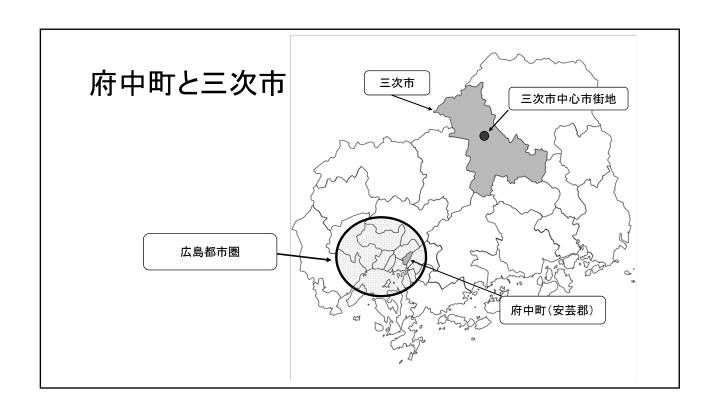
⇒「大都市圏」に偏りがちな若者調査(学生調査になりがち)からは見えにくい問題を扱いたい(地域特性、居住歴の違い等)。

●若者と言っても、20-30代と調査対象を広くとり、特に「ポスト青年期」(ライフコース上の「自立」を達成するために、地域移動をはじめ、さまざまな選択肢に向き合っている年代)における意識・実態の分化について捉えたい。

⇒地方創生に関わる議論のなかでも焦点化されている、「地方暮らし」の メリット・デメリットについての仮説・俗説を検証したい。

# 調査地の選択 一地方中枢拠点都市圏とその圏外との対比

- ●日本の「地方の若者」についての一般的な議論に資することを意識し、広島県内の「安芸郡府中町」と「三次市」の二か所で調査を実施。
- ●府中町・・・東西南北を広島市に囲まれる。東の傾斜地には高度経済成長期に造成された郊外住宅地が広がる一方、西の平地部には広島都市圏の最大の商業施設である「イオンモール広島府中」(約200店舗)が立地する。「地方中枢拠点都市」(三大都市圏以外、人口20万以上、昼夜間人口比率1以上の都市)の地域環境の典型。
- ●三次市・・・広島都市圏から車で約1・5~2時間。中国山地に位置する県北の「中心市」。直径3キロ四方ほどの中心市街地に生活インフラが集中し、その他の大半が山林と農山村。「地方中枢拠点都市」と雇用圏や平日生活圏が重ならない、地方の「周辺地域」の典型。





(府中町西部) イオンモール広島府中



(府中町東部) 丘陵地のニュータウン



三次市中心市街地



の大半は農山村地域)

# 基本データ(1)人口動態

#### ●人口動態

【現況(標本抽出時点2014年6月1日)】

- ・府中町は人口51,655人、面積10km。社会増があり、当面は横ばい。数年後に人口減少期に突入する予測。
- ・三次市は人口55,615人、面積778km。自然減・社会減ともにあり、既に人口減少期に突入。

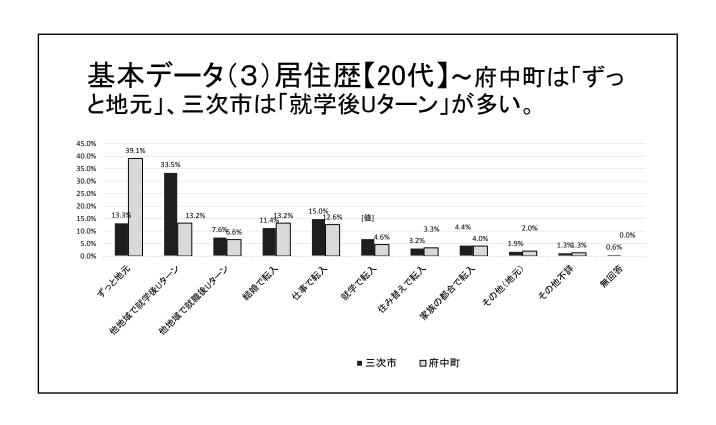
#### 【2040年(社人研推計)】

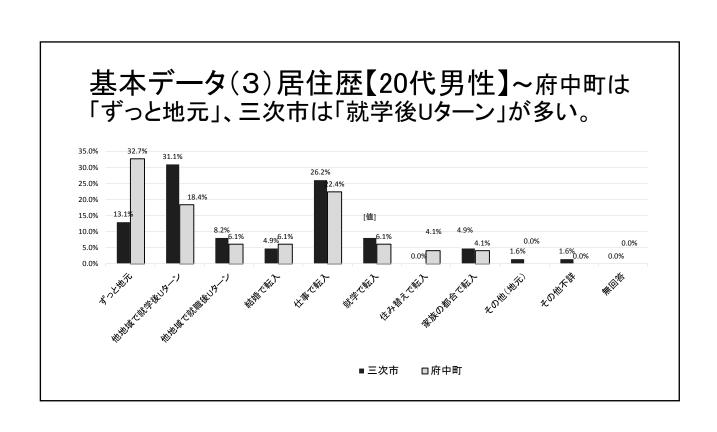
- ・標本抽出時点と比べて、府中町は68.3%、三次市は65.4%と激減。全国の80.9%より減少率が大きい。
- ・ただし、20-30代人口比率については、府中町が24.5%⇒21.8%、三次市が19.0%⇒18.3%と微減にとどまる。全国の下げ幅(23.0%⇒19.3%)よりむしろ少ない。

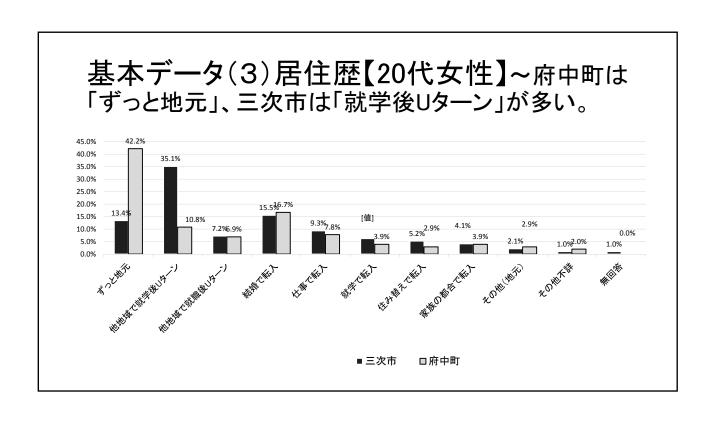
### 基本データ(2)「地元」居住率

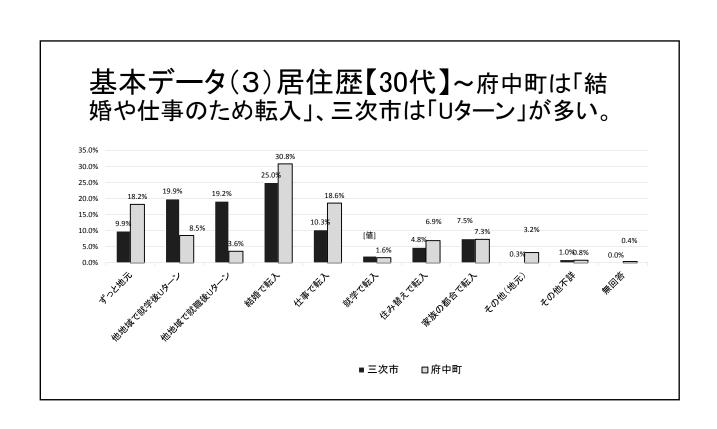
- A) (配偶者あり)親または配偶者の親と同居、または1時間以内に近居~ 府中町66.3%、三次市84.3%
- B) 親と同居、または1時間以内に近居~府中町64.8%、三次市70.3%
- C) 「地元に住んでいる」と回答~府中町44.1%、三次市52.3%
- D) 「ずっと地元」と回答~府中町25.7%、三次市11.2%・・・三次市は通学圏に高等教育機関が乏しく、進学時に相当の割合が地元外(最も多くは広島都市圏)に転出する。府中町は広島都市圏の大学はすべて通学範囲。

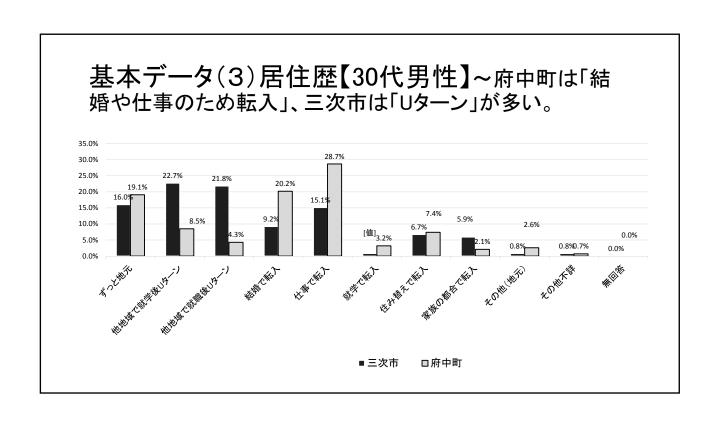
#A)~D)の比率にギャップがある理由。①主観的「地元」定義は、親と同居または隣居のばあいに限られる傾向が強い。②主観的な地元定義が市町村よりも狭い範囲である者が府中町32.4%、三次市34.4%と多い。

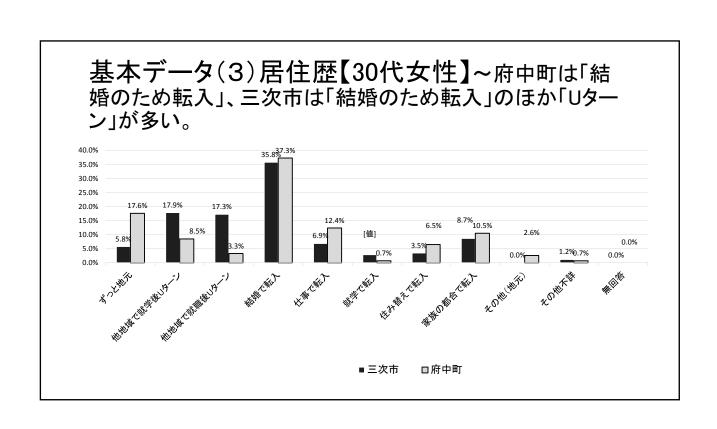




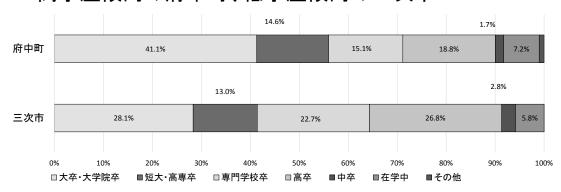






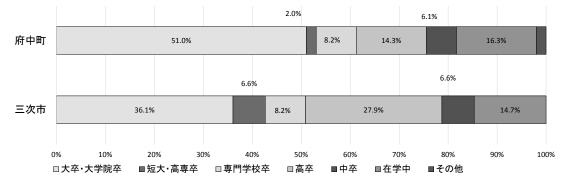


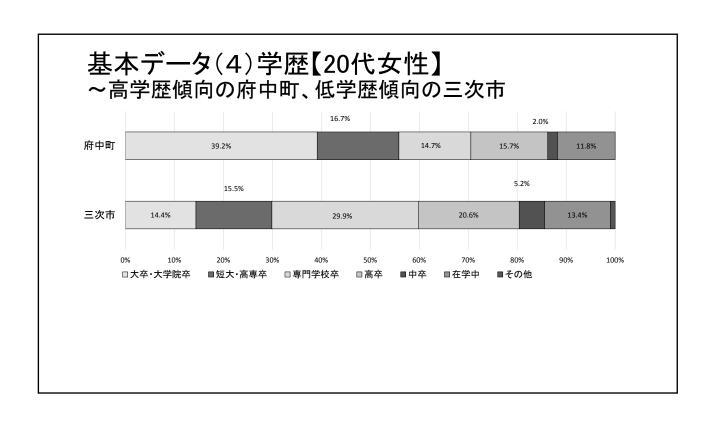
### 基本データ(4)学歴【20-30代】 ~高学歴傾向の府中町、低学歴傾向の三次市

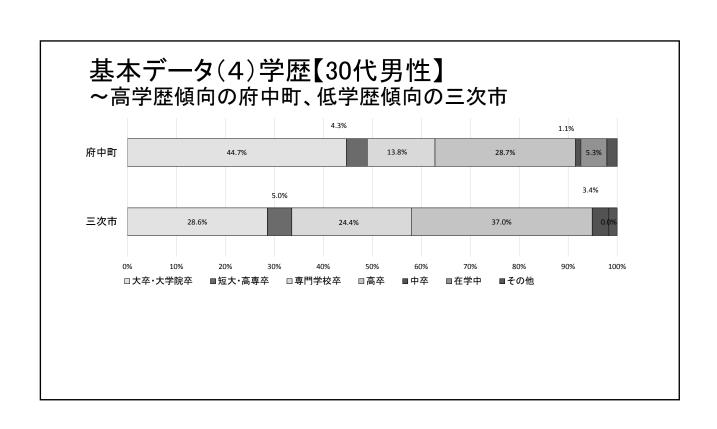


- ・「ずっと地元」・・・府中町では「大卒以上」36.5%で「高卒」16.3%、三次市では「高卒」57.7%で「大卒以上」9.6%。両自治体の学歴比率がまるで異なっている。
- ・「他地域で就学後Uターン」・・・府中町では「大卒以上」53.5%、三次市では「大卒以上」40.2%といずれも比較的高学歴。

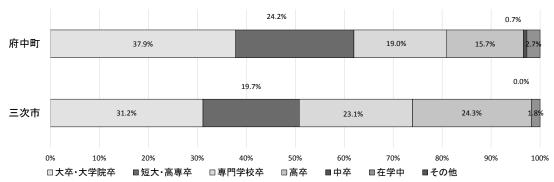
# 基本データ(4)学歴【20代男性】 ~高学歴傾向の府中町、低学歴傾向の三次市









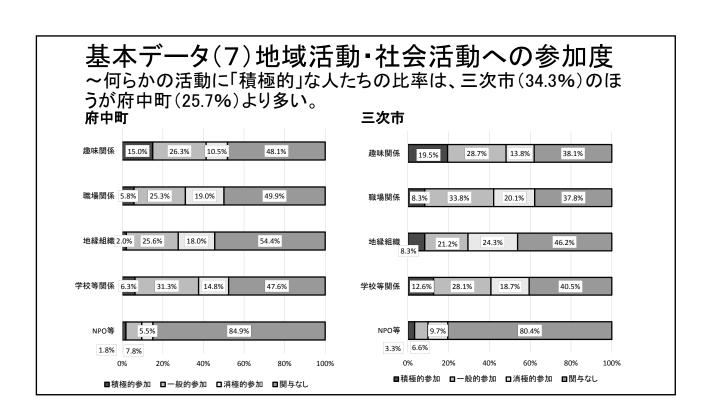


# 基本データ(5)雇用【20-30代】

- ・府中町は、マツダ関連会社が多いために、男性の製造・労務作業従事者が28.4%と多め。その一方、企業城下町というよりは、広島都市圏のベッドタウンとしての性格が強く、業種・職種の多様性が大きい。
- ・三次市は地場産業が弱く、大規模工場が立地しないために製造業の雇用が少なめで、「医療・福祉」「卸売・小売」などの対面型サービスが雇用の核。職種でもサービス職が17.3%と多い。大半が農山村であるが、農林漁業従事者は2.6%のみ。
- 専業主婦比率(30代) (府中町39.9% > 三次市24.3%)
- ・男性正社員のうち製造業比率 (府中町40.9% > 三次市25.3%)
- 女性正社員のうち医療・福祉比率 (府中町37.2% < 三次市53.3%)</li>

# 基本データ(6)収入

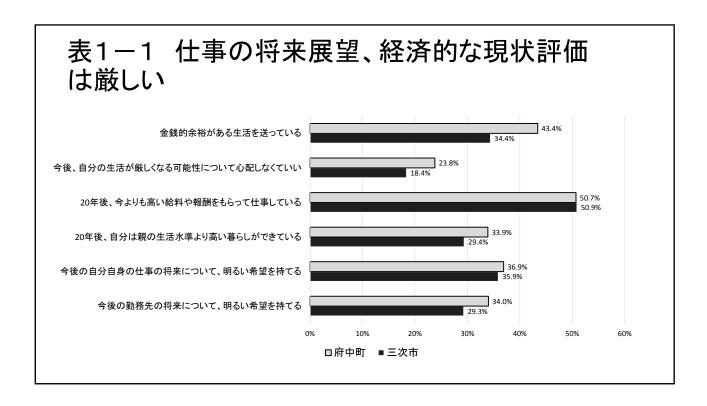
- ~府中町は全国平均水準、三次市は低い水準
- •平均世帯年収
- 全住宅・土地統計調査(2013年度)に基づく推計府中町466.3万円 三次市407.5万円(全国464.2万円)
- ~20-30代調査(グループ化中央値) 府中町525万円 三次市469万円
- •世帯年収1000万円以上(20-30代) 府中町4.4%、三次市4.5%
- •世帯年収400万円未満(20-30代) 府中町29.8%、三次市41.5%



# 論点1 地方は大都市よりも仕事が楽?⇒No

- ●経済面での現状評価・将来展望の厳しさ
- ・ほぼ全業種・全職種について「仕事の将来に明るい希望」がないと回答する傾向があり、右肩上がりの将来展望を描いている者は少ない。現在の有業者のうち「20年後は、今よりも高い給料や報酬をもらって」いると考える人は約半数のみ。正規雇用でも男女とも何とか過半数という程度(府中町58.6%、三次市55.7%)(表1-1)
- ●「地方は大都市より仕事が楽」とは決して言えない
- 週超60時間就労の男性の比率が高い(府中町25.3% 三次市22.2%)。

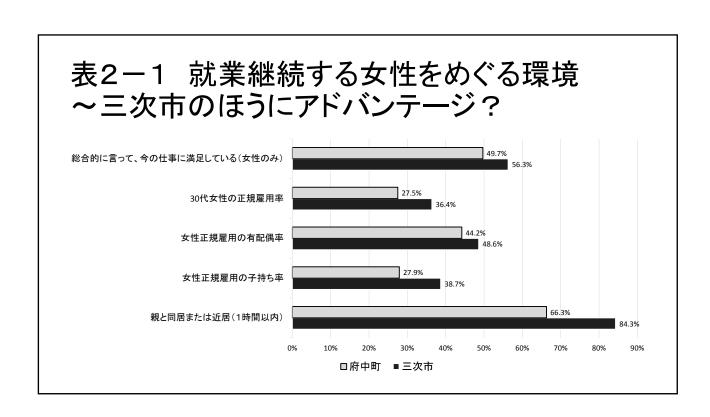
⇒小規模事業所における「人手不足」にともなう長時間労働など、地方に目立つ労働問題に着目する必要(三次市では「自営業・家族従業員」の男性の52.2%が就労時間週60時間以上)。

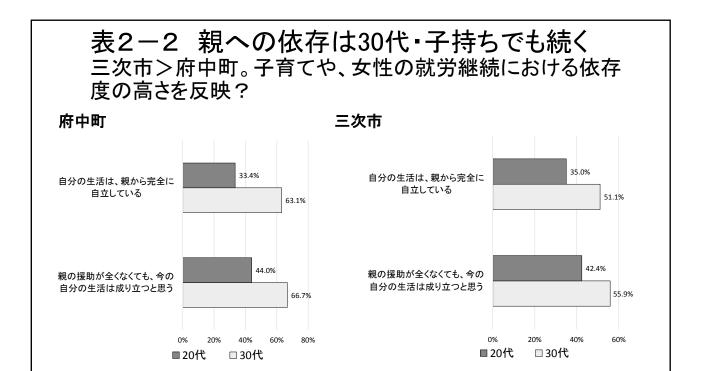


# 論点2 女性が子育てしながらキャリアを継続するうえで、地方暮らしにメリットはあるのか?

#### ⇒ Yes&No

- ・女性についていうと、三次市のほうが、府中町よりも「仕事満足度」 が高いことに注目できる。正社員の有配偶率、子どもがいる者の比率 も多い。専業主婦率も少ない三次市。(表2-1)
- ・背景には親への依存がある。三次市では親(あるいは配偶者の親) と同居または近居(1時間以内)している割合が高い。それと表裏一体 で、「親から自立していない」と考える30代の比率も高い(表2-2)
- ・地元居住には、自分の親または配偶者の親のサポートを得られるというメリットがあり、これは仕事と子育てを両立したい女性にとってプラスに働く。だが、それは家族資源に頼ることのできる「地元居住者」と、頼ることのできない「非地元居住者」との格差を照らし出す。

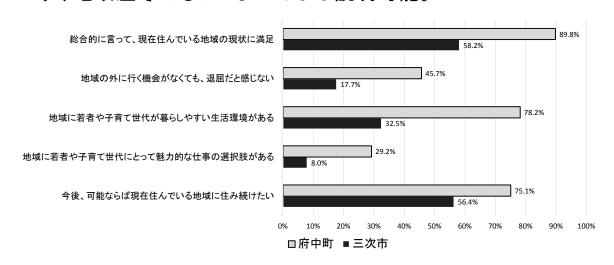


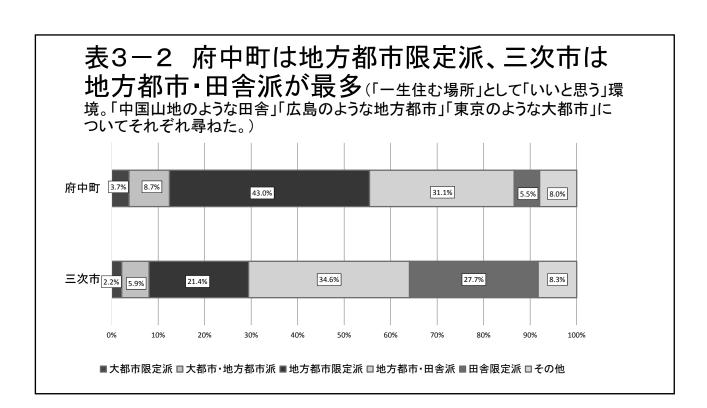


# 論点3 地方の若者は、地方の消費環境に (過剰)包摂されている?⇒Yes, But…

- ・イオンモールのお膝元である府中町は「地域満足度」が89.8%ときわめて高い。「地域満足度」は、経済階層や社会的属性によらず、何よりも、ほぼ地域の消費環境へのアクセス格差によって決定される。(表3-1)
- 一生暮らす場所として「中国山地のような田舎」を好み、「東京のような大都市」「広島のような地方都市」を嫌う人は、三次市でも2割台と少数派。他方、「大都市」志向が強く、「田舎」も「地方都市」も嫌いという人もわずかで、多くは「地方都市」志向。(表3-2)
- •しかし、消費社会的な価値観で決まる「地域満足度」が高ければ、それでいいのか。過剰なまでの「満足度」の高さは、地域社会や日本社会の「他者」や「弱者」への感度の低さに繋がっていないか。

### 表3-1 地域の消費環境・生活環境への評価 ~府中町>三次市。地域満足度に経済階層は説明力を持た ず、地域差そのものによってほぼ説明可能。

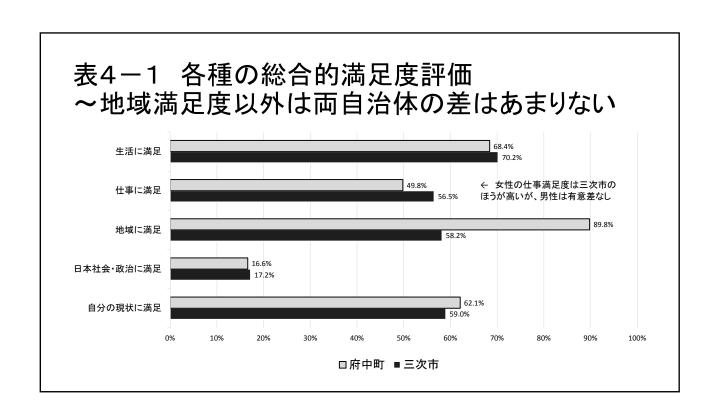


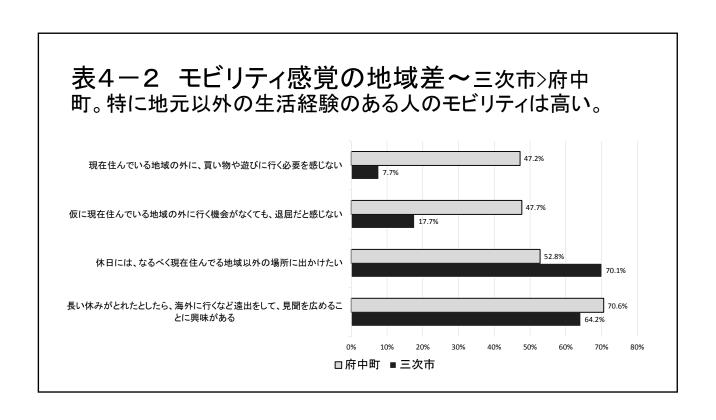


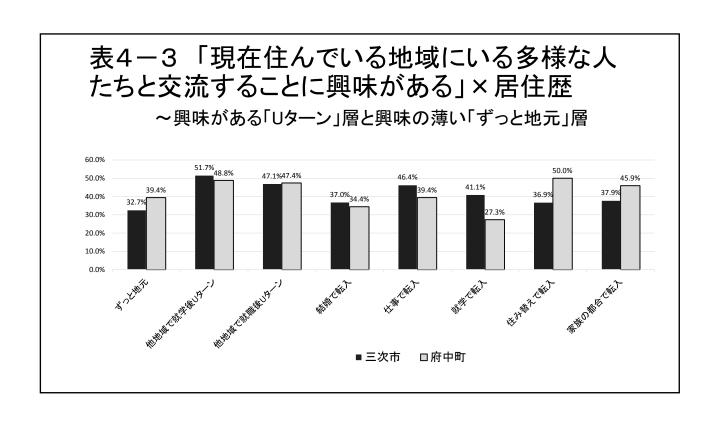
# 論点4 人口減少が進む地方周辺部の満足度の低さは、憂えるべきか? ⇒ No

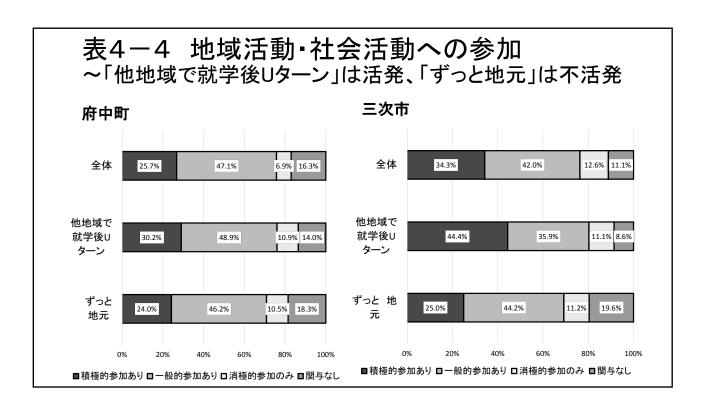
・たしかに消費環境格差を反映し、「地域満足度」は、府中町のほうが三次市よりも圧倒的に低い。だが、その一方で、「生活満足度」などの現状評価については、両自治体の差は無い。(表4-1)「地域満足度」の低さを埋め合わせているのは、三次市の若者のモビリティの高さ。三次市の若者の7割は、休日には住んでいる地域の外に出かけたいと考えており、移動範囲は2時間先の広島都市圏に及ぶ。(表4-2)

・「Uターン層を中心とした地域外での生活経験がある人々」のモビリティは特に著しく、地元と地元外のネットワークを結びつけるハブとしての役割を果たしている。特に三次市で多い「他地域で就学後Uターン」した層。交友関係が広いために、「ずっと地元」にいる人々よりも各種満足度が高い。(表4-3)・・・三次市の過疎の農村の事例。20代後半の同級生の大半が地域外に転出(半数以上は広島都市圏在住)しているが、Uターンした少数の者が核になったfacebookのコミュニティをベースに、地域イベントが活発に展開されている。



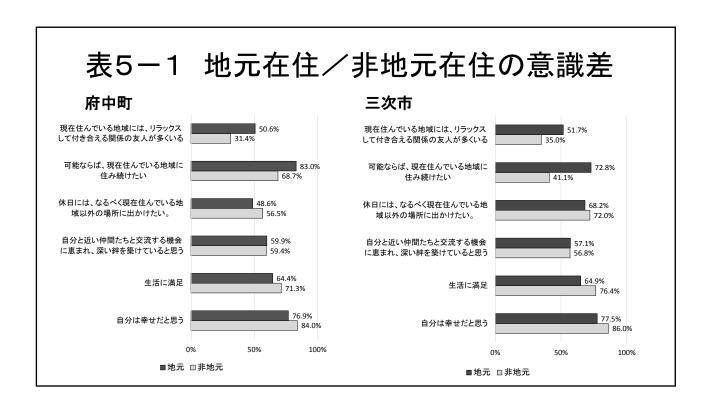






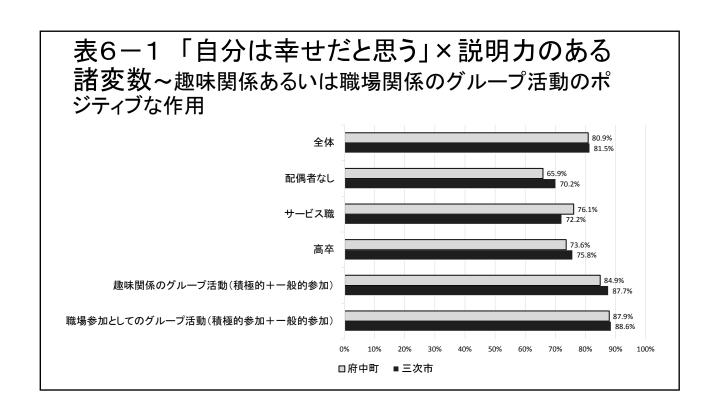
# 論点5「地元在住」の若者たちは、「地元外在 住」の若者たちよりも満足度の高い暮らしを送っ ていると言えるのか? ⇒Yes&No

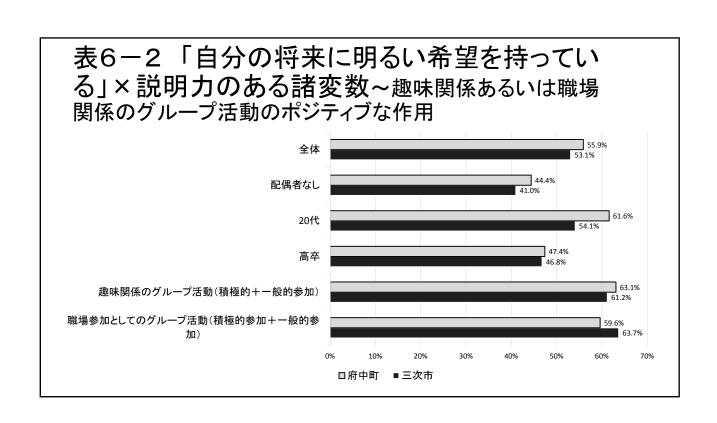
- ・今住んでいる場所が「地元」である人は、「地元外」の人よりも、今住んでいる地域の現状評価は総じて高く、特に地域の人間関係についての満足度が高い。
- ・ただし、住んでいる地域に限らず、交友関係の総合的評価に関わる質問においては、「地元」と「地元外」の有意差はない。「地元外」の若者はモビリティが高く、今住んでいる地域の外に人間関係が広がっているため。「生活満足度」や「幸福度」においては、むしろ「地元外」のほうが現状評価が高い。特に「ずっと地元」にいる者はネガティブ。(表5-1)

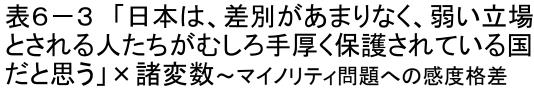


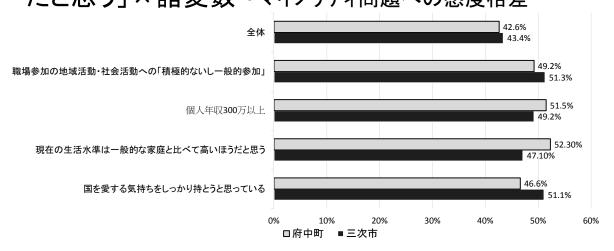
# 論点6 地域活動・社会活動への参加は、地方暮らしの満足度を高めるか?⇒Yes & No

- ・「地域満足度」を目的変数とした重回帰分析では、地域活動・社会活動への参加度には、ある程度の説明力がある。だが、「幸福度」ほか他の満足度についていうと、活動の種類によっては、説明力を持たない。
- ・地縁組織の活動⇒「地元」出身者の関与が強く、「非地元」は弱い。地域や国への愛着と結びつく。ただし、「生活満足度」や「幸福度」とは無関係。
- ・職場組織の活動⇒「仕事満足度」に対して説明力。同僚などの組織内コミュニケーションと関わり、「生活満足度」や「幸福度」(表6−1)や「自分の将来の希望」(表6−2)にも繋がるが、「差別や弱者」問題などの異質性への共感には繋がらない。(表6−3)
- ・趣味関係の活動⇒仲間集団に限らず、異質な人々の交流への満足度とも関係し、政治・社会参加への関心にも繋がる。「幸福度」(表6-1)や「自分の将来の希望」(表6-2)に繋がる。



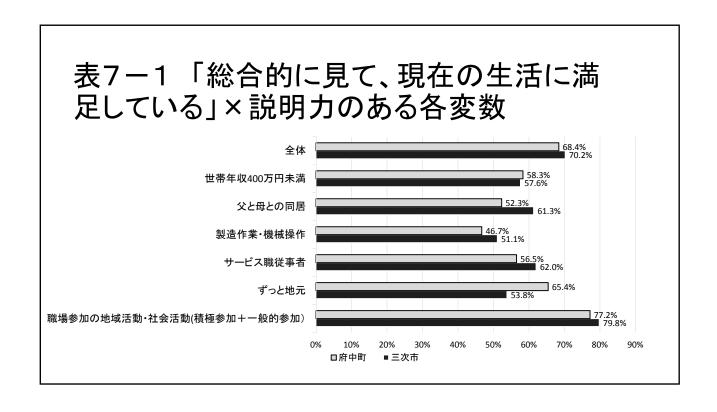


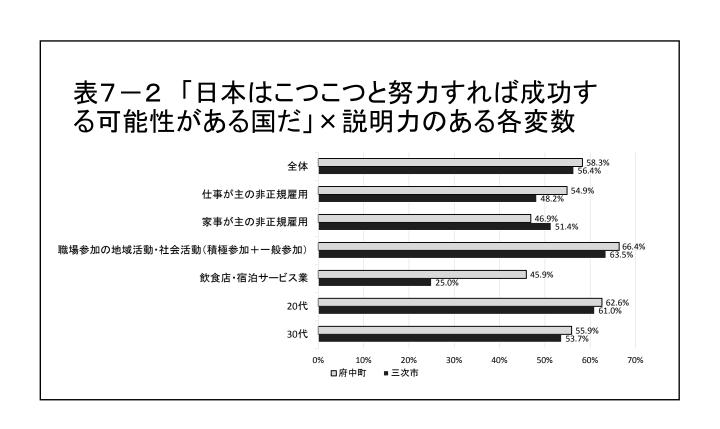


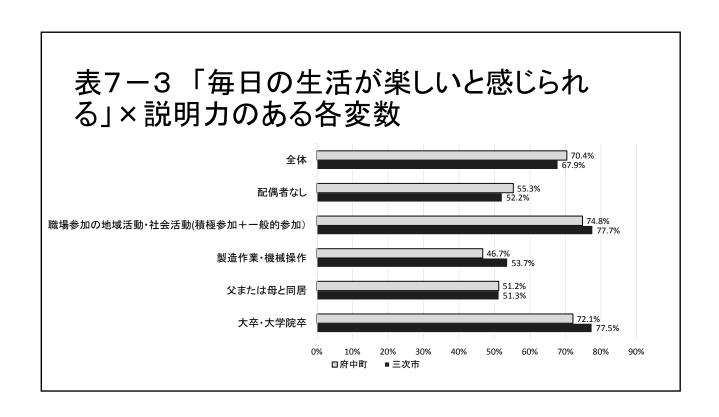


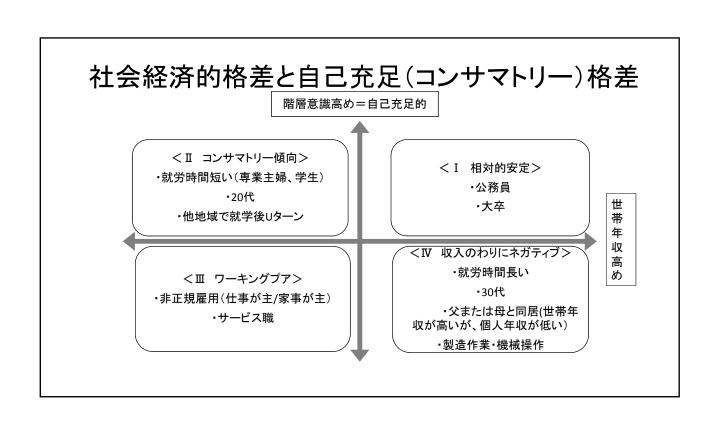
# 論点7 地方に多い低収入・低階層な人たちは、 上昇志向のないぶん、現状肯定的であるのか? ⇒No, But…

- 社会経済的に厳しく、階層意識も低い「非正規雇用」(仕事が主、家事が主)と、「サービス」職従事者は、「生活満足度」(表7-1)ほか、各種満足度が低く、将来展望も暗い。社会意識としてもネガティブ(表7-2 「日本はこつこつと努力すれば成功する可能性がある国だ」に否定的)。社会経済格差から考えて逆転現象は存在しない。
- ・ただし、「階層上昇」が困難な状況にあって、階層格差には説明力がなく、人間関係などの生活のクオリティの充足感の格差による分化のほうが重要となる質問項目も多い。いわゆる「自己充足(コンサマトリー)」格差。例えば、「毎日の生活が楽しいと感じられる」かどうかについて、収入や雇用形態などは説明力を持たない。(表7-3)









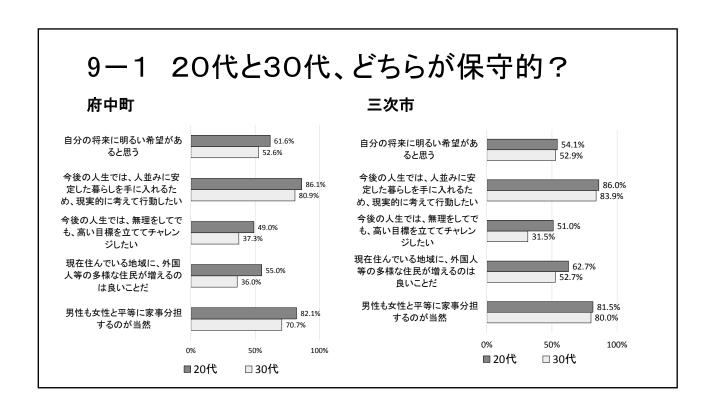
# 論点8 地方の若者は「自己充足的」な生き方を 志向したダウンシフター的傾向が強いと言えるの か?⇒Yes&No

- 経済的にはネガティブな状況でも、人間関係などの生活のクオリティの充足感を相対的に重視するゆえに、現状評価を高く見積もる「自己充足的(コンサマトリー)」な回答傾向が現れている質問項目がいくらかある。
- そして、この自己充足的な回答傾向は、「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」(府中町40.2%、三次市41.1%)という、地方暮らし言説にしばしば登場する「ダウンシフター的な価値観」と親和的である。右肩上がりの社会でないことを受け入れている人ほど、各種の総合的な満足度が高いということ(表8-1)
- その一方、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法があるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」には府中町21.4%、三次市20.1%の人しか賛同していない。社会経済的に余裕のない多数派は、ダウンシフターにはなりきれないということ。理想と現実の乖離。

#### 自己充足的傾向と「ダウンシフター」 表8-1 ~ 「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」に肯定する 人たち(=ダウンシフター)は、収入が高くないけれども、各種満足度が高い。 府中町 三次市 生活に満足 生活に満足 68.4% 70.2% 57.9% 仕事に満足 仕事に満足 T 56.5% 地域の現状に満足 地域の現状に満足 89.8% T 58 2% 日本社会・政治の現状に 日本社会・政治の現状に 23.1% 24.2% 満足 満足 62.6% 69.1% 自分の現状に満足 自分の現状に満足 世帯年収400万円未満比 世帯年収400万円未満比 43.0% 29.2% T 27.5% 婡 100% 0% 50% 100% ■ダウンシフター □全体 ■ダウンシフター □全体

# 論点9 地方のほうがとくに「保守的」価値観が強いと言えるのか? ⇒No, But…

- 全国調査においても指摘されているように、階層と関係なく、20代は30代よりも金銭感覚は堅実である(表9-1)。また、就職不安が強いためか、「学生」は他の同世代に比べて、自己実現志向(チャレンジ志向、脱組織志向、個性重視志向)が弱い可能性。その意味では保守的とも言える。
- だが、政治的な「保守性」がとりたてて目立つわけではない。「今の日本政府を信頼している」のは府中町19.1%、三次市17.6%のみ。注目したいのは「田舎」である三次市のほうが府中町よりも地域の人口減少に対する危機感が強く、変化を望む傾向が強いこと。男女の平等な家事分担、外国人受け入れについても積極的。
- ・20代のほうが30代よりも「自己実現志向」が強く、価値観の保守化の 兆候も見られない。(追跡調査ではないので、年齢・コーホート・時代の効果 は区別できないが)



# 問題提起

●行政の住民満足度調査では、満足度が高ければよいということになる。だが、むしろ、「満足できる人」と「満足できない人」との間には、様々な分断線に沿ったリアリティ・ギャップがある。そこに注目したい。

 $\downarrow$ 

- ●「地方の若者」を貫く様々な分断線をこえて、「対話」をつくる。自らと 立場の異なる人たちの声に耳を傾け、地域のダイバーシティを豊かさ にする。
  - \* 地方中枢拠点都市圏/周辺地域
  - \*地元出身/非地元出身
  - \*地元を出たことが無い者/地元外に社会関係が広がる者
  - \*収入・学歴などの社会階層による分断/雇用・職業による分断

### 執 筆 者

〒716-0018 岡山県高梁市伊賀町8 吉備国際大学 社会科学部 准教授 善田竜蔵 TEL. 0866-22-9454 (代表)

電子メール; kutuwada@mve.biglobe.ne.jp

平成26年度 公益財団法人マツダ財団委託研究 「広島20-30代住民意識調査」 報告書(統計分析篇)

発 行 者 公益財団法人 マッダ財団

〒730-8670 広島県安芸郡府中町新地3番1号

マツダ株式会社内

Tel (082)285-4611 Fax (082)285-4612

e -mail mzaidan@mazda.co.jp

ホームへ゜ーシ゛ http://mzaidan.mazda.co.jp

発 行 日 平成27年7月 初版発行

平成 28 年 2 月 第 2 版発行

印 刷 マツダエース株式会社